

# 第19回京都大学全学教育シンポジウム

京大流・未来を拓く人の育て方

報告書

2015

## 目 次

1.	開催の趣旨	1
2.	日程・プログラム等	1
3.	開会	4
4.	開会挨拶	5
5.	基調講演「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」	7
6.	報告:10学部の特徴ある教育の報告	21
7.	講演:「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」	34
8.	報告①:「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」	46
9.	報告②:「入学者選抜と特色入試」	52
10.	報告③:「平成 28 年度からの教養・共通教育」	61
11.	パネルディスカッション「京大流・未来を拓く人の育て方」	68
12.	閉会挨拶	94
13.	アンケートの結果について	95
14.	参加者名簿	120

※ 部局名・職名は平成 27 年 9 月 2 日現在



## 1. 開催の趣旨：

平成8年以来、京都大学全学教育シンポジウムでは、様々な教育課題を取り上げてきた。これまでは教養・共通教育の理念と在り方に焦点をあてて議論を行い、主体的学びのあり方や方法論、実践事例についての議論につなげてきた。今回は入試や教育における学内での特色ある取り組みに目を向け、積極的な議論や情報共有を通じて、学内での取り組みの活発化・改善に資する事を目的としたい。

午前の部では、山極壽一総長の基調講演に続いて、部局の特色ある教育について、10学部の例を映像で紹介したのち、質疑応答を行い、情報共有を行う。

午後の部では、社会からのニーズへの対応と京大らしさの両立などについて、北野正雄教育・情報・評価担当理事に講演をお願いする。講演に引き続いて、高大連携、特色入試、国際高等教育院の改革について報告いただいた後、これまでの講演・報告をふまえ、「京大流・未来を拓く人の育て方」というタイトルで、パネルディスカッションを行う。今回のシンポジウムを通じて、現在の取り組みの改良、新たな取り組みの企画など、様々な形で活かされることを期待したい。

## 2. 日程・プログラム等

【テ ー マ】京大流・未来を拓く人の育て方

【日 時】平成27年9月2日（水）

### 【プログラム】

- ◆基調講演 「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」
  
- ◆報 告 「10学部の特色ある教育の報告」
  
- ◆講 演 「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」
  
- ◆報 告
  - ①京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて
  - ②入学者選抜と特色入試
  - ③平成28年度からの教養・共通教育
  
- ◆パネルディスカッション 「京大流・未来を拓く人の育て方」



(参考) 全学教育シンポジウム開催一覧

	日程	場所	テーマ		参加者			
			主	副(分科会テーマ)	計	教員	事務職員	
第1回	H 8. 8.28 ～8.29	比叡山国際観光ホテル	全学共通科目をめぐって	・一般教育科目の内容、学生集団の変化 ・学生の質の変化、教育上の難しい点 ・全学共通科目の具体的な問題点	・語学教育 ・教養教育とは何か	201名	185名	16名
第2回	H 9. 8.19 ～8.20	比叡山国際観光ホテル	教養教育について	・A群科目について ・C群科目について	・B・D群科目について ・人間形成と少人数セミナーについて	201名	186名	15名
第3回	H10. 8.20 ～8.21	ラフォーレ琵琶湖	学部教育から見た教養教育について	・少人数セミナーについて ・理科系の教養教育と基礎科目で何をどのように教育するのか ・外国語教育に何を求めるのか	・新しい教養教育創出にむけて	197名	182名	15名
第4回	H12. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価	特にテーマは設定せず「京都大学における教育評価」をテーマに討論		125名	102名	23名
第5回	H13. 8.31 ～9. 1	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価(授業評価・成績評価等)の在り方	テーマ:教育実態とその改善 ・文系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価	・ファカルティ・ディベロップメントの在り方	178名	149名	29名
第6回	H14. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	新しい教養教育の在り方 —基本理念・実施機構・教育評価—	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価-「京都大学卒業」とはなにか-		240名	207名	33名
第7回	H15. 9. 5 ～ 9. 6	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“ミニマムリクワイアメント”をどう考えるか			240名	205名	35名
第8回	H16. 9. 9 ～9.10	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の“質の保証”とは—教育の改善と評価の視点—	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とそのためのシステム—全学出動体制は可能か— ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成		242名	210名	32名
第9回	H17. 9. 1 ～9. 2	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価	・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりにどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか		229名	199名	30名
第10回	H18. 9.14 ～9.15	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	責任ある教育体制とは何か —京都大学における教育の将来像を問う—	・研究所・センターの教育参加に向けて—教育は権利か義務か?— ・理系教育における6年一貫教育の実現は?—理系における基礎教育科目と専門科目の融合— ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?		240名	193名	47名
第11回	H19. 9.6 ～9.7	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の将来像を問う —第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部、大学院教育の現状と課題を考察する—	・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る ・京都大学における英語教育の現状と課題—グローバル化社会における英語教育のあり方を探る— ・学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題—世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る—		233名	200名	33名
第12回	H20. 9.12 ～9.13	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウェスティンホテル淡路	京都大学における教育の現状と将来を考察する —第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて—	・全学共通教育の現状と課題について ・本学の教育の国際化に向けて ・教育における研究所・センターの役割について ・これからの職員の役割について		262名	211名	51名
第13回	H21. 9.24 ～9.25	時計台記念館	学士課程教育を再考する —第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—	・単位の実質化等について ・本学における全学共通教育の在り方について ・初年次教育について ・情報教育の在り方について ・学生生活・学習支援の在り方について	・教育の国際化について	235名	189名	46名
第14回	H22. 9.10	宇治おうばくプラザ	京都大学の直面する教育課題について～第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって～	・全学共通教育の今後の展開について ・教育の国際化について ・少人数教育について	・初年次教育について ・学生の就学支援について	241名	192名	49名
第15回	H23. 9. 2	京都大学桂 船井哲良記念講堂・船井交流センター	京都大学における教育の現状と今後を考える	・京都大学の『教育』:問題意識の温度差 ・大学教育をめぐる状況 ・キャンパスミーティングからみえた大学教育の今後 ・初年次教育について ・大高接続と大学教育	・グローバル化社会と大学教育	219名 学外から6名	171名	42名

	日程	場所	テ ー マ		参加者		
			主	副 (分科会テーマ)	計	教員	事務職員
第 16 回	H24. 9.12	京都大学桂 船井哲良記念講堂・船井交流 センター	これからの共通・教養教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都大学の考える教養教育</li> <li>・共通・教養教育企画・改善小委員会</li> <li>・高校の学習指導要領と入試制度</li> <li>・学業・成績評価の国際標準と通用性</li> <li>・グローバルキャリアの中での語学力と教養力</li> </ul>	232 名 学外か ら 2 名	188 名	42 名
第 17 回	H25. 9. 6	京都大学桂 船井哲良記念講堂・船井交流 センター	国際高等教育院の発足と 教養・共通教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私の期待する全人教育</li> <li>・国際高等教育院・企画評価専門委員会報告</li> <li>・リベラルアーツと大学教育</li> <li>・教養教育の理念と京都大学の教育改革</li> </ul>	262 名 学外か ら 3 名	207 名	52 名
第 18 回	H26. 9.16	京都大学桂 船井哲良記念講堂・船井交流 センター	大学教育における主体的 な学びとは	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際高等教育院における教養・共通教育の改革</li> <li>・基幹教育についてーアクティブ・ラーナーの育成を目指してー</li> <li>・三重大学における PBL 教育の全学的展開</li> <li>・本づくりを通じた大学生の主体的な学び ～大阪大学シヨセキカプロジェクトの事例～</li> <li>・主体的な学びをどう育むか ー教育文化・方法・環境・制度の観点からー</li> <li>・京都大学における主体的な学びとは</li> </ul>	230 名 学外か ら 3 名	181 名	45 名

### 3. 開会

**司会（高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈）** 開催時間が近づきましたので、本日のスケジュールをご案内いたします。

北野正雄 教育・情報・評価担当理事からの開会の挨拶の後、山極壽一 総長から「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」と題して基調講演をお願いします。続いて、松下佳代 高等教育研究開発推進センター教授が、10学部の特色ある教育について、映像とともに紹介し、各学部の代表の先生からご説明いただいたうえで、質疑応答を行います。各学部のコメンテーターの先生は、前方にご着席いただきますようお願いします。

休憩は12時10分からです。昼食は、お弁当を用意しておりますので、1階の国際連携ホール又はこの会場にて、お取りください。

午後は、13時30分から北野教育・情報・評価担当理事に「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」と題して、講演をお願いします。スムーズに始めるために、できましたら5分前にはお戻りください。続いて、14時から「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」と題して、森脇淳 理学研究科長／教授に、「入学者選抜と特色入試」と題して、木南敦 教育担当理事補／法学研究科教授に、「平成28年度からの教養・共通教育」と題して、喜多一 国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授に、以上3名の先生方からそれぞれ報告を行っていただきます。

15時頃から20分間の休憩をはさんで、「京大流・未来を拓く人の育て方」と題して、パネルディスカッションを行います。コーディネーターは飯吉透 教育担当理事補／高等教育研究開発推進センター長が務め、パネリストとして、山極総長、北野教育・情報・評価担当理事、森脇理学研究科長／教授、木南教育担当理事補／法学研究科教授、喜多国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授、柴浩司 大阪府立大手前高等学校長、仲暁子 ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEOに登壇していただき討論を行います。ここではクリッカーを使う予定と聞いております。情報交換会は、17時15分から、「カフェ アルテ」で行います。

以上が、本日のスケジュールとなっております。

みなさまにお断りを申し上げます。本日のシンポジウムにおきましては、ICレコーダーによる録音、速記者による記録、記録写真を撮らせていただくことをあらかじめご了承ください。写真につきましては、個人が特定されない形で、各種刊行物に使用させていただきます。あらかじめご了承ください。よろしく願いいたします。

最後になりましたが、私、本日の進行役をつとめます、高等教育研究開発推進センター准教授の田口真奈と申します。シンポジウム終了まで、どうぞよろしくお願い申し上げます。

**司会** それでは、ちょうど定刻になりましたので、ただいまより第19回全学教育シンポジウムを開催いたします。

最初に、北野正雄 教育・情報・評価担当理事より、開会のご挨拶をお願いいたします。

拍手でお迎えください。

(拍手)



## 4. 開会挨拶

教育・情報・評価担当理事 北野 正雄



皆さん、おはようございます。教育・情報・評価担当理事の北野でございます。

本日は、京都大学全学教育シンポジウムにお越しいただきまして、本当にありがとうございます。雨も上がって大変よかったと思っております。

きょうは、タイトルとしては「京大流・未来を拓く人の育て方」という副題がついております。ここで「人材」という言葉を使いたくなるところですけれども、総長が「人材」は余り使わないようにということで、人の育て方というこだわりが入っております。

きょうは学外からゲストといたしまして大手前高校校長の柴浩司先生に来ていただいております。また、ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEOの仲暁子様にも参加いただくということでございます。よろしくお願ひしたいと思ひます。

先ほどご紹介がありましたように、この全学教育シンポジウムは平成8年から始まりまして19回を迎えるわけでございます。これまで教養・共通教育ということをテーマに議論がされてきました。議論ばかりして実行が伴わないという批評家的コメントのあった時期もありますけれども、それを脱却しまして、平成25年には国際高等教育院が発足いたしまして、教養・共通教育の改革がスタートできたということでございます。これはまさに全学教育シンポジウムの成果であると言ってもよいと思っております。国際高等教育院は、平成28年度から、今まで議論してきたカリキュラムを本格的に実施することになっております。また、時間割のあり方も大きく変えて、構造化された時間割ということで、いよいよ来年度からスタートしていくこととなります。また、外国人教員による英語での教養・共通教育も着実に進んでおります。吉田南は雰囲気少し変わってきたなという印象を皆さんお持ちかと思ひます。国際化が進んできているということでございます。また、言語教育のためのi-ARRCの建物がこの年度末には完成する予定でございます。

一方、入試に関しましては、平成28年度から京大特色入試がいよいよ始まるわけですが。これは学部・学科別に入試を実施するということに特徴がございます。本日は募集要項の資料を入れておりますけれども、ぜひごらんいただきたいと思ひます。高校生にとってはかなり背伸びをして入ってくるという感じになりますが、やはり学部・学科で何をやるかということをしっかり見て、来てほしいということでございます。マッチング重視、これは後ほど私が講演の中でご説明させていただきますけれども、学生と学部・学科のマッチングということをしっかりとしていこうということでございます。

また、入試に並行して、高大接続、高大連携の活用ということも大学としては積極的に進めていきたいと思ひます。入試というのはどうしても選別するということが重視されるので、先ほど言いましたマッチングというところの機能が必ずしも十分発揮できない。やはり高校生に大学のことを知って来ていただくということが何より大事で、高大接続と入試というのは車の両輪のような役割をしているというふうに認識をしております。

それから、これも教育院マターですけれども、初年次教育の充実ということも非常に重要です。高校生が大学に入って、うまくなじめなくて落ちこぼれるというケースが非常に多くなっております。そういう意味では、入ってからのマッチングということもケアしていく必要があると思っております。そういったことがきょう議論できればよいなと思っております。

さらに学部教育での取り組みにつきましても、先ほどご紹介ありましたように、ビデオで見てください。これはここからいろんな話題が展開していけばいいなという思いで、特にきっちり組み立てられてはいなくて、いろんな感想を持っていただいたり、議論の着火点、発火点になればいいかなと思っております。

それから、パネルではまさに人の育て方というさらに広いスコープでのお話になると思います。ルースエンドというか、来年に向けたネタもいろいろ拾っていただければ、このシンポジウムの意義になるかと思います。

長い1日ですけれども、ぜひよろしくおつき合い願いたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

**司会** ありがとうございました。

それでは、続きまして山極壽一総長より、「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」と題して基調講演をお願いいたします。

35分と短いので、質疑応答の時間を取ることができません。封筒の中にこうした質問票が入っておりますので、質問のある方はそちらに記載いただければ、後ほどパネルディスカッションの中で取り上げる時間がございますので、そのようにお願いいたします。

それでは、総長、よろしく申し上げます。



## 5. 基調講演：「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」

総長 山極 壽一

皆さん、おはようございます。

実は、この全学教育シンポジウムに参加するのは初めてでございまして、非常に戸惑っております。趣旨をよく理解してないかもしれませんので、ぜひ後ほどご叱責いただきたいと思っております。

随分たいそうな題をつけましたけれども、新聞にも書きましたように、ITを使った教育というのをちょっと疑問視しています。やはり現在の教育で一番欠けている点是一对一、あるいは双方向的なアクティブラーニングだろうと思っております。実は10月からMOOCで講義を配信することになりました。その理由は、京都大学のオリジナルな学問をもっと世界に出したほうがいいのではないかと。これはやはり全世界共通の言語である英語で発信するのがよろしかろうというので、これは飯吉さんにそそのかされたのですが、自らそういう先陣を切ろうと決心したわけでございます。

「Evolution of the Human Sociality」という題で、6回の講義をやらうと思っております。これは私の先生のそのまた先生の今西錦司先生が、第2次世界大戦直後にサル学というものを創始されまして、サルをもとに人間を考えるという学問をつくりました。その後裔でいろんな地平が広がっております。それをなるべく簡潔に紹介して、それを見ていただいた方々に京都大学を注目してもらいたいと思っております。

トレーラーの部分を少しお見せしようと思えます。

〔映像〕

こんなものです。あほなことやるなというご意見もあるかもしれませんが、こういうものを窓口にして、いろんな可能性を広げていきたいと思っております。

こういう6回の講義を配信するつもりですが、きょうのテーマとして、大学教育の直面する課題というのをまず少しお話しておこうと思えます。

これは皆さんもよくご存じだと思いますけれども、18歳人口が少なくなってきた、大学へ入学する人数が落ち込んでいくだろうという予想。大学進学率が50%ちょっとというところまで止まっているということですね。それから、先ほど北野先生がおっしゃいましたが、高大接続、入試改革が非常に重要な課題となっています。ほかのOECD諸国に比べて教育費が非常に低迷しているということ。それから、大学法人化以降、自己資金化が奨励されているにもかかわらず、制度上の制約等がありまして、なかなかそれが進んでいない。それから、最初に申し上げましたIT化をどういうふうに取り込んだらいいのか。そして、世界がどんどんグローバル化するなかで、それに向けての教育を我々はせざるを得ない。それから、国際化ですね。きょうも随分その国際化という言葉が並ぶと思えますけれども、特に巷で言われているのはランキングです。このランキングをどう我々は考えていくのかということが非常に重要です。それに伴って、やはり学生のモビリティというものが影響されます。そして最後に、これは非常に重要な課題ですけれども、産業界からの要請にどう応えていくか、地域からの要請にどう応えていくかということが必要だと思えます。

これはこの後の皆さんの発表にも出てくると思えますので余り詳しくは言いませんけれども、先



ほど言いました 50% ちょっとのところまで大学進学率が低迷している。非常に急速に伸びてきたのですが、これが伸びない。それが一番の問題だと思います。そして、他の諸国に比べまして、高等教育の役割ということについては、日本ではきちんとまだゴールに向かって議論がなされていないと思います。中国、韓国あたりでは、非常にシンプルな目的を持って今、上昇軌道にあるのですけれども、日本はまだその 10 年先、20 年先を見据えた役割の議論が進んでいないと思います。

これは大学進学率の国際比較ですけれども、これも日本は非常に低い地位にございます。それから、日本と関係の深い国々の高等教育機関の大学進学率の推移を見ますと、日本はここですか。ほかのアジア、あるいはアメリカ、イギリスに比べて低迷していると言えます。

日本の大学数は 1990 年代に一気に伸びました。今、788 ありますけれども、基本的には私立の増大というのが大きい。国立は現在 86 ございますけれども、100 いかない数でとどまっているところでございます。私学の伸びというのは、戦後、非常に顕著にあらわれていると言えます。

もう一つ、これは一般に使われる円グラフですけれども、日本の大学の割合というのは、私学が中心であって、国立大学は大体 25% ぐらいです。学部学生に比べて大学院は国立が多く受け入れているという特徴は、アジアのほかの諸国、韓国や中国と似ていると言われています。ヨーロッパの代表的な国、イギリス、フランス、ドイツというのはほとんど公立・国立の大学が学生を育てている。日本はアメリカ型であってヨーロッパ型ではないと言われているのですが、これは果たしてそうかというのはきちんと議論しなくてはいけない問題だと思います。特に韓国と比べてもらうと、韓国は私大が基本的に大学院の学生を多く受け入れています。日本とは違うのですね。ですから、日本の国立大学の役割というのは、こういったものを少し細かく分析する必要があるのではないかと思います。

これは言わずもがなですが、教育投資が非常に日本は低迷しています。ほかの OECD 諸国に比べると余りにも情けない状態にある。

そして、国立大学の運営費交付金は、法人化後の 11 年間で毎年 1.3% から 1% 削られていますから、1,500 億円に上る金額が削減を受けていて、人件費をぎりぎり賄っている。あるいは大学によっては運営費交付金で人件費すら賄えない状態に今あるということは、皆さんもご承知おきいただきたいと思います。昨今、諸経費は高騰しております。消費税率が引き上げられますと、負担増が 120 億円になる。電気料金が値上げされる、そして電子ジャーナルが値上げされるといったように、どんどん経費は高騰していきます。にもかかわらず、運営費交付金が低迷しているというのは、我々はどんどんそれを人件費のほうに還元して支出をせざるを得なくなり、物件費を賄えなくなる可能性が高いということになります。

これは国立大学の教員数と常勤教員人件費の推移でございますが、これを見ますと、どんどん人件費は少なくなっているにもかかわらず、教員数は微増していく状態にあります。この乖離は何としてでも解消しなくてはならない問題だと思います。常勤教員の中でも特に若手教員が減少していることが指摘されております。平均年齢が平成 16 年度から 25 年度の 10 年間で 1 歳ぐらい高まっているということは、35 歳未満の割合が低まっているということで、若手教員をもっと積極的に採用できるような環境を整えていかなければ、教育に支障が起こるだろうということでもあります。

現在、任期制の教員が増えておりまして、特に若手の教員の中で任期制の教員が多く、長期間を見通した研究・教育というものができなくなっている状態にあるということでございます。

財政教育支出の対 GDP 比は、日本は非常に低い状態にある。これは皆さんに申し上げても仕方がない話ですが、いろんなところで日本は最低レベルです。これは現在、国立大学協会を通じて改善を要求していますが、なかなか財務省は首を縦に振りません。現在、施設についても非常に重要な問題になっています。老朽化が激しくなり、なおかつ東日本大震災以降、耐震化ということを重

点項目としてやってきましたが、なかなかそれが実現しないということで、キャンパスの整備が著しくおこなわれているという状況です。国際化を進める上では、この環境整備を早急にやらないと、海外の大学に比べて非常に魅力に乏しくなるということが懸念されるわけでございます。

入学定員は、平成16年度位をピークにして、特に大学院の修士課程の入学定員が増えました。学部のほうはほとんど変わってないのですが、大学院の修士課程が最近増加傾向にあるということでございます。ところが、大学院、これは国公立合わせてのものでございますけれども、定員割れが続いています。特に博士後期課程の定員がどんどん割れてきている状態になって、大学をもっと減らしたほうがいいのか、特に大学院の定員をもっと縮小したらいいのかという声が出てくるのはこのためでございます。

一方、京都大学を見ますと、教員数はこのところほとんど変わっていません。しかし、学生数は漸次伸びてきております。これは留学生数が増えているとともに、学生が京都大学で大きな財産になっているということをあらわしていると思います。一方、教員数と事務職員数はほとんど変わっていませんので、教員、事務職員の負担というのは年々ふえているということがここですかがええます。学部と修士課程と博士後期課程を比べて見ますと、21世紀になって大体落ちついてきていますが、その前に特に修士課程の人数が増えたということがわかりただけるといいます。

外国人研究者等を見ますと、学部の留学生数、それから外国人修士課程学生数、外国人研究者受入数ともに最近になって少し増えております。研究者の人数は東日本大震災の直後に少し減りましたが、それが今、回復してきている状況にあるということでございます。

ちょっと見えにくいかもしれませんが、京都大学は、国際化という視点に立つと、海外にたくさんMOUを結んでいる大学を持っていることが強みでございます。現在142の海外の大学とMOUを結んでおります。

そして、この海外の拠点の設置数を見ますと、京都大学はダントツにトップでございます。51拠点を持っている。特に中国と米国に多いということになります。日本の中で比べますと、全学の拠点としては他大学とほとんど変わらない。むしろ少ないということです。ほとんどが部局の拠点として運営されているということでございます。

それから、京都大学が受け入れている留学生となると、ほとんどがユーラシア、アジアで、中国がダントツに多いですね。それからヨーロッパ、アメリカ、中東、アフリカということになります。

海外から来る学生、海外に行く学生を比べて見ますと、海外から来る学生の80%はアジアからの学生です。ところが、海外へ行く学生はアメリカへ行く学生が多くなっているということが特徴でございます。この間にかかなりのアンバランスがあるということです。

それから、研究者で見ますと、これは比較的似たようなバランスをとっています。海外から来る研究者、海外へ行く研究者、ともにアジアが一番多いですが、大体同じような比率でございます。

一方、先ほど施設整備が喫緊の課題であると申し上げましたが、外国人留学生の住居形態別割合を見ますと、京都大学あるいは国立大学が設置する留学生の宿舎に入っている学生というのはそのうちの4分の1ぐらいです。これは全国の国立大学の平均に比べますと劣っているということになります。ですから、京都大学としてもこれから留学生の宿舎をどんどんつくっていかねばならない段階にあるということでございます。学部と大学院を比べますと、やはり大学院のほうに宿舎を提供できていないということになります。研究者のほうは、それに比べて半分以上は我々が提供する宿舎に収容できているということになります。

現在私は国立大学の将来ビジョン委員会に出ておまして、10年、20年先の将来ビジョンを今、考えているところですが、そこで立てている将来ビジョンを少しご紹介申し上げます。ポイント1



からポイント2までございます。ポイントの1として、優れた資質・能力を有する多様な入学者の確保と受け入れ、環境の整備をしようということを6項目にわたって考えています。ポイント2では、産業界あるいは国からの強い要請もございまして、大学間で機能的な連携・共同をしようという国立大学みずからが提案しています。ポイントの2までを第2段階としまして、最終的には経費の配分のあり方をそれに沿ってしていただきたいと国へ要請しているところでございます。

国立大学の構造改革については、現在、文部科学省から強い要求を受けているところでございますが、国立大学はこれまでのように教育・研究・社会貢献というのを3つのミッションとして、引き続きそれを行っていくということが一番大きな役割と考えているところでございます。それには十分な期間が必要だ、余り急いではいけないということを我々は常に主張しているわけですが、具体的には制度改革の中で3つの目標を持ち、積立金制度の柔軟化、寄付金税制の整備、留学生の学位取得後の在留資格の弾力化ということですか、あるいはネットワークを形成していくために資源の共有、研究者の流動を図る。あるいは複数大学の経営面の連携をしましようというようなこと、あるいは国立大学だけではなく、他の高等教育機関と連携をしましよう。それから、第3期中期目標期間に組織再編も視野に入れた機能強化方策を検討しましようというようなことを考えているところです。

私は、きょうの後半の流れとして、どういった教育を京都大学は目指しているのか、目指すべきなのかという点については、次のようなことを考えております。

最初に申し上げましたように、IT化時代に対応する教育を今後もしていかなくてはならないだろうと思いますが、IT機器のネガティブな側面をまず考えなければいけないだろうと思います。現在、若者たちは、人から人へ知識が伝達されるのではなく、インターネットの中に必要な知識は埋まっているというふうに考えている節がございまして。携帯を常時オンにしているということで、仲間と常時つながっているという安心感が人々を支えている。それは逆に言えば、孤独になる時間がないということでもあります。そして、仲間に常に相談するものですから、自己決定ができない。自己決定ができないということは、他者の意見を尊重しつつも自分の考えを相手に述べて、自分が決断して実行するというようなプロセスをきちんと自分の中に取り込めていないということでもあります。これは我々人間が持っている共感力、エンパシーという能力をきちんと発揮できていないということだと私は思っています。

ただ、IT機器を我々は完全に排除することはできないし、これを利用した教育をこれから考えていかなくてはならないということであるならば、人から人へ知識が伝わる時代を少し現代的に考え直して、我々は学生たちに対してフェース・トゥ・フェースのコミュニケーションを多用しながら、実践的な場面ということをなるべく強調しながら、実践を通じて知識や技術を伝えるということをやらなくてはならないのではないだろうかと思っております。そのためには、大学というキャンパスの中だけに閉じこもっているのではなく、座学だけではなくて、フィールドワークや実験といった現象とつき合うことを教えなくてはならないのではないかとこのように思います。

そういったことを考えて、私はW I N D O Wという活動指針を皆さんにお示しいたしました。W I N D O Wのそれぞれのアルファベットをとりまして、6つの標語をつくりました。それをちょっと簡単に述べさせていただきますと、Wild and Wise、これは野生的でなおかつ賢い学生を育てましようということとございまして。具体的に言えば、学部と大学院の柔軟な接続等を重視してやってみましようということと、この具体的な重点施策については、北野先生のほうから後ほどご説明があると思っております。

自律的な学習の促進、そのためにさまざまな制度を導入いたします。そして、社会との接続を意識した教育内容の充実をしなくてはならないし、そして学生数の縮小というものに対応する考え方

として、日本はまだ社会人の大学への入学が非常に少ないです。アメリカなどと比べると、10分の1程度しか社会人が大学で学んでいない。社会人の学び直しということを大学が積極的に行わなければならないだろうというふうに考えているところでございます。

それから、**International and Innovative**、国際化というのは何度も強調しておりますように、現在の若者たちに非常に重要な能力になります。異文化を理解し、国際的に活躍するグローバル人材の育成ということがよく言われていますが、一体国際化とは何か、グローバルとは何かということをお我々自身が真剣に考え、それに合った教育をしていかななくてはならないだろうと思います。

そして、京都大学がずっと伝統的に行っております、対話を重視した自学自習というのは一体どういうふうに推進したらいいのかということですが、そのためには、今、むしろ発達しているIT機器を積極的に利用するという方法も我々は取り入れていくべきではないかと思っております。

それから、**Natural and Noble**、国際的あるいは革新的な能力を持つ学生を育てるためにはどうしたらいいのかということですが、これは前執行部から引き継いできたジャパン・ゲートウェイ構想、リーディング大学院プログラムを一層充実させることが必要ではないかと考えております。特に先ほど北野先生がおっしゃいましたi-ARRC棟の完成を目指して、国際化、特にさまざまな言語を教育できるシステムを積極的に取り入れて、言語を中心に国際化を一層広めていくことも必要ではあるかと思っております。ただし、言語ばかりが先に立ってはまずいと思ひまして、特に異文化を理解するというのは、言語だけを理解してわかる話ではありません。体験というものが非常に重要でございますので、やはり本学の学生を海外へ出すという試みを積極的に進めていかななくてはならないと思ひます。そのためには、研究者自身が海外の研究者と協力をして、国際的な共同研究を進めることが大事だろうと思ひます。そして、特に東京の大学と大きく違うところは、京都大学は自然に囲まれた非常にいい環境にあるということですが、そういった自然環境を積極的に利用して教育を図っていくことが必要ではないかと思ひます。私自身はフィールドワークをやってきましたし、フィールドワークというものにはさまざまな意味で教育の中に生かすことができます。そういったことを我々は少し重点的に考えていく必要があるのではないかと思ひます。

それから、**Diverse and Dynamic**、多様な文化や考え方を受け入れていく心構えとして、さまざまな体験をしていく必要があるだろうと思ひます。そのために、京都府や京都市と積極的に連携して、京都を丸ごと大学のキャンパスに、ということを目指そうと思ひております。研究者も大学のキャンパスの中で行うだけではなく、さまざまな交流をしていただきたい。そういった中に学生を巻き込むことで、多様な経験、多様な知識というものを身につけることができるのではないだろうかと思ひます。

いろいろございますけれども、現在非常に重要なのは、情報の集約と活用でございます。IRを活用した大学運営は、現在、私たちが実施している戦略の中で重要な位置を占めていますので、これにも皆様方のご理解をいただきたいと思ひます。

それから、**Original and Optimistic**、オリジナリティというのは非常に京都大学にとって重要です。それをどのように推進していくかということも重要でございます。高大接続という課題もございませぬ。その中で京都大学の教育に魅力を感じてくる学生がどのぐらいいるかということも将来的には重要な視点でございますので、その目標になるように新しい学問を創成していく。未踏科学領域を創成していくというのが一つの大きな目標ではないかと思ひます。そういった新しい試みを支える自主財源をこれからどうつくっていくかということも、これも皆様のご協力を得ながらやっていかななくてはならないだろうと思ひます。

そして、最後に、**Women and Wish**、という標語を掲げましたが、女性の力を伸ばすような環境づくりをしていかななくてはならないだろうと考えております。

私が、今、考えている重要戦略は3つございます。一つは、対話を重視した教育。これは最初に申し上げましたけれども、IT化というものに対応しつつ、なおかつ人間の能力というものを最大限発揮させることができるような教育でありまして、それには実践、研究者自身がやっていることを学生たちに見せながら、それに参加させながら教育をしていくという回路だろうと思います。

それから、国際交流。異文化の理解、異文化への提言というのは、言語だけでできるものではありません。その文化を体験しなければなかなか理解できるものではないと思います。実は11月7日のホームカミングデーに、ドナルド・キーンさんを講演者として呼びました。彼は1953年に日本にやってきて、京都大学に約1年半在籍されました。その間にさまざまな日本、特に京都というものを体験し、それを彼は世界へ発信してくれました。その話を聞くことによって、異文化体験をどのように自分で取り込んで、そして国際人になるかということを理解していただけるのではないかと考えました。国際交流というのはやはり体験にかかわってくるのではないだろうかと思っています。

京都まるごと大学キャンパス計画というのは、今、緩やかに実行中でございますけれども、京都府や京都市と連携しながら、京都をなるべく大学のキャンパスとして生かそうという試みです。そのためには、京都にある施設を大学がプラットフォームになって連携させることが重要だと思っております。京都にはまだいろいろ我々自身が知らない施設がたくさんあります。それを皆さんが知り、利用、活用していくということが、今後、非常に重要になってくるのではないのでしょうか。そして、最終的には京都アカデミアというものを設立して、京都大学がその核となって、アカデミアでさまざまな施設、さまざまな思想、さまざまな職業をつなぐ、そしてそれを世界に発信する。その中に学生を巻き込むことによって国際人をきちんと育てることができるのではないかと私は考えているところでございます。

そのためには、大学だけではできない。特に行政と産業界の支援が必要です。そういったことをこれから積極的に求めていきたいと思っている次第でございます。どうか皆様のご協力とご理解をお願いしたいと思います。

これで私のお話を終わらせていただきたいと思います。（拍手）

**司会** ありがとうございました。

それでは、続きまして10学部の特色ある取り組みについて、ここからはリードを高等教育研究開発推進センター教授の松下佳代先生にお願いします。

では、お願いします。



# 大学が直面する課題と教育改革



京都大学総長  
山極 壽一

## 人類進化論 Evolution of the Human Society

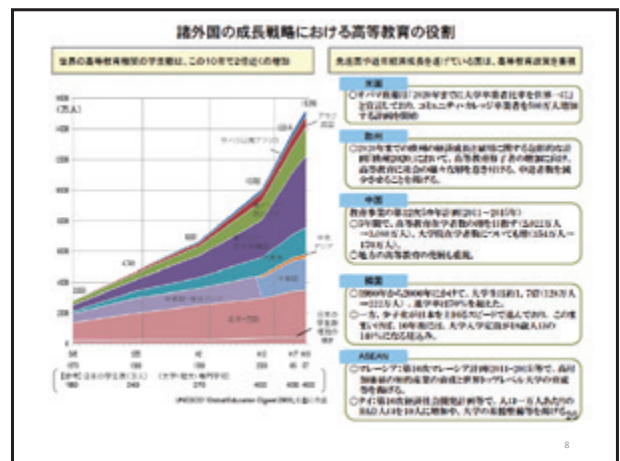
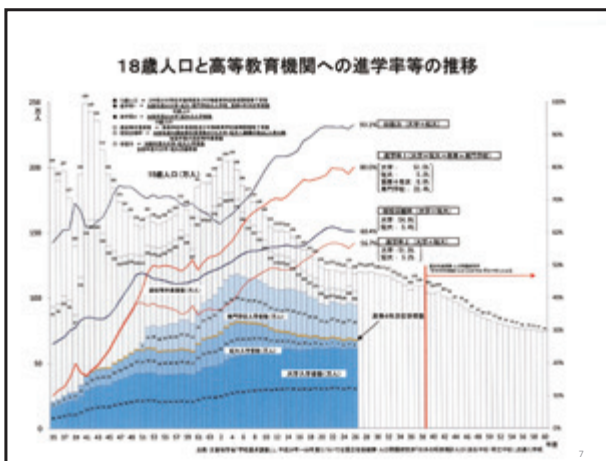
- 講義の概要
  - 京都大学で創始した霊長類学の歴史の経緯やその基礎知識について学ぶとともに、霊長類の進化の過程を通じ、人類の起源について深く探求する。
- 講師・講義スタッフ
  - 山極 壽一(京都大学総長)
  - 本郷 峻(京大大学院理学研究科博士後期課程)
- 受講登録と配信開始時期
  - 配信開始: 2015年10月(6週間)
  - 受講登録開始: 2015年7月
- edXサイト (<https://www.edx.org/school/kyotouku>) で登録可
- その他
  - 難易度: 入門レベル
  - 前提知識: 不問
  - 言語: 英語
  - 登録料: 無料(本人認証の希望者は\$50)

## 人類進化論 Evolution of the Human Society

- 第1週 霊長類学の発想  
日本の霊長類学
- 第2週 人類誕生の舞台  
霊長類の進化
- 第3週 霊長類の性と進化
- 第4週 暴力の起源
- 第5週 食と社会
- 第6週 霊長類の生活史

## 大学教育の直面する課題

- 18歳人口の縮小
- 大学進学率の低迷
- 高大接続と入試改革
- 教育費の低迷
- 自己資金化と制度上の制約
- IT社会とグローバルズム
- 国際化(ランキング、学生交流)
- 産業界との連携と地域への貢献

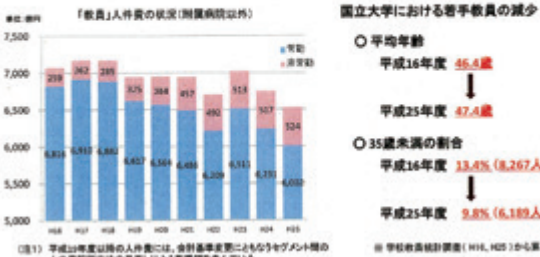






**常勤教員(特に若手教員)の減少①**

運営費交付金が減少していく中で、競争的資金等の獲得により優秀な若手教員等の雇用に努めているが、近年、**運営費交付金に占める常勤の若手教員の雇用割合が減少**若手教員にとっては、益々厳しい雇用状況となっている



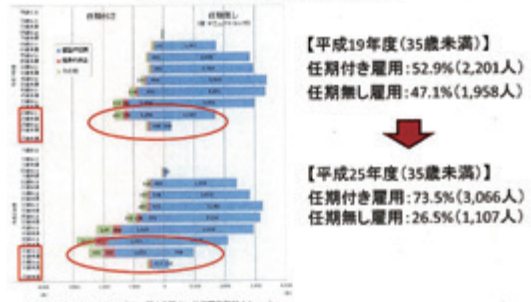
(注1) 平成25年度以降の人数には、会計基準変更によるウエブメント等の人数数値方法の異動による影響を含んでいる。

(注2) 就職情報以外の情報から算出している。

出典: 文部科学省提供資料より国立大学協会事務局作成

**常勤教員(特に若手教員)の減少②**

**若手教員の任期付き雇用の増大**



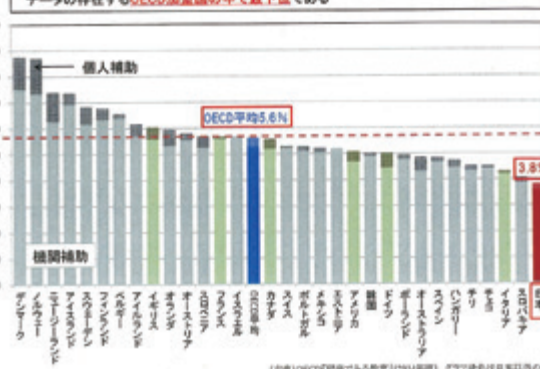
文部科学省「大学教員の雇用状況に関する調査—若手教員に関する調査」(2023)

※平成25年度は、文部科学省「大学教員の雇用状況に関する調査」(2023)より算出

(注) 1. 任期付き雇用とは、文部科学省「大学教員の雇用状況に関する調査」(2023)より算出

出典: 文部科学省提供資料より国立大学協会事務局作成

我が国の公的財政教育支出の対GDP比は、機関補助と個人補助を合わせて**3.8%**であり、データの存在する**OECD加盟国の中で最下位**である



(出典) OECD「教育支出の対GDP比」(2019年度) データは2019年のGDP推定

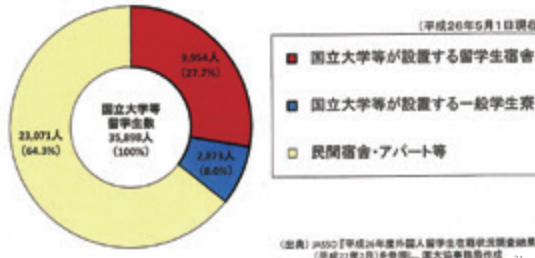
我が国の公的財政教育支出の対GDP費を教育段階別と比較しても、**全ての教育段階でOECD平均を下回る**特に、**初等教育段階と高等教育段階では、OECD加盟国の中で最下位**である



(出典) OECD「教育支出の対GDP比」(2019年度) データは2019年のGDP推定

**国際化に対応するための留学生・外国人研究者の宿舎の整備**

国立大学等の留学生数に対して、国立大学等が設置する留学生宿舎及び学生寮入居者数は、**35.7%程度**に留まっており、依然として受入環境が十分に整備されているとはいえない



(出典) JASSO「平成26年度外国人留学生受入状況調査結果」(平成27年2月)を参照し、国立大学協会作成

・施設整備費補助金の当初予算額は法人化以降低い水準で推移し、老朽化・耐震化改修についても補正予算に依存

・その結果、耐震化率はほぼ100%に達したものの、**経年25年以上の要改修施設は全保有面積の31.4%に増加**、さらに**経年50年以上の建物は今後5か年で7.5%→20.7%に急増**

- 一方、次のような新たな要請が増大
  - ・教育改革のためのアクティブラーニングの場の整備
  - ・イノベーション創出のための先端研究設備の整備
  - ・国際化に対応するための留学生・外国人研究者の宿舎や交流スペースの整備
  - ・産学連携やインキュベーションに活用できるスペースの整備

・特に、近年では**中国・韓国・東南アジア等の新興国の大学キャンパスは整備が著しく進み、既に我が国の大学を凌駕するものも多く**、このままでは優れた学生・研究者の獲得競争に後れをとる

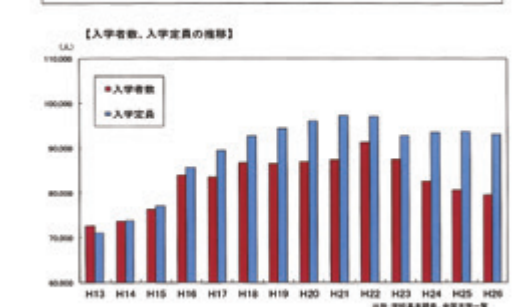
**安心・安全で、海外の学生・研究者も惹きつけられる国際的に魅力のある教育研究環境を整備することが急務!**

**入学定員の推移(国立大学)**

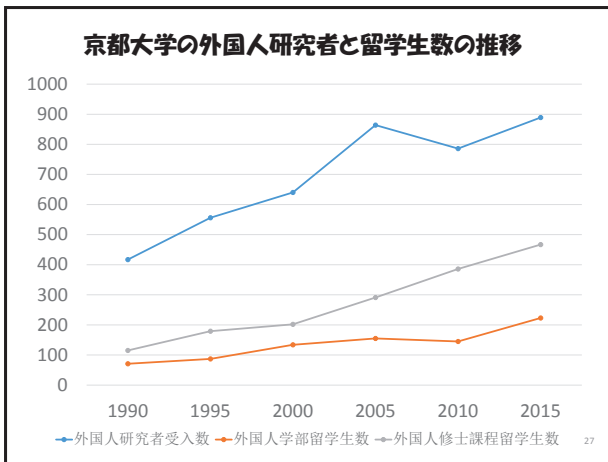
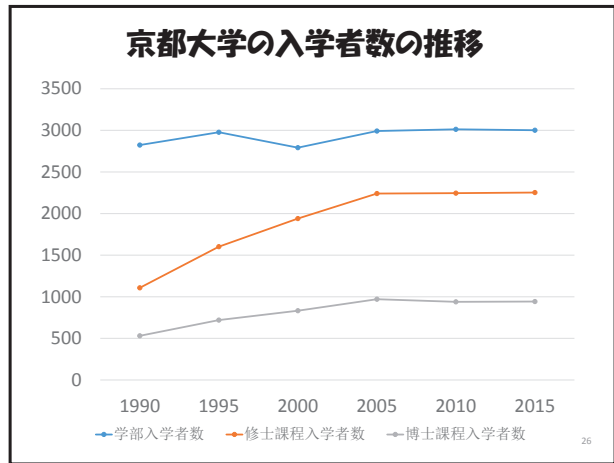
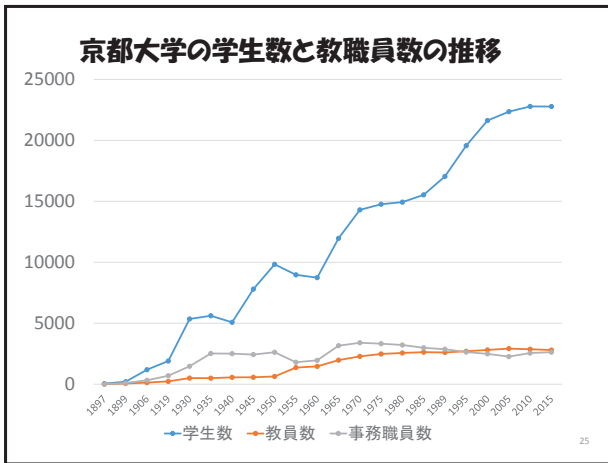


出典: 内閣府 総合科学技術・イノベーション会議第1回基本計画専門調査会参考資料

**大学院(国公私)の定員割れが続いている。**



出典: 学務省提供資料、国立大学協会



### 国大協の将来ビジョン

**ポイント1 優れた資質・能力を有する多様な入学者の確保と受入環境の整備**

- 多様なニーズに応える教育研究の質の向上
  - ※科目ナンバリングなど国際通用性のある教育システムへの改革と個性豊かな教育コンテンツの充実
- 確かな学力とともに多様な資質を持った高等学校・高等専門学校卒業者の受入
  - ※教員入試、AO入試、国際バカロレア入試等の拡大
- 優れた外国人留学生の積極的な受入及び日本人学生の海外派遣の拡大
  - ※英語で学ぶ等可能な課程の整備など留学生の教育環境の充実と海外大学とのダブル・ディグリー・プログラム及びジョイント・ディグリー・プログラムの推進による日本人学生の国際性の向上
- 女子学生及び女性教員の受入環境の整備
  - ※OB・RFイベントとの両立支援体制の強化等による女性比率の向上
- 留学生及び若者を地域に引き寄せ地域創生へ貢献
  - ※地方自治体・産業界との連携と支援による教育研究の推進
- 学び直しを求める社会人の積極的な受入
  - ※社会人のニーズに応じた教育プログラムの開発・実施と入学選抜方法の工夫

**ポイント2 大学間等の有機的な連携・共同による教育研究水準の向上**

- 大学間等の連携・共同による教育の推進
  - ※国公立大学等との連携・共同による教育の相互促進（教育コンテンツの互換性及び教養科目の標準化の推進）
- 大学間等の連携・共同によるネットワーク形成による研究の推進
  - ※国公立大学・研究機関と連携・共同、資源の共有によりネットワークを形成し、世界をリードする研究の推進
- 学生、研究者の高い流動性の確保
  - ※年次移動やクロスアポイントメント制の活用、デュアルトラック制の導入、定着など大学等間の高い流動性を確保し魅力あるキャリアの提供

**以上の取組に係る教育研究経費の配分の在り方**

- 革新的な教育研究費は、安定的な運営費交付金で保証（これ以上の削減は行わない）
- 基礎的な研究や研究者の自主性の高い研究も運営費交付金で安定的に確保
- 大学・研究組織の連携・共同で展開する研究・教育は、運営費交付金と競争的資金により一体的に柔軟かつ競争的に支援
- 研究者の自由な発想によるボトムアップ研究は、文部科学省科学研究員補助金で支援
- 社会ニーズに対応する各分野の研究費は、相互の関連性を整理した上で競争性に基づいた配分方法により支援

**従来の動向を踏まえたさらなる組織再編等による国立大学の構造改革に向けて**

- 各大学が独自に又は連携して自己改革を進める
  - ※教育水準を維持し、世界をリードする研究を推進し、我が国の成長発展を支える観点からは、組織の改組や併合、学生数などにも踏み込んだ大胆な検討も必要
- 主体的・戦略的に改革を進めるための制度改革
  - ※目的・戦略的に改革を進めるための制度改革
    - ・目的・戦略的に改革を進めるための制度改革
    - ・目的・戦略的に改革を進めるための制度改革
    - ・目的・戦略的に改革を進めるための制度改革
- 組織再編等の検討の観点
  - ・国立大学は3つの基本的機能（教育・研究・社会貢献）を引き継ぎ確保・充実
  - ・教育は各大学等と連携・共同して充実した内容を確保
  - ・研究は対外的にネットワークを形成・活用し、研究者の流動性、研究力を強化・向上
  - ・社会貢献は地域の産業創出、文化創造、先進的な高等専門の拠点として、地方自治体・産業界と協働して人材育成、イノベーション、国際化等に貢献
  - ・学部・研究科の編成・定数は近隣地域の複数大学間の連携・役割分担も視野に入れ、学部と大学院の定員再配分も検討
  - ・国立大学が従来からの役割により一層の効率化や両面配分メトリックを生み出す方針を維持
  - ・財政面は多様な財源確保に努めるとともに、授業料の在り方について、国・地域の経済状況、分野特性等を踏まえ学生支援の方策と併せて検討
  - ・他の高等専門機関（公立私立大学・高等専門学校等）との連携・共同やネットワーク形成を図り、我が国の高等教育全体の再構築を検討
- 真に効果的な組織再編等を行うために
  - ・十分な期間をかり、各組織や他の高等専門機関と調整を図り、人事面、財政面等の両面から準備を計画的に進めることが必要
  - ・第3期中期目標期間にポイント1及び2を重点的に実行し、並行して国立大学全体の減少を促した組織再編等を視野に入れた機能強化の方策を検討し、準備を整え、経理的に着手
  - ・国立私立大学全体の適正な規模と各組織の機能について、国や関係者等による議論が必要
  - ・本アクションプランに示した改革を促進するための学務面・制度面の支援を要請

### 将来の動向を踏まえたさらなる組織再編等による国立大学の構造改革に向けて

#### 1. 主体的・戦略的に改革を進めるための制度改革

- 目的積立金制度の柔軟化及び資金運用の弾力化
- 寄付金税制の整備（税額控除の導入）
- 留学生の学位取得後の在留資格の弾力化



## 2. 組織再編等の検討の視点

- ・国立大学は3つの基本的機能(教育・研究・社会貢献)を引き続き確保・充実
- ・教育は他大学等と連携・共同して充実した内容を確保
- ・研究は分野ごとにネットワークを形成(資源の共有、研究者の流動)し、研究力を強化・向上
- ・社会貢献は地域の産業創出、文化創造、先進的な医療等の拠点として、地方自治体・産業界と協働して人材育成、イノベーション、国際化等に貢献

33

・学部・研究科の編成・定員は近隣地域の複数大学間の連携・役割分担も視野に入れ、学部と大学院の定員配分も検討

・複数大学の経営面の連携により一層の効率化や資源再配分のメリットを生み出す方策も検討

・財政面は多様な財源確保に努めるとともに、授業料の在り方について、国・地域の経済状況、分野特性等を踏まえ学生支援方策と併せて検討

・他の高等教育機関(公私立大学・高等専門学校等)との連携・共同やネットワーク形成を図り、我が国の高等教育全体の再構築を検討

34

## 3. 真に効果的な組織再編等を実行するために

- ・十分な時間をかけ、各地域や他の高等教育機関と調整を図り、人事面・財政面等の周到な準備を計画的に進めることが必要
- ・第3期中期目標期間に1と2を着実に実行し、並行して国立大学全体の縮小を含めた組織再編等を視野に入れた機能強化方策を検討し、準備を整え、経時的に着手
- ・国公私立大学全体の適正な規模と各機関の機能について、国や関係者等による議論が必要
- ・本アクションプランに示した改革を促進するための予算面・制度面の支援を要請

35

## IT時代の若者たち

- ・必要な知識はいつでもどこでも、インターネットで得られる
- ・知識は人から教えられるものではない
- ・仲間と常時つながっている(携帯ON)
- ・孤独になる時間がない
- ・自己決定ができない
- ・他者との交流下手

**共感力を使う機会がない**

36

## 現代の大学教育

- ・知識を伝える教育は過去のもの
- ・知識はインターネットの中にある
- ・既存の知識ではなく、未知の世界を教える
- ・考え方や実践の方法を教える
- ・大学だけが学びの場ではない

**共感力を使った学びの場**

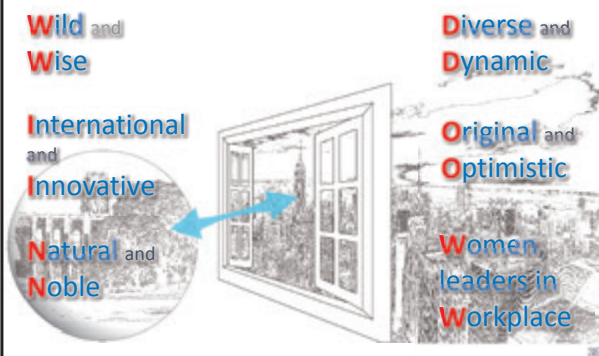
37

## 京都大学の活動指針

まず、私は京都大学を世間から少し距離を置く、静謐な学問探求の場であるとともに、世界や社会に通じる窓として位置づけたいと思います。…すなわち、有能な学生たちが活躍できる世界や社会へ通じる窓を開け、学生たちの背中をそっと押し送って送ることが、私たちの共通な夢であり目標であると言いたいです。その窓にちなんで、私は「WINDOW」という標語を作りました。

38

## WINDOW構想



## Wild and Wise

未知の世界に挑戦できる実践の場として、学生への多様な教育研究環境を提供し、野生的で賢い学生を育成します。

### 重点戦略1-1

学生主体で自発的な創意・創造性を活かせるような教育プログラムの充実と、学生本位の視点に立った教育への質的転換を行うため、講義・コース内容の可視化による教育の質保証を担保するとともに、学部と大学院との柔軟な接続を図ります。

### 【学部と大学院との柔軟な接続等】

①深い教養と高度な専門能力を持つ人材を育成するために、学部・大学院の接続(学部と修士の一貫した教育課程の導入、学部科目再履修制など)、大学院修士課程・博士後期課程の接続(5年一貫制博士課程など)、グローバル化に対応したアカデミック・パスの検討及び飛び入学・早期卒業(修了)の定着を進めます。

40



#### 【教育の質的転換等】

②学生の自律的な学修の促進、学生に対する学修指導等の充実及び教育の国際化を図るため、科目コースフリー、科目ナンバリング、GPA制度の導入、ジョイント・ディグリー／ダブル・ディグリー制度の策定、国際化に対応した学事層の実効化などを遂行するとともに、OCW(Open Course Ware)やMOOCs(Massive Open Online Courses)もさらに充実させます。

#### 【社会との接続を意識した教育内容の充実】

③社会が求める人材を育成するため、各学部・研究科が開講する既存科目を適宜組み合わせコース化し、「グローバルコース」、「高度教養教育コース」、「副専攻コース」、「京都学コース」などを設置します。「高度教養教育コース」では、高度情報リテラシー科目、中長期国内インターンシップ科目を開講します。

#### 【社会人の学び直しへの貢献】

④社会において求められる人材の高度化・多様化を踏まえ、社会人のための編入学制度や長期履修制度を推進し、多様な大学院生の入学を促進します。また、履修証明プログラムを推進し、社会人の学び直しに貢献します。

41

#### 重点戦略1-2

次世代を担うグローバル人材の育成と育成基盤の強化により、人々を導くことのできる、しただかで強靱なリーダーを育成します。

#### 【異文化を理解し国際的に活躍できるグローバル人材の育成】

①京都大学ジャパンゲートウェイ構想に基づく取組みやリーディング大学院プログラム等の活用により高い教養・俯瞰力・独創力を持ち自国・他国文化の理解に基づき国際的に活躍できるグローバル人材を育成します。国際高等教育院附属国際学術言語教育センター(I-ARRC)において、グローバル社会に対応した革新的な言語教育を実施するとともに、異分野交流の場を創出し、自国理解力及び異文化理解力を養います。

#### 【グローバルに通用する起業家の育成】

②グローバルに通用する創造性・アントレプレナーシップに富む野心的な人材を育成するため、基礎・基盤教育を社会とつなぐことを意図した実践的なイノベーション教育プログラムを構築するとともに、イノベーションに資する産官学連携事業を基盤として、ベンチャーマインドを持った学生、教員等に対して実践的な起業教育(指導)を実施します。

42

#### 重点戦略1-3

対話を根幹とした自学自習を促進するために、学生主体の多様な学びを支える教育学習環境を整備するとともに、人間形成の一翼を担う課外活動を支援します。

#### 【教育環境の充実】

①学生個人が自らの学びを自身で振り返りながら主体的な学びを促進するため、BYOD(Bring Your Own Device)の実現やeポートフォリオシステムの構築など、ICTの活用をはじめ学生主体の多様な学びを支える教育学習支援環境の整備を進めます。

#### 【課外活動環境の充実】

②学生が自主的、自立的に行う課外活動を支援するため、施設を整備するなど、課外活動環境の充実を図ります。

43

## International and Innovative

対話を重視した教育研究環境を基盤とする研究の国際化を一層推進し、イノベーションの創出を図ります。

#### 重点戦略2-1

国際性の豊かな環境を醸成します。

#### 【研究者・学生交流の推進】

①国際競争力のある海外大学等との国際共同研究を推進します。また、研究者・学生交流を推進するために、学術交流協定及び学生交流協定締結を進め、全学海外拠点を整備します。

②京都大学ジャパンゲートウェイ構想やリーディング大学院プログラムなどを通じ、学生の実践的能力やイノベーション能力の向上を図ります。

44

#### 重点戦略2-2

国際水準を満たす研究環境・研究支援体制等の提供により、国内外の卓越した研究者が集う国際研究拠点を整備します。

#### 【研究支援体制の充実】

①英語が堪能で事務のできる「国際的な事務職員」を養成します。URA(University Research Administrator)による支援体制の充実やICT環境の整備などを進め、多様性に富む人材が研究教育に専念し、能力が発揮しやすい環境整備を図ります。

#### 【次世代を担う研究者の育成・輩出】

②研究と教育の連動を通じて次世代を担うグローバル人材の育成基盤を強化していくため、テニュア・トラック等を含む採用システムを整備し、優秀な若手研究者の育成を図ります。

#### 【先導的拠点(WPI拠点)の整備】

③本学の強みを活かした最先端研究の展開、次世代を担う研究人材の育成、国内外の卓越した研究者の頭脳循環につなげるため、最先端研究を核とした世界トップレベルの国際研究拠点として、「国際高等科学院」(仮称)を設置します。

45

## Natural and Noble

自然に親しみ、学び、高い品格と高潔な態度を身に付けられるよう、全学の意識を高め、魅力あるカリキュラムや快適な学びの環境及び制度を作ります。

#### 重点戦略3-1

教育研究環境の整備・充実を図ります。

#### 【快適なキャンパス環境の提供等】

①学生が快適なキャンパスライフを送ることができる環境を整備する。併せて、サステイナブルキャンパスの構築を目指して、京都大学キャンパスマスタープラン(2013)を逐次更新し、環境賦課金制度を活用した環境負荷低減の継続・促進などを図るとともに、地球社会の調和ある共存に寄与する学生・教職員の意識の向上に努めます。

46

#### 重点戦略3-2

自然に学び、異文化と交流できる機会を増やします。

#### 【フィールドワークやカリキュラムの充実】

①創立以来培ってきた精神(自学自習、自重自敬、自得自発など)を踏まえ、現場体験も重視しながら、学生が自然に学び、京都の文化的・歴史的遺産や異文化と触れ合えるカリキュラムを増やし、行政、企業、民間団体と協力して交流事業の充実を図ります。

#### 重点戦略3-3

コンプライアンスの強化を図ります。

#### 【コンプライアンスの強化】

①学生と教職員の高い倫理性の堅持と社会的信頼の維持・向上を図るため、総合的なコンプライアンス体制の下、コンプライアンス教育・啓発を一層充実させるとともに、リスク・マネジメントの発想に基づく、予防的措置に重点を置く環境整備及び制度構築を図ります。

47

## Diverse and Dynamic

多様な文化や考え方を常に受け入れ、自由に学べる風土を培うとともに、悠久の歴史の中に自分を正しく位置づけて堂々と振る舞う精神を涵養するとともに、その躍動を保证しながらも静かで落ち着いた学問の場を提供します。

#### 重点戦略4-1

京大らしさの継承と発展を図るために、京都を丸ごと大学のキャンパスとみなして地域・社会と共生していく「京都・大学キャンパス計画」を推進するとともに、同計画に基づき、行政・経済界・他大学との連携強化による国際化を推進します。

#### 【単位互換制度の実施】

①すでに構想・実施されている「京都ビジョン2040」(京都の未来を考える懇話会)や「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画」(京都市)と歩調を合わせつつ、「京都学」関連講義の大学間単位互換制度を推進します。

#### 【京都府・京都市等との連携】

②京都府や京都市等、京都府下やその周辺の国公私立の施設(植物園や動物園、博物館や美術館など)との連携を図り、京都のアカデミズムを創造し、世界へ発信します。

48

#### 【休止施設の再利用】

③上記連携から、観光都市京都の文化的・歴史的遺産を十分に活用するとともに、休止中の施設の再利用を通じて、外国人研究者や留学生の利用できる施設を拡充します。

#### 【研究者交流の推進】

④年俸制、クロスアポイントメント制度、テニュア・トラックシステムを適宜導入しないし有効に活用しつつ、教員の利益を損ねることなく流動性を高めるとともに安定した教育研究環境を提供します。

#### 【地域・社会との交流】

⑤さまざまな言語で対話やパフォーマンスを実施する機会を増やし、外国人と市民との交流を深め、その中で学生の対話やディベートの能力向上を図り、学際性、国際性、独創性を高めます。

⑥公開講座・講演会、シンポジウム、施設公開、展示などを実施して、学生、研究者と市民、企業との交流を図ります。

49

#### 重点戦略4-2

グローバルで多様な学生を積極的に受け入れる基盤として、日本人学生と留学生との対話ができるスペースや交流の場を充実させます。

#### 【学生交流・福利厚生施設の整備】

①日本人学生と留学生との交流の場を充実させるため、日本人学生と留学生の混住が可能な施設や福利厚生施設を整備・拡充していきます。

50

#### 重点戦略4-3

次世代の教育学習環境の改善、組織化等による研究力向上を図るために、情報環境を整備し、それを基盤として多様な活動を俯瞰できる本学独自の仕組みを構築します。

#### 【IRを活用した大学運営】

①大学の活動から生じる多様なデータをIR(Institutional Research)の手法を用いて活用を図り、エビデンスに基づく教育研究現場の創意工夫を活かす企画・運営を行い、京都大学の持続的発展を支え、独創的な学際学術領域を創成するための組織改革などを推進します。

#### 【総合的な学生支援】

②様々な背景をもつ学生が、不安なく本学で教育研究に専念できるよう、カウンセリング、キャリアサポートや障害学生支援において、学生のニーズに対応した総合的な学生支援の充実を図ります。また、教育面での学生支援等については、EM(Enrollment Management)の活用や、留学生が利用しやすい英語による情報提供などにより、支援効果を高めます。

51

## Original and Optimistic

失敗や批判を恐れず、それを糧にして異なる考えを取り入れて目標達成に導くような能力を涵養できる環境を整えるため、多様な人材が協働して異分野融合による新分野創成、新たな学術領域の創出を目指します。

#### 重点戦略5-1

総合研究大学としてのポテンシャルを質の高い教育に反映させ、あらゆる学生や教員が安心して教育研究に専念できる環境を作ります。

#### 【教育と研究の協奏】

①教育を研究に埋没させたり、両者が背反的な関係になったりすることのないよう、教育と研究の協奏関係を具現化します。そのために、研究に加えて、教育や教育システム運営への教員の貢献を適切に評価する仕組みを構築します。

52

#### 重点戦略5-2

総合大学に相応しいアドミッションのあり方を再考し、学生の主体的な進路選択の支援及び高校教育から大学教育へのスムーズな接続を図るため、高大接続及び連携に関する事業を推進します。

#### 【高大接続】

①アドミッション・ポリシーに見合った優秀な志願者を獲得するため、高大接続と基礎学力を重視する特色入試を含む、入試制度の改革を継続的に進めます。

#### 【高大連携】

②高等学校教育から大学教育へのスムーズな接続を図るため、各地域の教育委員会との連携協定を基に、高大連携事業、京大サマースクール、京都大学サイエンスフェスティバル(各都道府県から選出されたチームによる研究発表大会)を展開します。また、グローバルサイエンスキャンパス事業等により、幅広い知識と高い志を持った高校生に対して、優れた教育研究資源を積極的に活用した教育プログラムを提供し、知的に卓越した能力を育成します。

53

#### 重点戦略5-3

京都大学を特徴づける創造的研究領域における研究を推進します。

#### 【未踏科学領域の創生】

①異分野融合による新分野創成等、新たな未踏科学領域を創成するため、「京都大学研究連携基盤」の整備等を進め、研究所・センター群の強み・特色を伸ばすとともに、学部・研究科も含む本学の全ての研究者の知を集結させ、新たな学術分野の育成を促進する取り組みを実施します。

#### 重点戦略5-4

外的な制約にとらわれない自由な発想を担保するため「基金戦略」を推進し、社会や大学支援者と大学とのつながりを強化します。

#### 【自主財源確保とそれに基づく支援の充実】

①自主財源の確保に努め、学生(留学生含む)支援のための本学独自の奨学金等を充実させるほか、新たな研究分野や萌芽的研究領域(未踏科学領域)に挑戦する若手研究者等への支援を強化します。

#### 【同窓会への支援等】

②大学支援者層の拡大を図るために、同窓会への支援、卒業生との連携を強化するとともに、楽友会館など同窓生が利用できる施設の整備を図ります。

54

## Women and Wish

男女共同参画アクション・プランに基づき環境・支援体制整備に加え、休業から復帰後の子育て期に柔軟な働き方を選べる制度を構築します。

#### 重点戦略6-1

女性リーダー育成及び家庭生活との両立支援を推進します。

#### 【女性リーダーの育成】

①女性リーダーを育成するため、ジェンダー・バランスに配慮した教職員採用人事を推進するとともに、女性の活躍を顕在化させ、メンター制度を充実させるなどキャリアアップのための研修・啓発を推進します。

#### 【家庭生活との両立支援】

②家庭生活との両立を支援するため、待機乳児保育・病児保育・お迎え保育等の充実や研究実験補助者雇用支援を拡充し、男女の別のない育児・介護休業制度の周知と働きやすい職場及び研究環境を整備します。これにより、職域における男女の差をなくすように努めます。

55

#### 重点戦略6-2

男女共同参画推進アクション・プランに基づき、男女がともに高い希望をもつ環境づくりを推進します。

#### 【次世代の育成支援】

①次世代にとって魅力ある京都大学を構築するため、オープンキャンパス、女子高校生向けのフォーラム等をはじめとした高大連携や地域連携事業、関連のホームページの充実や冊子の発行などを通じての京大像やロールモデルに関する情報提供推進、女子学生を対象にした大学院生・若手研究者との懇談会の実施などに加え、次世代女性研究者育成に向けたキャリアパス構築を目指します。

#### 【教職員・学生への広報・啓発活動の推進等】

②男女の安定的な共同参画を実現するため、将来のキャリアパスについて希望を募り、海外の事例を参照しつつ、男女が楽しく共同で仕事をするために必要な意識改革や環境整備を実施していきます。

56

## 対話とフィールドワーク



## 国際交流



## 連携

- ・動物園・植物園・水族館と大学
- ・博物館・資料館と大学
- ・美術館やコンサートホールと大学
- ・神社・寺・協会と大学
- ・伝統工芸やものづくりと大学
- ・企業やNGOと大学
- ・国際フォーラム

**大学はフラットフォーム**

59

## 京都アカデミア

行政

文化遺産

宗教

思想

自然遺産



伝統

芸術



知財

科学技術



産業界



ご静聴ありがとうございました



## 6. 報告：10 学部の特色ある教育の報告

◇司会進行役	高等教育研究開発推進センター教授	松下 佳代
◇コメンテーター	人間・環境学研究科教授	石川 尚人
	文学研究科長／教授	川添 信介
	教育学研究科長／教授	子安 増生
	法学研究科教授	堀江 慎司
	経済学研究科教授	松井 啓之
	理学研究科講師	鈴木 あるの
	医学研究科副研究科長／教授	岩井 一宏
	医学研究科教授	黒木 裕士
	薬学研究科副研究科長／教授	加藤 博章
	工学研究科長／教授	伊藤 紳三郎
	農学研究科長／教授	宮川 恒



**松下（高等教育研究開発推進センター教授）** おはようございます。松下です。

今回の全学教育シンポジウムでは、初めての企画として、この京都大学の10学部の特色ある教育の報告という企画を入れました。

先ほどもお話がありましたが、京都大学というところは非常に部局自治の強いところで、自分の部局以外でどんな教育が行われているのかということは存外知らないというのが本当のところではないかと思えます。しかし、部局は違っていても、大学を取り巻く状況や、あるいは教育的な課題などは共通する部分も多くあるかと思えます。

そこで、この企画では、本学の各学部で行われている優れた教育的取り組みを取り上げ、それを学内で共有して、互いに参考にしていただくということを旨として、各学部の教育に関する映像を作成することにいたしました。

この映像作成に当たっては、各部局の学部長の先生方に、この人なら自分の学部のことについてはよくご存じだという方をご紹介いただきまして、私たちのセンターのスタッフでインタビューをさせていただき、そのインタビューの内容をもとに映像を作成しております。ただし、映像は大体3分半から4分程度の短いものですので、各学部からお一人コメンテーターをお招きしまして、強調したい点や、補足すべき点などについて一言いただくということも企画しております。

皆様の配付資料の中に、こういう水色の資料があったかと思えます。そこに今回取り上げた映像の中で描いています各学部の教育の特徴と、それからきょうご登壇いただくコメンテーターの先生方のお名前のリストを掲載しております。それもお目通しいただきながら動画をごらんいただければと思います。何せ全部で10学部11本の映像とコメントを1時間半の中に押し込めておりますので、映像もコメントも非常に短くて恐縮なのですが、各学部の特色がある程度見渡せるようなことを私たちとしてはねらっております。

**松下** それでは、まず総合人間学部からスタートしていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

〔総合人間学部 映像〕

**松下** ありがとうございます。総合人間学部のコメントは今、画面の中にも登場していただきましたが、石川尚人先生をお願いします。

**石川（人間・環境学研究科教授）** 総合人間学部の石川です。センターの皆さんにはこの動画をつくるのに当たって大変ご苦労されたと思います。ありがとうございます。

総合人間学部の取り組みの特徴として言えるのは、教員と学生、それと学生同士、もう1つ学生と院生と人間・環境学研究科、そういうつながりをつくろうということに苦心していきまして、どうにか少人数教育、ゼミ等でしているのですけども、学生個々にアプローチすることによって努力しているのが特徴かと思います。幸い幾つかの企画に関しては、企画から運営まで学生の自主的かつ熱心な協力が得られているという現状にはあります。



こういう幾つかの取り組みをしているのですけれども、常々思うのは、このような取り組みをしたりシステムをつくったりするのですけれども、結局重要なのはそれを生かすために一工夫といいますか、仕組みというのが必要なだろうと思っていまして、きょうはこういうシンポジウムですので、他の学部の取り組みの中でそのヒントが得られるといいかなと思っております。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

これからコメンテーターの方々に壇上に上がっていただくのですが、インタビューを受けてくださった先生、学部長の先生、それからこの中で紹介された取り組みを実際に実践されている先生などにきょうはご登壇いただくことになっています。

それでは、続きまして文学部の動画をごらんください。

〔文学部 映像〕

**松下** 文学部は川添信介研究科長にコメントをお願いしております。よろしく申し上げます。

**川添（文学研究科長）** どうも川添です。

このプロモーションビデオを数日前に初めて見て、作成にはかかわってないのですけど、意外とよくできているだろうと思います。何か哲学関係の方々がたくさんいらっしゃるって、ここにもたくさんいらっしゃるのですけど、1番目にあった少人数教育、このことはそのとおりで、入学定員は220名ですが、学部のレベルでも32の小さな専修に分かれています。単純に計算してもごく少人数で1つのグループをつくっているということになります。その点が売りだと思いますが、最近、アクティブラーニングということがよく言われていて、これは特殊な概念だと思いますが、文学部の基本的・伝統的な教育の体制というのは、学生がアクティブであることはもちろん前提になっています。そうでなければ、いわばパッシブに受けとるということでは済まないような体制でずっときているということだろうと思います。その点に特徴があると言えば特徴があるし、極めて伝統的と言えば伝統的ということになるだろうと思います。



ここに書いてないこと、あらわれなかったことですが、これは文学部という学部の紹介ですが、ほかの場面でお話ししたら、特に理系の先生方からびっくりされることは、公開されていることですから隠していることではないのですが、文学部では大学院と学部の演習は実態が同じものです。つまり文学部の教育というのは、大学院向けの授業と学部生の授業とは分かれてない。そういうことが学部教育としても意味があると考えています。ですから、いろんなアンケートをとってもそのことが不満であるという学生は少ないので、そういう体制を取ってきていて、今もそうです。ただ、これが本当に望ましいのかどうか。理想的にはそういうように研究的な、研究者になるような大学院の中身を学部でも一緒に先輩たちとやるのが学部教育として望ましいという考え方が本当に今、通用するのかどうかという問題。その点が文学部、文学研究科としては大きな課題だろうと思っています。

以上です。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

学部と研究科の間で相互乗り入れみたいな形の授業というのはほかの学部でも行われていまして、これからもまた登場してくると思いますので、どうぞごらんください。

続きまして、教育学部の動画をごらんください。

〔教育学部 映像〕

**松下** 教育学部のコメントは子安増生研究科長にお願いしております。よろしく申し上げます。

**子安（教育学研究科長）** 教育学部は京大の学部の中で一番小さな学部です。学生定員 60 名、そして 3 年で 10 名が編入で入ってきますので、70 名の卒業生数です。大学院定員も 42 名ということで、小さな部局なのです。私が入学者に最初に申し上げますことは、皆さんは京都大学という大きな組織のいい点と、教育学部という非常に小さな組織のいい点の両面を経験できるということです。

教育学部は、教員のほうは教授・准教授合わせて 33 名、助教を合わせますと 40 名で、小さな部局の中でも比較的教員割合が高いかと思っています。

多様性ということと言いますと、学生のほうも大体毎年女子学生の数が半数近くいますし、それから大学院の女子率が高いのですが、教員のほうも女性の割合といいますか、教授・准教授 10 名、そして助教 3 名の 13 名ということで、40 名中 13 名が女性です。

そして、文理融合型ということが少し出ていきましたが、教員の出身は文学部、教育学部が多数派ですが、医学系、お医者さんがお 2 人、それから工学部の情報系の先生がお 2 人ということで、そういう形で文理融合ということを実現しています。小さいけれど多様でありたいというのが私たちの願いでありまして、そういうことをやっておりますが、多様性自体は豊かさを保証しないということもありますので、多様である中でさらに中身を充実していきたい、そういう教育を考えています。

皆さん方が本部図書館の近くにおいでの際は、その北側、小さな建物ですが、ぜひお立



ち寄りいただきたいと思います。

以上です。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

私も教育学部出身なので、とても興味深く拝聴しました。

それでは、続きまして法学部の動画をごらんください。

〔法学部 映像〕

**松下** 法学部のコメントは堀江慎司先生にお願いいたします。実は堀江先生もインタビューを受けてくださったんですが、ちょっとシャイでいらっしやるので画面への登場は遠慮したいということを出てこれませんでしたでしたが、たくさんの情報を提供していただきました。よろしくお願ひします。



**堀江（法学研究科教授）** 法学研究科の堀江と申します。シャイなので断ったということではないのですが、スタッフの皆様には的確なものをつくっていただきまして、どうもありがとうございました。

私から若干補足説明をさせていただきます。法学部の教育の最大の特徴は、実はビデオではあらわれていません。それは何かと言いますと、自学自習ということです。伝統的に法学部では、専攻とかコース、あるいは専門の必修科目はございません。つまり学生の興味に従って自由に科目選択をさせるということが最大の特徴なのですが、そういうふうに学生の自主性を大いに尊重しつつも、ある程度誘導を行って、効果的な学習をさせる。そのための仕組みも設けております。それがビデオでご紹介いただいた内容でございます。

ビデオの後半のうち、学年配当制は、古くからあるものですし、内容的にもめずらしいものではないと思いますが、そのほかの、 Semester制の中で1科目4単位を維持し、したがって、週2コマの授業をするという形、これは平成12年から実施しておりますけれども、松下先生に伺いましたところ、全学的にはめずらしいということのようですので、ご紹介いただいた次第です。

それから、キャップ制につきましては、ああいう形で平成16年から実施しております。

前半の法学部基礎演習につきまして、これは割と最近、平成25年から始めたものです。ビデオで出ていたのは一例でありまして、ほかにもいろんなテーマを扱うクラスがございます。全部で12クラス、1クラス20名程度で、ゼミの形式で行っています。法学や政治学は、大学入学までは余りなじみがない人も少なくないということもあり、専門の学習に必要な基本的なスキルを身につけてもらうという趣旨で、1年生を対象に開講しております。330人の学生のうち大体3分の2程度が受講しており、学生の間の評判もよいようです。今後も続けていく予定ですが、ただ、教員の負担はかなりのものがあるようで、担当教員は相当手間暇かけて学生の面倒を見ているという状況でございます。

あと、ビデオには上がっておりませんが、同様のゼミナール、演習の形式の授業としまして、3・4回生を対象にした専門科目のゼミも古くから行っております。このように法学部では、伝統的に少人数教育に力を入れているということを補足させていただきます。

以上です。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

法学部の先生にとっては半期で週2コマ授業というのが当たり前だというふうなお話だったので



すけども、私たちから見るととても新鮮で、そういうやり方もあったのだというふうに思いました。  
それでは、続きまして経済学部動画をごらんください。

〔経済学部 映像〕

**松下** 経済学部のコメントは、今、何度も大きく登場してくださいました松井啓之先生をお願いします。

**松井（経済学研究科教授）** 経済学部の松井です。

私は京大出身じゃなくて、15年ほど前に京大に着任をしたのですが、そのころは多重履修登録ができて、1人の学生が全ての授業科目を履修登録するというのが当たり前で、私の授業も10人ぐらいしか学生がいないのに200人ぐらい登録、4回生はみんな登録している。それから必修科目もなく、何もない。パラ経という言葉ができています。そして、教授の先生から「教育方針がないのが経済学部の教育方針」というふうに言われました。それで毎年大体110名程度留年者がずっと出ているという状況が、さすがにどうかしなきゃいけないということで、現在の入門演習という形ができました。



経済学部は伝統的に、名著の入試で学生を受け入れて、それから自学自習でゼミを非常に重視してきたのですが、2回生、3回生でゼミに入る前に挫折する人が非常に多い。そこで、なるべく1回生のときにトレーニングする。それでも7年ほどになるのですが、最近その効果が出てきて、入門演習を受けている人と受けていない人の留年率に、より明らかに有意な差が出てきました。入門演習の取り組みは一定の成果をおさめていると考えています。

それだけではなくて、最後のほうで出ていますが、今、実は旧帝大の中で、例えば大学院へ進学するために学部を3回で、スキップでなくて、4プラス1（学部4年卒業+修士1年修了）あるいは3+2（学部3年卒業+修士2年修了）という形で大学院修了まで合わせて5年で修了するコースを取り入れてないのは京大だけです。東大を含めて全て今、経済学部は4プラス1（3+2）という形のカリキュラムに変わりつつあります。その結果、実は学部卒業生が他大学院に取られてしまうという事態が起こっています。そういうことから守るためにも、それから、より意欲的に学生が学べるようにしていくためにも4プラス1、あるいは3プラス2、それから世界展開やSGU、これは実は文学研究科と一緒にずっとやってきているのですが、その辺を含めた形で国際化に対応しようとしています。経済学部は、もうあと数年でちょうど100周年を迎えるのですが、これまでの100年を踏まえて、次の100年のための教育はどうあるべきかというのを考え、様々な改革を目指しているところです。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

今、お話しいただいたように、教育というものは絶えず動いているので、各学部改善中のところもありまして、そういうことも踏まえてきょうはお話しいただきました。

それでは、続きまして理学部動画をごらんください。

〔理学部 映像〕

**松下** 理学部のコメントは、国際化の対応をされています鈴木あるの先生をお願いしております。





**鈴木（理学研究科講師）** 国際教育室の鈴木と申します。本来は今映像に登場しました長田教育委員会委員長からコメントさせていただくべきだったのですが、あいにく大学院入試と日程がかぶってしまいましたので、私が代理で来させていただきました。代理ではありますが「内容はお任せする」ということでしたので、勝手なことをしゃべらせていただきたいと思います。

私は自分自身が理学部の出身ではございませんので、いまだに第三者的なフィーリングがあるのですが、その第三者の目から見た理学部の特徴として日々感じることは、とにかく学生がとても真面目だということです。先生方も真面目です。いい意味で真面目です。仕事に妥協しない。学生は、高校のときから理科が大好き、数学が大好きで、勉強したくてしたくてたまらない人達が入学してきているという感じなのです。ですから「大学が遊園地だなんてどこの話？」というような状況です。その真面目さと関係があるのかどうかはわかりませんが、大学のカウンセリングルームの利用者数も、例年ナンバー1かナンバー2かという「上客」だというお話もありました。そのため独自に理学部内に「相談室」を設け、専任の臨床心理士を置いてカウンセリングをするといった取り組みも行っている次第でございます。

それからもう一つ、自分たちで何でもどんどんやっていく学生が多いです。それをサポートする理学部の伝統として「自主ゼミ」という制度がありまして、これは随分昔からあるようなのですが、授業以外にもっと勉強したい学生ですとか、あるいは学部レベルでは扱わないような高度な文献を早く読みたいという学生のために、教務掛のほうで管理して空いている教室を貸し出しするなど、そういったつかず離れずの距離で自主学習を応援するようなシステムがございます。

国際交流関連の特徴としましては、学部の留学生がほとんどいません。大学院以上になりますと留学生が大変多くて、海外の研究者やポスドクさん達もいて本当に国際的なのですが、学部では今、全体約1,200人のうち留学生は2人しかおりません。というのも、留学生特別入試をしていないので、国費留学生以外はセンター試験と一般個別入試を日本語で受けるより他なく、合格は事実上ほぼ不可能なのです。これから特色入試などによって増えていくのかなとも思うのですが、「京大理学部に行きたかったがセンター試験や入試を受けるのが無理なので諦めて他へ行きました」といった声もよく聞きますし、また国内出身の一般学生にとっても留学生との交わりというのはとても大事だと思いますので、ぜひ留学生が増えてほしいと私は個人的には思うのですが、理学部の授業にちゃんとついていけるだけの基礎学力も担保しなければなりませんし、そういった意味で非常に悩ましいところで、いろいろな議論があるという状況でございます。

以上です。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

今のお話で出た内容は理学部だけではなくて、京大全体でこれから考えていかなければいけない課題だなと思います。

それでは、続きまして医学部ですが、医学部は2つの学科に分けて動画を作成いたしました。まずは医学部医学科の動画をごらんください。

〔医学部医学科 映像〕

**松下** 医学部医学科のコメントは、今、最後に経験をお話くださった岩井一宏副研究科長にお願いしております。よろしくお願いいたします。

**岩井(医学研究科副研究科長)** かなりずけずけと意見を言った、あのビデオを見た後でコメントするのは非常にやりにくいのですが、医学部の特徴は、若干研究者の人もいますけど、卒業生の90何%が1つの専門職、医者になるという究極の職業訓練学校であるということが他学部と違う圧倒的な点です。そうしますと、カリキュラムを考えていくときに、カリキュラムは国レベルとかグローバルな世界レベルで統一化の要求がされています。今も実際に世界的なカリキュラム認証機関に認証されないとアメリカで医者ができないという事態になっていますので、カリキュラムを変えなければならない状況。いつも外圧にさらされているということが一つの大きなポイントです。医学科のカリキュラム紹介でシステムレベルとマイコースと出てきますけれども、システムレベルというのは京都大学らしいものですが、実は大学紛争の結果、約40年前に出来たもので、その後一切変わっていません。マイコースというのは、どこもいろいろやっている、京大もやっているというレベルだけで、京都大学医学部らしい特徴があるわけではありません。



もう一つは、専門学科であるがゆえに全部必修で習わないとダメと言う点が特徴です。習うことが余りに多いので、全て必修で、自分たちの自由な時間がほとんどないというのが学生たちにとって大きな問題になっています。

全て必修で科目も多いので、在学中に全ての学生はいろんな研究室を回って多くの先生方に触れますけれど、ある1人の先生が1人の学生をしっかり見るようなシステムではないというのが医学科の特徴です。そうしますと何が起きるかという、京都大学らしく自学自習のスタイル、学生の働きかけに教員が対応するような対応をすれば、どの教員もほんの短期間しかその学生に触れないのですから、学生に積極性がなければ、究極の「ほったらかし」が起きる。究極のほったらかしをやっていったとしても、医学科はそれなりに今までいい人材が出ていたと思うのですが、現在では大きな問題が生まれています。医学は高校では学ばないので、大学に入ってから吸収すべき知識量が膨大です。それを全て必修でやっていますので、学部教育は受動的な知識、技術の吸収が中心になり、結局何も考えず受動的になりがちです。今は、受験産業が発達して、ハウツーで、ノウハウだけで医学科程度だと入学してしまう時代になって来ています。高校の先生や予備校・塾の講師の言われたことを受動的にやって入学してきた学生が非常に多いので、高校までの延長のように受動的に講義・実習をこなすだけで、自発的に行動する自学自習の精神なんて身につかず、単に指示待ちの学生だらけになっていて、非常に大きな問題が起きています。

もう一つの問題は、先ほど総長が言われましたけど、インターネット化の時代なので、誰かとみんなつながっていて、他人と違うのをものすごく恐れる。今まで私どもの場合、他人と違うことが一番大事で、違うことをやるからこそ京都大学の医学部らしいという学生がいっぱいたったわけですが、そういう学生が皆無になってきている。恐らく他学部も同じ問題を持たれていると思っています。最後に言ったコメントは、学部学部それぞれ他の大学に比べてどうのこうのという比較というのはあるかと思うのですが、それよりも学生の入学のさせ方の問題も含めて、京都大学全体として全ての学部が同じ問題を抱えているはずだと。そういう問題を話し合うのがこの場じゃないのかと思ったので、学部の紹介をしてどうするのですかとかなり文句を言わせていただいたのですが、まあ他学部もやられるとのことなので、ただ、仕方がないのでやったというのが現状です。

以上です。(拍手)

**松下** ありがとうございました。

各学部のカリキュラムですが、全て選択という学部から全て必修という学部まで非常に幅があるというところも見えますし、それから今、おっしゃったように、学部を越えて共通の課題というのも見えてきて、私は案外いい取り組みじゃないかと思ったりしております。

それでは、続きまして医学部人間健康科学科の動画をごらんください。

〔医学部人間健康科学科 映像〕

**松下** 医学部人間健康科学科のコメントは黒木裕士先生にお願いしております。よろしく申し上げます。



**黒木（医学研究科教授）** 人間健康科学科の黒木でございます。大変立派な動画をつくっていただいて、ありがとうございます。

医学部には医学科とともにもう一つ人間健康科学科という学科がございます。この学科はまだできてから10数年の非常に新しい学科でございます。医療技術者を育成するという専門科目をほとんど履修するコースでございます。看護師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、そして保健師をこの学部教育で育成することでございますので、動画の中にごさいましたように、1回生に入学した時点で、つまりまだ医療の現場を余り知らない学生に対して、アーリーエクスポーズ、現場にまさに曝露して、そして現場を知ってもらおう。その知ってもらおうという体験が今後も修学意欲を高めるとともに、出口像、どういう人間になるのか、どういう職種になるのかということを描く。それを描きながら4年間勉強するというのを非常に重要視しております。

もう一つは、技術者になりますので、やはり実践型の学習を行うということでございます。また、歴史が非常に浅い学科でございますし、大学院ができてからまだ間もないということでございますが、今後はこの専門職をさらに高度な実践の専門家にいかに導くのかということでございます。大学院教育との連携ということが課題だと思っております。

以上です。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。

医学部医学科のほうでも一緒にアーリーエクスポージャーもおやりになっているという話をお聞きしました。たくさんの専攻があつて、本当にたくさん映像も撮ったのですが、全部ご紹介できなくて残念です。

それでは、続きまして薬学部の動画をごらんください。

〔薬学部 映像〕

**松下** 薬学部のコメントは、今、動画の中にも登場いただきました加藤博章副研究科長にお願いしております。

**加藤（薬学研究科副研究科長）** 薬学研究科の加藤でございます。

薬学部は、薬剤師を養成する6年制の薬学科と、それから創薬研究者を養成する4年制の薬科学科、その2つに分かれています。薬学科が30名、薬科学科が50名という構成なのです。ですので、ミッションとしては創薬研究者を育てるということと、一方では薬剤師を取って、その後、我々薬学界では育薬という言い方をしているのですが、つくった薬をもう一回育てる、あるいは実際に



は臨床現場で使うところでの研究をするということですが、そういう2つのミッションを持っています。

そうしますと、重要になってきますのは、京大としての主体的な学びというか、自習ということもあるのですが、もう一つコミュニケーションというのがあります。これが研究者同士のコミュニケーションというだけではなくて、他の医療従事者、あるいは患者とのコミュニケーションという問題も早いうちから教育する必要があるかということで、この辺を重視した幾つかの取り組みを今、ご紹介いたしました。



どうしても高校時代成績のよかった子が薬学部へ余り迷わずにというか、悩まずに、薬をつくりたいからというイージーな発想で入ってくるという子が多くて、そういう子に限って成績はいいのですが、なかなか主体的な学びというか、自分が何をしたいかということに余り悩まないで来てしまって、ただ成績がいいので、3年生ぐらいまではほとんど単位だけは取れる。だけど、取った単位が一体どう役に立つのか、あるいは実践的にどう学んだ学問を使うのかというときに、ああいうバーチャルに製薬会社をつくらせて、その得た知識を実践的に使わせるみたいなことを一つはやっています。

それからもう一つは、アクティブラーニングの究極は多分教えるということに学ぶということだと思のですが、それをするために、3年生の学生実習を大学院生がティーチングアシスタントというか、実際にあるグループを教えるというようなことを大学院生の必修単位として課しまして、教えることでもう一度学び直すということを仕組みとして実施しているという状況でございます。

(拍手)

**松下** どうもありがとうございました。

先ほどから流れているさまざまな学部の中で、院生が学部の授業と一緒に入ってTAとして教えるというお話は幾つか出てきましたが、薬学部の場合はそれが大学院の正課の科目にもなっているんですね。そこが非常にめずらしくて、ほかの学部にも参考になることかなと思いました。どうもありがとうございました。

それでは、続きまして工学部の動画をごらんください。

[工学部 映像]

**松下** 工学部のコメントは伊藤紳三郎研究科長にお願いしております。よろしくお願ひします。

**伊藤（工学研究科長）** ムービーの作成、どうもありがとうございます。

工学部では3つのケースを紹介いたしました。最初の定点観測のケース、それからポートフォリオ、それから国際化ですが、主に1番、2番につきまして若干補足説明をさせていただきたいと思ひます。

ほかの学部でも多分よく似た状況であると思ひますが、工学部では、大体留年率が20%ございます。数にして400名を超えるような者が留年する。これは何とかしなきゃいけないということで、留年した子、あるいは場合によっては退学しなければならない子呼び出しましていろいろ話を聞きますと、やはり1年生のときに失速していることが明らかなのです。何とかこれは1年生でやらなきゃいけない。早期発見・早期治療と申しますか、早期ケアをしなければいけないということで、定点観測を始めたわけです。授業科目を指定しまして、これは北野先生に、当時研究科長なのでお



願いして、カードリーダー、学生証で即時に出欠がとれるという機器を導入いたしまして、授業が終了した直後にもう学科事務で出欠状況がわかるという体制を敷いていただきました。2回連続、3回連続して休むと事務室から、あるいは教員から声かけをするということをしました。これを1年間やりまして、さっきあったように欠席削減できた学科では前年度に比べて約半分ぐらいまでいったのです。できなかった学科は（前年と）ほぼ同じということで、工学部全体で大体80%ぐらいまで欠席率を下げることができました。ということで、それなりに成果がありました。取り組み方によって、学科によって全然結果が違っているので、やはり最終的には取り組む人の問題かなという気がしています。

この取り組みをすることによっていろいろパターンがわかってまいりまして、この科目は11月祭が終わったところから学生が休みだす。ある科目は最初10月の2回目、3回目ぐらいになったら途端にギブアップする学生がふえる。やはりその先生の評判といいますか、誰とは言いませんけれども、かなりハードな印象が学生にある。あるいは先生が変わった途端に欠席率が上がるとか、そういう傾向がわかりまして、それなりにおもしろい状況を知ることができます。

それ以外に、ちょっと先ほどムービーでも触れましたけど、こういう1回生のモニターの結果と成績とか単位修得率は、ものすごく相関がはっきりしてしまっていて、1回生の間に前期に取った単位数と2回生が終わったときの単位数は見事に相関しています。ですから、1回生の前期でその人の学習動向が決まっているのだということがかなりはっきりしているわけです。単位数だけではなくて、成績も明らかに相関する。相関係数がすごく高い。やはり1回生のケアが非常に大事だということがよくわかります。

工学部も半期で30単位、1年間1学年で50単位、人によってはもう60単位、70単位ぐらい取ってしまう学生がおりまして、工学部では134単位、大学としては126単位が卒業単位ですので、半数近くを1年で取ってしまうのは明らかに異常ですので、何とかしなければいけない。工学部もおくればせながら平成26年度からキャップ制を導入いたしまして、その結果、明らかに分布の上のほうがかットされて、大体半期で30単位以下ぐらいのところシャープな分布になりました。ということから、キャップ制の導入効果は明らかに見えていますが、残念ながら単位修得率、つまり履修した科目に対して合格率はどうかを見ますと、ほんのわずかしこ改善しない。成績はどうかというと、試験の内容が年により変わりますので必ずしも正確ではないのですが、成績は前年度と全く同じである。この結果にはがっかりしたのですが、この程度のレベル（緩い）のキャップ制では学習の自主化といいますか、効果がないのかなと感じた次第です。

さっきご紹介があった理学部の報告で、最近の学生は随分まじめだという話でしたが、実際授業アンケートを見ても毎年のようにポイントが上がっておりまして、結果的に学習効果が上がったかと思うと、今の調査データからは必ずしもそうではないということにちょっとジレンマを感じております。

その中で、さっき2番目の項目でご紹介がありましたが、電気電子工学科のポートフォリオ、これは随分前から自主的にやっておられまして、2012年、ですからキャップ制が実施される前の年に、学科別の履修単位のヒストグラムをとりますと、工学部6学科ございますけれども電気電子工学科だけが平均で40数単位に押さえられていまして、ほかの学科は全部50単位以上になっているのです。結局制度というよりは、むしろそういうきめ細かな指導が実質的に学生の履修改善につながっているということが見えて、これは良い事例かなと思いました。

1 回生が非常に大事ということと、キャップ制も導入しましたし、それからG P Aも導入されますが、そういう制度はもちろん裏打ちとして必要なのですが、それだけでは学習効果は多分上がらないだろうと感じています。やはり電気電子工学科でやられたような個別指導、人と人の対話の中での指導が重要と思います。それから学部教育としてはやはり選択と集中というか、本当に重要なコアの科目は絞り込んでしっかりと教える。自由に選択できる部分はできるだけ自由にとということで、そういうメリハリをつけることが非常に大事だと思います。工学部の教務委員会のほうにも検討をお願いしているところです。以上、補足説明をさせていただきました。

(拍手)

**松下** どうもありがとうございました。

データに基づいて、今、全学的にも行われようとしているいろいろな制度改革に対する先行的な取り組み、そしてその結果をご紹介いただいて、全学的な改革を考える上で、非常に参考になるお話だったと思います。ありがとうございました。

それでは、最後になりましたが、農学部の動画をごらんください。

〔農学部 映像〕

**松下** 最後、農学部のコメントは宮川恒研究科長にお願いしております。お願いします。

**宮川（農学研究科長）** 農学部は6学科ございまして、研究対象は非常に幅広く、生き物、食べ物というイメージが最初に来るのですが、それをつくる環境、それをつくる人間の組織も研究対象になっています。それぞれの学科によってかなりアプローチの仕方が違うので、学部全体として取り組んでいることの特色は何ですかといわれて、全体としてまとまって取り組んでいることをあげるの難しいなと思ってビデオを見ました。最初に実習科目の重視をあげましたが、これは先に申し上げたように研究対象が非常に幅広くて、とりあえずそれらに接してもらわないと始まらないということです。実験系の学部なら大体どこもやっているわけですが、やはりまず特色としてはそれを挙げざるを得ないというところでは。



ただし、この中で特に若手教員が実験室に出ていって学生としっかりとコミュニケーションをとりながら、少人数教育あるいは双方向性を実践していると言えます。さらに薬学と同じで3年生の午後はほとんど実習科目ですが、それを通じて、学科の連帯感、あるいは学科への帰属意識というのも高まっていくのだと考えています。しかしそういうフェース・トゥ・フェースとか双方向というのは、学生のほうも面倒くさがるケースが少しずつ見られるようになって、こういうやり方が京都大学農学部のいいところなのですよと一生懸命言い続けるのが大事なだろうと思っています。

二つ目に国際化を上げています。これについてはインタビューを受けた教員が大学院のことをイメージしているように思いました。学部のほうはまだまだ留学生が少なくて、これをどうふやしていくのが課題だろうと思っています。

また、科学英語をネイティブの非常勤を雇って一生懸命、もう10年ぐらい開講しているのですが、これはそもそもは2年生をどうやってもっと勉強させるかというところからスタートさせた企画でした。1クラス40人ぐらいで取り組んでおり、特色として上げましたが、全学教育の英語科目の再編がおこなわれるので、平成29年でやめようかという話になっています。そうなればこのビデ



才を再来年はまたつくり変えないといけません。

もう一つ、ほかの学部には出てこなかった高大接続を、キーワードとして挙げました。内容は全学で実施しているELCASが中心ですが、農学部としては、今、高校生に対して、理系なら理学部でしょう、工学部でしょうという進路指導がされるような傾向を感じており、その中で農学も食べ物、あるいはその食べ物になる生き物をめぐる生命科学、環境学という理系的な面がたくさんあるのだということを高校生にしっかりと知ってもらいたいと考えています。そのような考えに立ってELCASも大いに活用していきたいと思えますし、さらには入試でも、これだけの多様なことをやっている学部なのに一般入試は学部共通の問題で選抜しているのに対して、それぞれの学科でこういうことをやってみたいという、もう少ししっかりした目標を持った学生を入学させるために特色入試を実施していきたいと考えているところです。

ありがとうございました。（拍手）

**松下** どうもありがとうございました。ELCASについては午後の部でもまたご紹介あるかと思えます。

今、10学部11本の動画と、それからコメントをごらんになって、そしてまたお聞きになって、どういうご感想をお持ちになったのでしょうか。

専門分野が多様であることはもうわかっていたわけですが、こうやって各学部の授業、教育を見ていきますと、全て選択というところから全て必修というところまで、やり方も非常に大きな幅があるなと思えました。

ただし、一方で幾つか共通する取り組みもあるように思います。まず例えば1回生の教育がとても重要であるということがいろんな学部から出てきたと思います。1回生にどういうふうに働きかけていくかということで、これはもちろん教養・共通教育ということで国際高等教育院のほうでもおやりになっているわけですが、学部のほうからのアプローチとして、例えば専門基礎演習を入れるとか、あるいはオリエンテーションをしっかりとやるとか、そういったような学生支援をきちんとやるという事例がいくつか挙がったと思います。

それから逆に、上のほう、学部と大学院の連携と申しますか、大学院生を学部教育にもかかわらせたり、あるいは文学部のように全く学部と大学院の垣根を取り払うというやり方もありました。いずれにしても、学部と大学院を連携させて、お互いの教育効果を高めていくということがかなりの学部に共通していたと思います。

さらに、ST比（教員1人あたりの学生数）が非常に低いというか、1人の教員が持っている学生数が非常に抑えられている、少人数教育というのも大きな特徴としてあったと思います。

それから、実際にやってみることをとおしての学習ですね。そこには実験もあれば、フィールドに出かけて行ってそこで体験するということもあります。フィールドで問題を見つけて高学年での研究テーマにつなげるといったようなことも、学問分野を越えて行われていたように思います。

こうやって見ますと、入って来る学生は京大に入ってくるということで、共通している問題を抱えていたり、あるいは可能性を秘めていたりする部分もあるので、学部を越えてこういう形で各学部の取り組みを共有していただいて、対話のきっかけにいただければと思います。

全学的な課題としてあげられるのはまず国際化ではないでしょうか。国際化については各学部がかなり努力して取り組まれています。やはり学部だけでは難しいところもありますので、全学的な対応もぜひお願いしたいと思えます。

それから、工学部とか理学部のところから出てきましたが、きちんと学生のデータをとって、それを教育の改善や学生の支援に生かしていくというようなことも、これから京大として取り組まれるべき事柄かなと思えました。

学生支援について、理学部はこんなに丁寧やってらっしゃるのだと思ったのですが、ただ、世界的に見ますと、例えばハーバードなどの一流の研究大学では非常に手厚く学生支援が行われています。ですから、今までの京大に比べるととても丁寧で、丁寧すぎるんじゃないかと思われる方もいらっしゃったかもしれませんが、京大の自由の学風を生かしつつ、かつ学生を丁寧に育てていくという、ここをいかにうまく折り合いをつけていくというのが、これからの京都大学の課題になるのではないかと思います。

それでは、そろそろ時間になりましたので、このあたりで進行役の田口先生にまたマイクをお渡ししたいと思います。

**司会** ありがとうございます。

**松下** すみません、一点付け加えさせてください。私たちのセンターでこの動画を作成したのですが、特にここにおります2人の研究員が中心になって作成しました。2人は、川添先生がちょっとおっしゃっていたのですが、文学部の哲学出身で、哲学出身の人がこういうビデオをつくれるというところが、京都大学の懐の広さを示しているのではないかなと思っております。どうもありがとうございました。（拍手）

**司会** ありがとうございます。これだけのビデオをつくるのはすごく大変だったと思うのですが、これだけのものを連続して見られた先生方もすごくお疲れだと思います。お待ちかねの昼食休憩になります。

午後は1時半から開始ですけれども、5分ぐらい前にはこちらの会場にお戻りいただければと思います。「総長もまだ見たことのない、総長が出てくるビデオ」が流れると聞いておりますので、どうぞ、5分ぐらい前にお戻りください。

（休 憩）

**司会** それでは、午後の部を始めたいと思います。

これから何人かの先生方にご講演いただきますが、質問等をいただく時間はその都度設けておりません。先ほど総長のご講演のときにお示しした質問票を使って、その続きに書いていただければと思います。

それでは、北野正雄教育・情報・評価担当理事から、「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」と題して講演をお願いいたします。

北野先生、よろしく申し上げます。



## 7. 講演：「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」

教育・情報・評価担当理事 北野 正雄



私のほうから 30 分ほどお話をさせていただきたいと思いません。タイトルは「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」ということでお話しさせていただきます。

まず文部科学省発の情報、我々に対する外圧ということで、少し状況をお話ししたいと思います。これも言われていることですけれども、グローバル化、情報化、少子高齢化といったいろんな社会の変化があって、大学の教育もそれを踏まえて変えていかなければならない、そういう外的な状況があるということでございます。これも紋切り型ですけれども、やはり大学というのは社会を支えていく非常に重要な要素であるという認識

をしっかりと、大学を変えていくということが求められているわけでございます。

これもあちこちに出てくるデータですけれども、18 歳人口はこういうカーブで変化しています。今、我々はちょうどこの辺の、少しフラットなところにいますが、もう数年するともう一回落ちる状況にあります。我々ぐらいの世代の教員ですと、前回の急激な変化というのを体感してしまして、毎年学生のレベルが下がるので、授業を簡単にする、追いつかないのでさらに簡単にする。前もって簡単にしてもまだ追いつかないというすごい状況を体験したわけですね。次の変化は数的には少し弱いものの、割合としては恐らく同じぐらいの減少になるので、もう数年すると、現場の先生方、若手の先生もそういうことを再度体験されるだろうということですね。

これは中央教育審議会の答申ですけれども、文部科学省から「学士課程教育の質的な転換」ということで、これはかなりテクニカルな話ですけれども、課程の体系化、コースツリーをつくりなさい、あるいはナンバリングをやりなさい、組織的な教育をやりなさい、シラバス、全学的な教学マネジメントの確立ということで、システムをちゃんとつくりなさいということが求められているわけですね。

まずコースツリーですけれども、これはきょうも既に午前中の各学部の紹介で想定案のようにコースツリーが出てきています。学部のコースツリーは既に完成していて、きょうも使われているわけですけれども、これはプログラムの可視化ということに非常に役に立っています。これはFD研究検討委員会から高等教育研究開発推進センターを中心に学部のコースツリーをつくっていただきました。この作業はFDとしても非常に有効に働きまして、やはり自分のところの学部・学科のプログラムはどうなっているのか、今まで何となくこんなのだという思いでやっているのですけれども、やはり可視化してみると捉え方が随分変わるわけですね。そういった意味で、このコースツリーというのができたことは非常に大きいと思います。それぞれ学生にとってどういう意味があるか、教職員にとってどういう意味があるか、大学にとってどういう意味があるかというようなところを実感できたのではないかと思います。私もこれをときどき見させていただいていますけれども、非常に見ていて楽しい、大学が遊園地というか、いろんなものが中に入っているということがよくわかるので、恐らく高校生が見ても楽しい、そんな人がどれだけいるかわかりませんが、知的なことに興味のある高校生はきっと楽しんでくれると思われたいです。

余り具体的な話はしませんけれども、各学部・学科で工夫を凝らしたコースツリーができています。現在は大学院のコースツリー、コースツリーというよりむしろ可視化ですね。大学院の場合はなかなかコースツリーという単純なスキームではうまくいかないの、何らかのビジュアライゼーシ

ョンをやっぺいこうということで、現在、検討が進んでおります。

ナンバリングのほうはちょっとおくれておまして、京都大学は大きい大学なので、全体を統一的にナンバリングするというのは大きい課題です。まじめに考えると桁数がめちゃくちゃ大きくなって何のことかわからなくなりますし、短くすると今度ユニークな番号が確保できないというジレンマがありますけれども、現在、コースツリーと同じく検討を進めていただいております。

そのほか、シラバス標準モデルの作成、それからGPA、これも随分長く議論していただきましたけれども、とりあえずGPA制度を平成28年度入学生から適用するというを決めていただきました。それから学事暦ですけれども、現行の学事暦もある種複合して改正できているわけですけれども、必ずしもいいという状況ではないので、さらに短期留学、それからサマースクール、その他インターンシップ等、学生が行きやすいような、あるいは受け入れやすいような学事暦を検討していく必要があるということです。

次は、学部の入試のお話に移りたいと思います。京都大学は特色入試を平成28年度から始めるわけですけれども、その準備が現在、進んでいるところでございます。私も、それから理事補の先生方も、今、高校ですとか予備校ですとかいろんなところへ行って、特色入試を始めますのでぜひよい学生さんを送ってくださいというキャンペーンをしているところでございます。

入試の一般的な問題を少し議論したいと思います。入試というのは選抜をするということで大学としては避けられないことなのですけれども、やはりいろんな副産物、副次的な弊害というものがどうしても出てきてしまいます。ここに書いてあるようないろんな問題が出ております。

あとは統一テスト、そういったことをやっていくことによって偏差値という尺度がユニバーサルにある程度明らかになるので、それによって大学ですとか学部の序列化が進んでいく、偏差値が濫用される状況になります。偏差値で大学を選ぶということが進んでいくとミスマッチ、何でここへ来たのだろうと問われて答えられない学生がふえてくるということになります。それから、やはり入試のシステムとか受験的システムというのが完備されてくればくるほど、入学者の多様性が失われていく傾向にあるように思います。地域の偏在、高校のタイプ、それから留学生がなかなか来られない、そういう状況になっていきます。

これは偏差値スライスがどのように起きているかというのを定性的に示したものです。ある学部の合格者を首位から合格ラインまで並べますと、得点がだんだん首位から減っていくのですけれども、入試のシステムが整備されてくると、こういうふうにだんだんギリギリを狙っていくという傾向が進行いたします。みんな同じような、学力的にはどんぐりの背比べの学生がそこに集中する。これはデータを取ってみると明らかに出来ます。これは実際のデータですけれども、こういうふうにボーダーラインに集中する傾向が見られます。これは受験産業的な情報が伝わって、ここならあなたは通りますということを示している結果、こういうことが起きます。

スライス化をする結果、総合得点だけでやっていると、例えば余り理科が好きでない学生が理系に入ってきて、前に進めなくなる。それから何より深刻なのは、学部・学科に関する知識とか関心が低い学生が入ってきてしまって、午前中の話にもいろいろ出てきましたけれども、モチベーションがわからない、落ちこぼれてしまう。いろんな落ちこぼれのタイプがありますけれども、ほかの活動に逃避したり、あるいはまじめな学生ですとメンタルでつまづくというようなこともたくさんあります。

入試で何でもはかれるというのは、一部そう信じている人はたくさんいますけれども、やはりなかなかはかれないものがあるわけです。能力ではかれないものがあるのですけれども、どうしても評価されないものは切り捨ててしまう。試験に出ないものはやりません、勉強しません、そういう

「やらない症候群」が蔓延するということになります。入試で何でもはかるというのが無理なのは、やはり高校生というのは伸び盛りですから、ことしだめでも来年すごくよくできるかもしれないので、固定的にラベルを付けられるものではない。それから言うまでもないことですが、人の能力というのは多元的なものですから、一次元尺度ではかかれるはずもないわけですが、入試というのはどうしてもそういう方向に行ってしまうということでもあります。

最近、私はあちこちで宣伝というか、こういうキーワード、入試というのは選抜ではなくてマッチングであるということを高校生、あるいは高校の先生にできるだけお伝えをするようにしています。上のように入試に特化したような考え方ではなくて、生徒一人ひとりの適性や興味を重視して、彼らがそれぞれの能力、才能を發揮できるような、そういうことをやるために入試制度、アドミッションがあるのだということを言っております。この中で、入試だけではなくて高大接続活動が非常に大事で、各生徒に大学はどんなことをするところなのかということを知ってもらえる機会が必要だと考えています。

これは何も大学に入ることだけではなくて、大学の出口でもまさにマッチングが大事でして、どういう仕事に就くかということが大事です。大学としては入り口のマッチング、出口のマッチングということをきっちり考えていくことが大切です。社会的課題でもあるわけです。マッチしない状況で無理やり働かされ、効率が下がるというのは全くばかばかしいわけです。できるだけ「好きこそものの上手なれ」が生かせるような社会にしていく必要があるわけです。

入試改革につきましてもある種の外圧というか、こうしなさいというようなことが矢継ぎ早に出てきております。このあたりは新しいところですが、入試改革の必要性が外から強く迫られているという状況でございます。一方で、他大学ではAOとか推薦入試ということも進んでおりまして、そういったものをもっと広げていきなさいというプレッシャーも出てきているわけでございます。

一方、京大の現行入試に関して言うと、それほど悪くないと、ほとんどの先生は思っています。実際いろいろな問題が考え出されており、そうでないと言う人は余りいない状況です。非常にレベルが高くて良問である、それから高校での学習にも使われている。それから入学してきた学生のアンケートでも、京大の問題は非常によかった、勉強してよかった、あるいは好きである、そういう意見がたくさんあるということで、ペーパーテストを本質的に変えるというドライブがなかなかかからないことも事実でございます。

とは言え、先ほどから言っていますように、外からは入試機会の複数化ですとか、きめ細かな入試をせよとは言われ続けているので、いろんな検討をしてきているわけでございます。一長一短なので、AOについては学力保障をどうするのか、面接だと面接で適当にごまかされてしまうということもあったり、逆に先ほどから言っていますように、今の入試で何が悪いのだという考えもあったりで、なかなか前に進まないということが現実でございました。

その中で、あえてということで特色入試というものの検討が具体的に始まったのが平成24年6月でございます。その後、各段階を経まして、平成28年度入試から全学部で導入が決定されたということでございます。本日お配りしているのはこの特色入試学生募集要項ですので、もう既にごらんになった先生方も多いと思いますけれども、機会がなかった先生方は一度中身を見ていただければと思います。サンプル問題集というのも出しておりまして、これを配布しようかと思ったのですが、部数が足りないの、ご興味のある方は言っていただければお渡しできると思います。各学部・学科の工夫を凝らしたサンプル問題ができております。

京大の特色入試は、一応学部・学科別で、AO、推薦、後期日程というそれぞれのやり方で実施します。それから、定員は100名程度、定員の3%といったところです。特徴としては高大接続型、



先ほどから言っているような高校での活動と大学での学びをつなげる、そういう考え方を根底にしてデザインされているわけでございます。

ここはアドミッション・ポリシーについて書いてあります。特に特色入試を通じて求める人物像というのは学部ごとにといいことで、京大全体というよりはそれぞれのところにどんな学生がほしいかということをしかり出していくというのが特徴でございます。

それから、高校でどんなことをやってきたか、それから大学で何をやりたいかというようなことを学びの設計書、学びの報告書といった形で受験生に書いてもらい、紙の上ではありますけれども、高大接続ということ意識しようとしています。一方で、入ってからということがありますので、その学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力をはかるという意味で、ペーパーテストを課するところもあれば、試問・面接をやる場所、あるいはセンター試験の結果を使うところもあり、基礎的な学力と志、両方を見るというのが設計の指標でございます。

今後は、特色入試と一般入試を併用する形で進めていくわけですが、それぞれの特徴を生かして両方の入試を実施していくというようなことでございます。繰り返しになりますけれども、特に特色入試とは、学部・学科が自分のところでこういう学生がほしいのだということを想定して、独自の選抜方法、評価基準、問題を作成し、高校生と直接対峙して、自分たちの将来の後継者とまでは言えませんが、その分野を支えていくような人を選んでいくというようなことかと思っています。

このサンプル問題あるいは過去の問題は、我々としては学びのショーケースという言い方をしていますけれども、高校生が見た時に、各学部・学科でどんなことを勉強するのだ、あるいは将来どんなことを研究するのだということが伝わるように、そういう窓の役割、山極先生のWINDOW構想ではありませんけれども、高校と大学をつなぐ窓の役割をするということになるかと思ひます。将来は高大連携活動と何らかの形で連携させていくことも考えられます。それから、一般入試で何らかのフィードバックをかけるということで、両方の入試のよさを生かしていくという方向性が考えられます。また、作題することによってそれぞれの教員が直接高校生と対話をするということも大きい意味があるかと思ひます。

他大学の状況ですけれども、東京大学は学部別の推薦入試という形で、平成28年、我々と同じですけれども、定員の3.3%で始めるということです。東大の場合は学部・学科で入試をしていないので、この推薦入試のほうが学部・学科別に行うことで、際立たせることができます。大阪大学は世界適塾入試ということで、平成29年から定員の8.3%。それから、東北大学はAO入試を随分昔からやっておられて、現在、定員の20%程度をAO入試でとっておられます。将来27%というところまでふやすということを検討されています。京大はこのような状況の中で特色入試を平成28年から始めるということでございます。

次に、高大連携活動についてお話をしたいと思ひます。入試というのはやはり限界がいろいろありまして、ランキング、ブランド化ということで、先ほどから言っていますように適性ですとか志ということがどうしても抜けてしまう傾向にあります。それから、先ほどの輪切りのグラフを見ていただくとわかるのですが、我々が入試をしても志望者の中からしかとれないという、ものすごく大きい制約が実はあって、その中で全然志のない人ばかりになってしまうと、何をしても意味がない。入試をした意味がないということになります。ですから、志のある人に来てもらう、受けてもらうというところに力を注いでいかないといけないわけです。そういう意味で、マッチングを促進する仕組みが必要で、それは高大連携活動だというふうに認識をしております。

京都大学は既にSSH、SGHなどの課題学習の支援を、教員の個人的な情熱もあるのでありますが、積極的に展開しております。出前授業、あるいは研究室へ高校生に来てもらう、こういう事

業のプログラムのサポートをする、そういったことをしてきました。従来、割と個別的活動だったのですけれども、最近は大学全体としてこれをしっかりやっというここと、教育委員会との連携をする、あるいは大学のほうから主体的にプログラムを準備して、そこに参加してもらう。待ちの姿勢ではなくて攻めの姿勢でいこうというこことを目指しています。後ほど森脇先生から話があると思ひますけれども、ELC AS、これは高校生に來てもらうタイプのプログラムですけれども、そのほか学びコーディネーター、これは大学院生に高校に行つていただく、派遣をしていく、そういったことを主体的にやっというこことでございます。

ELC ASは森脇先生がお話しされるので飛ばしたいと思ひますけれども、高校生が8回土曜日隔週に來て、こういった課題に取り組むというものでございます。高校1年生、2年生向きでございます。

これもELC ASのスライドです。

それから、サマースクールというのをやっというここと、高校生に來てもらつて体験授業をしてもらうというよな活動もしてあります。

また、これは中学生向きですけれども、ジュニアキャンパス、これも多くの先生に協力していただいておりますけれども、もう何年もやっというここと。11回目になる今年から少し様子を変えて新しい装いで、新たなプログラムとしてスタートすることになってございます。

入る前のマッチングですけれども、今度に入つてからアダプテーションという意味でのマッチングが必要でして、そこを国際高等教育院を中心に平成28年度からさらにいろいろな取り組みをしていただくこととなります。特に英語による教育の強化ですとか英語教育の再編、それから少人数教育の充実、そういったことをやっというここといただいております。これについては後ほど喜多先生のほうからご紹介があると思ひますので、軽くいきたいと思ひます。

これは英語の力というこことを書いたスライドです。入試までは英語力は上がるのですけれども、どんどん下がつていって、研究室に入つたらまた上がるという状況を単に書いているだけです。せめて入学時の力を維持、できれば力を伸ばしたいという思ひがあるので、これに向けて、今、教育院を中心に改善をやっというここといただいているというこことです。

これは外国人教員を中心にして英語での教養・共通教育をやっている、英語で学ぶ全学共通科目のパフレット、ポスターでござひます。こやっというここと英語で学ぶ機会を確保して、留学につないでいこう。そこからあとは、海外からの留学生を受け入れやすいようにしようというこことやっというここといただいているわけでございます。これは喜多先生がお話しになるので、省略をさせていただきます。

それから、留学生の件は午前にもかなり議論をされておりました。少し大雑把なお話をしますと、年によつて変動がありますけれども、ざつくり学部留学生200名、修士が400名、博士が800名、ほぼこいう数です。倍々になっているので覚えやすいのですけれども、一方、母数のほうは、逆傾向になるので、割合からしますと学部生は留学生率が非常に低いという状況にあります。途中からどんどん入つてくるというこことが京都大学の留学生の現状でございます。特に学部的に言ひますと出身国に著しい偏りがありまして、50%が中国、40%が韓国というここと、学部の部分が国際化、多様性という意味では著しく見劣りがするのが現状です。これはぜひ組織として取り組んでいかないと、各学部の努力も必要ですけれども、大学全体としてどうするかというこことを検討する必要があります。特に学部の国際化というこことは日本人の学生にとつても非常に重要なこことござひまして、留学しなくても京大にいたらある程度実質的に留学するよな状況ができるのが非常に大事です。今、吉田南に行つていただきますと、少なくとも先生方はかなり国際化されて少しこいう雰囲気が出てきているのですけれども、肝心の学生のほうは国際化されていない。非常にアンバランスな状況がありますので、これは早期に解消する必要があると思ひています。



まとめですけれども、マッチングというキーワードを出させていただきます。京都大学としてはこれをポジティブフィードバックに使おうという下心でございます。まず学力だけではなくて、意欲、志のある学生、特に京都大学に来たいという学生を頑張って増やす。それはまさに京大の固有の教育の仕方とマッチングしているような、そういう若者に入ってもらうような努力をする。そのことによって京大らしい教育がより展開しやすくなる。言ってもそれに応えてくれない学生ばかりが集まってしまうと、先生が幾ら一生懸命踊ってみても、学生は踊らないので疲れるだけというわけです。ちゃんと踊ってくれる学生がたくさん入れば先生のほうも非常に頑張れるということで、京大らしい教育の展開が可能になる。本当の意味の自学自習、自分たちでおもしろいことを一生懸命進めてくれる学生がふえたり、あるいは大学ですから、そこで質の高い会話ができたり、議論ができたりする、そういうクラスなり場ができる。その結果として、学問ですとか研究マインドを持った一人前の学生ができる、そういうことにつながれば結果として京大の研究・教育レベルが上がる。「風が吹けば桶屋が儲かる」ですけれども、その結果として再び世界から意欲、志のある生徒が京都大学に来る、こういう好循環、フィードバックをつくって、京大の将来を担保していくということが必要かと思えます。

最後ですけれども、マッチングを重視した入試をやりましょう、それから初年次教育、教養教育の充実を図りましょう、それから今後としては教育の国際化ということをしっかりやっていかないといけない、こういったことを考えております。

以上です。（拍手）

**司会** ありがとうございます。

ここからは、今、北野先生からのお話にもありました幾つかの取り組みについて、各論に当たるかと思うのですけれども、3人の先生方にそれぞれ20分ずつご報告をしていただきます。

まず初めに、「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」と題しまして、森脇淳理学研究科長／教授からご報告をお願いいたします。



大学を取り巻く環境と教育改善の取組

### 大学を取り巻く環境

将来の予測が困難な時代  
グローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化は我が国社会のあらゆる側面に影響。

↓

大学改革に対する期待の高まり

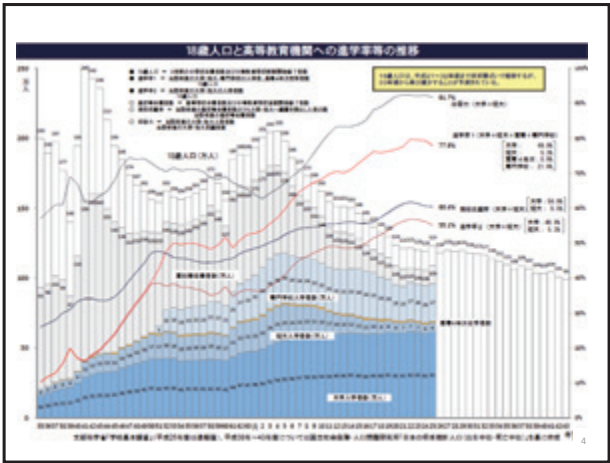
- ・産業界や地域社会は予測困難な次代を切り拓く人材や学術研究に期待。
- ・大学進学率が5割を越え、我が国の高等教育は新段階。
- ・国立大学法人化や認証評価制度の導入から10年。

今求められているのは、我が国が目指すべき社会像を描く知的な構想力、知の創造と蓄積を担う自律的な存在である大学は

- ・新しい知識やアイデアに基づいた新しい時代の見通しと大学の役割を描き、次代を切り拓く人材の育成や学術研究の推進

により、未来を形づくり、社会をリードすることが求められている。

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)より



### 大学を取り巻く課題

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)  
(平成24年8月)

求められる学士課程教育の質的転換

- ・教育課程の体系化  
→コースツリー、ナンバリング 等
- ・組織的な教育の実施
- ・授業計画(シラバス)の充実
- ・全学的な教学マネジメントの確立

### 京都大学の取組み コースツリー

コースツリー

- ・「学生に身につけさせる知識・能力と授業科目との間の対応関係を示し、体系的な履修を促す体系図、カリキュラムマップ、カリキュラムチャート等」

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)より

学生にとって

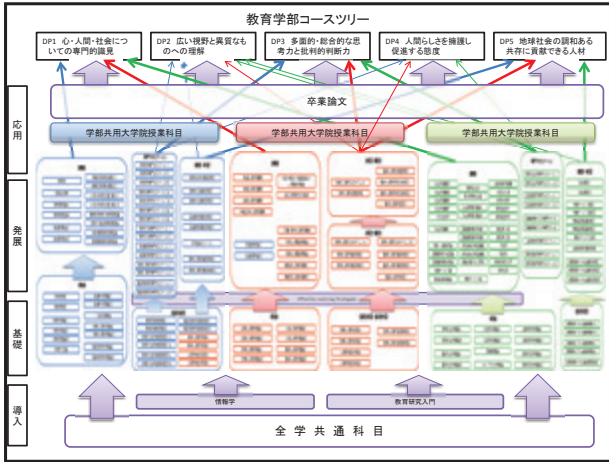
- ・入学から卒業までの履修の仕方がイメージしやすくなる
- ・他学部・学科、他大学、外国の大学での科目との対応

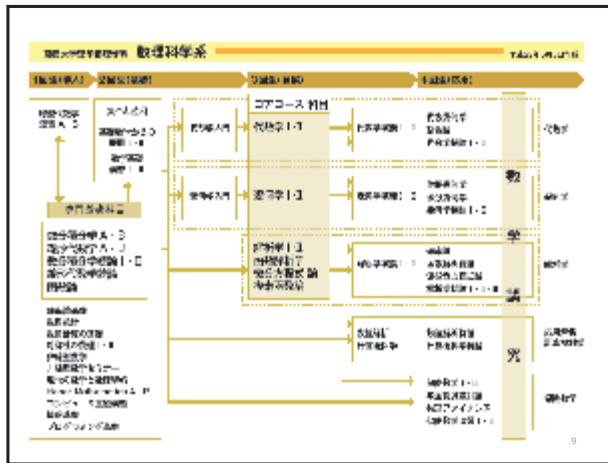
教職員にとって

- ・担当する科目と他授業科目との関係の把握
- ・カリキュラムの見直し
- ・ディプロマ・ポリシーとの関係

大学にとって

- ・教育プログラムの見直し
- ・情報発信(大学教育の可視化)
- ・将来の学生(高校生)に向けたメッセージ





京都大学の取組み ナンバリング

### ナンバリング

「…科目を履修する学生をはじめ、当該大学の学部・学科等が提供している教育課程の内容に関心を持つ全ての人に教育課程の体系が容易に理解できるように、**科目間の関連や科目内容の難易を表現する番号をつける(ナンバリング)など、教育課程の構造をわかりやすく明示する工夫が必要である。**」

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)より

本学での導入

現在、ナンバリングの導入に向けて検討中。なるべく早期の導入を目指す。

京都大学の取組み その他

### シラバス標準モデルの作成

平成26年度に学生の主体的な学びを助けるための情報提供を目的とし、「シラバス標準モデル」を作成。今年度より運用している。

### GPA制度の導入

学生の自律的な学修の促進及び学生に対する学修指導等に活用することを目的として、平成28年度以降に入学した学生を対象とした学部生を対象に導入。

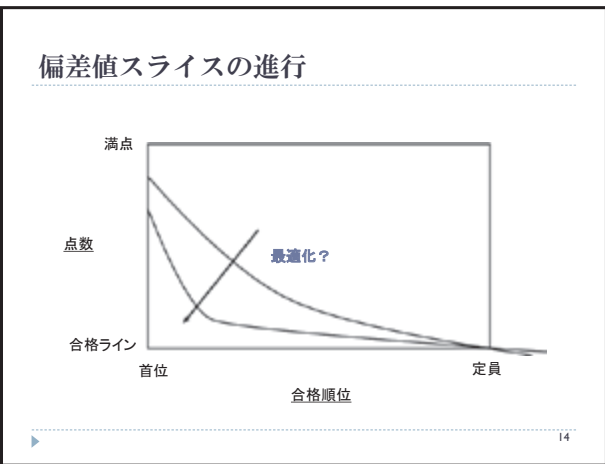
### 国際化に対応した学事歴

学生の自律的な学修の促進及び学生に対する学修指導等に活用することを目的として、平成28年度以降に入学した学生を対象とした学部生を対象に導入。

### 学部入試 --- 特色入試を中心に

### 入試制度の一般的問題点

- 高校教育に与える影響
  - 第2の学習指導要領 → 未履修問題
  - 入試科目以外の軽視 → 幅広い学びを阻害
  - 受験テクニック → 背骨で考える
- 偏差値重視
  - 大学・学部の序列化 → 偏差値による輪切り
  - 偏差値による大学・学部選び → **入学後のミスマッチ**
- 入学者の多様性の喪失
  - 地域の偏在
  - 高校のタイプ
  - 留学生数の伸び悩み



### 学生の資質・関心

#### スライス化の結果として

- ▶ 数学や物理・化学が苦手な学生(理系の場合)
  - ▶ 理系基礎科目でつまづき、先に進めない
- ▶ 学部・学科に関する知識や関心がない学生
  - ▶ 地道な学習に耐える動機がない
  - ▶ 容易に落ちこぼれる
    - ▶ バイト、サークル活動に逃避
    - ▶ ひきこもり、メンタルトラブル

### 能力の評価の問題点

- 測定が困難な能力も多い
  - 重要な能力ほど測りにくい
- 評価されないものは切り捨てられる
  - 試験に出ないものは、やらない症候群
- 能力は固定的な属性ではない
  - 時間や環境に依存する
- 能力は多元的である
  - 評価の足し算は要注意

アドミッションは、**選抜** ではなく、**マッチング**



単純な尺度で切り分け  
内容よりブランド、ランキングを重視  
無意味な競争の激化



適性や興味を重視  
--- 各人が能力や才能を発揮する機会  
高大接続活動が重要な役割  
就職においても同様  
適切なマッチングの仕組みは社会的課題

## 改善の方向性

### 社会的状況

- 文科省「大学改革実行プラン」(平成24年6月)
- 教育再生実行会議「高等学校と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」(平成25年10月)
- 中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(平成26年12月)

### 他大学AO・推薦入試の成功事例

- AO・推薦入試入学者の追跡調査
- 積極性、リーダーシップ、大学院進学率等での高評価

## 現行の京大入試の評価

- オリジナル問題の作成 → 良問という評価
  - ・ 各分野の専門家、研究者による作題
  - ・ 高校での学習に活用
  - ・ 学生の評価も高い
- アドミッション・ポリシーに見合った記述主体の選抜方法
- 異なった視点による選抜方法
  - 文系学部における理系入試

## 京大における入試制度改革の検討

- ・ 後期日程試験廃止後、後期日程試験に代わる入試制度について継続的に検討
- ・ AO入試については学力確保が課題
- ・ 面接の実効化における技術的課題
- ・ 現行入試制度への信頼

## 特色入試の検討過程

平成24年6月  
高大接続型京大方式特色入試の検討を開始  
平成25年3月  
平成28年度入試から全学部で導入を決定  
平成26年3月  
特色入試選抜要項《概要》  
平成26年12月  
特色入試選抜要項《予告》  
提出書類様式 サンプル問題集  
平成27年6月  
特色入試学生募集要項

## 特色入試の概要

- ・ 学部・学科別  
AO入試、推薦入試、後期日程
- ・ 定員は100名程度
- ・ 高大接続型  
高校での活動を大学での学びに接続

## 特色入試が求める人物像

### 京都大学のアドミッション・ポリシー

- 「対話を根幹とした自学自習」が教育理念
- 自ら積極的に取り組む主体性
- 基礎的学力
  - ・ 高校教育課程で培われる分析力と俯瞰力
  - ・ 高校教育課程で修得した内容を活用する力
  - ・ 外国語運用力を含むコミュニケーション力

### 特色入試を通じて求める人物像

特色入試選抜要項に**学部ごと**に記載

## 特色入試における評価の観点

- 高等学校での学修における行動や成果
  - ・ 高等学校時代の学びの実績
  - ・ 京都大学の学部・学科で学ぶ意欲と志  
「学びの設計書」「学びの報告書」など
- 志望する学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力
  - ・ 各学部・学科のカリキュラムの習得に必要な基礎学力
  - ・ 各学部・学科の専門性に適合した能力  
能力測定考査 / 口頭試問・面接 / センター試験



## 特色入試 vs 一般入試

### 一般入試

- 共通問題を課し、教科・科目の選択や配点が、求める人物像へのメッセージとなる間接的な選抜

### 特色入試

- 各学部・学科が求める人物像を想定し、独自の選抜方法や評価基準、問題を作成して行う、直接的な選抜
- 大学・学部・学科との**マッチング**を重視
  - ・ 教育内容・研究内容を見て進路を選ぶ
  - ・ 志願者が求めるもの・目指すものと本学の教育・研究内容を摺り合わせる

25

## 特色入試の意義

- 大学における学びのショーケース
  - 課題、問題を通して、学部・学科での学習、研究の方向性を高校生に提示
  - 作題などを通して、各教員の高校教育への関心を高める
  - 定員は少ないが、**高校と大学をつなぐ窓**の役割
  - 高大連携活動との連携
  - 一般入試の方法へのフィードバック

26

## 他大学の入試の状況

- 東京大学
  - 推薦入試（学部別） H28
- 大阪大学
  - 世界適塾入試（AO, 推薦、学部別） H29
- 東北大学
  - AO入試（長い実績あり。定員枠も大きい）

27

## 高大連携活動

28

## 入試の限界

- ミスマッチの助長
  - ランキング重視、ブランド化
  - 適性、志が軽視される
- 志望者の中からしか選抜できない
  - 適性、志がなくても合格させなければならない
- マッチングを促進する仕組みが必要
  - **高大連携活動は有効な手法**

29

## 京都大学の高大連携活動

- SSH, SGHなどの課題学習の支援
  - 出前授業、研究室訪問
  - 委員やアドバイザー派遣
- 従来は教員の個人的活動であったが、組織としての対応も進めている
  - 教育委員会との連携
  - 主体的な取り組みも展開
    - ・ ELCAS、学びコーディネーター、アカデミック・デイ、...

30

### 京都大学における高大連携の組織化



#### 教育委員会との連携

##### 教育委員会との連携協定事業

・ 京都大学サマースクール  
・ 京都大学サイエンスフェスティバル  
・ 京都大学ウィンターミーティング 等

受講人数150名のうち、コンソーシアム加盟教育委員会からの推薦枠を100名程度用意。

#### ELCAS

在籍高校の教員及び教育委員会と本学教員とが密に連携しながら、卓越した幅広い専門的知識を持ち、創造力・先導的な能力を有する科学技術イノベーションの双方を併せ持つ知的卓越人材を育成します。

一般公募枠（50名）申し込み時に高等学校の先生に評価書を記入していただく。

#### 高等学校との連携

##### 学びコーディネーター事業

大学院生を中心とした「学びコーディネーター」による出前授業とオープン授業。平成26年度は全国124校に対し授業を実施。

Page 31

### 学びコーディネーター事業



京都大学では高大連携事業の一環として、本学の大学院生を中心とした「学びコーディネーター」による出前授業とオープン授業を実施しています。

対象：全国の高等学校

授業内容は高校1・2年生向けとし、正課外は問いません。

実施期間：平成27年8月3日（月）～11月30日（月）

#### ※ 派遣・受入の決定について



#### ◆ 平成26年度における実施状況（返折） 登録154校/授業実施124校

	提供授業テーマ	実施場所
1	山東京伝『百人一首和歌始衣抄』	千葉、京都大学
2	景観の経済的価値	兵庫、奈良、石川
3	雇用問題を政治経済から見る	北海道、静岡、東京
4	誰も教えてくれなかった『学期』がすきになる方法	徳島、和歌山、兵庫

Page 32



ELCAS/GSC

グローバルサイエンスキャンパス 京都大学 募集・事業案内

基礎コース教則

1 基礎コース	2 基礎コース	3 基礎コース
4 基礎コース	5 基礎コース	6 基礎コース
7 基礎コース	8 基礎コース	9 基礎コース
10 基礎コース	11 基礎コース	12 基礎コース

Page 33

ELCAS 京都大学 KYOTO UNIVERSITY

在籍高校の教員及び教育委員会と本学教員とが密に連携しながら、卓越した幅広い専門的知識を持ち、創造先進的な尖りある科学技術イノベーション力の双方を併せ持つ知的卓越人材を育成します。

参加資格：1. 高校1年生または2年生であること  
2. 月2回、京都大学へ通えること

受講人数：150名（一般公募枠50名程度、コンソーシアム加盟教育委員会からの推薦枠100名程度）

◆ 基礎コース教則 (基礎)

9月～10月 (開校)

イノベティブ5系(数学・物理、科学・材料、生命・生物、情報・環境)の中から3系選択

基礎コースで1年次

- 情報の表現と検索
- 系外感発見による宇宙観・生命観の大変革
- 創発系量子ニードロノ
- 一見えない粒子を見るには?
- 科学的手法に基づくアルツハイマー病の新しい予防戦略

◆ 基礎コース教則 (実践・研究)

11月～2月

全18分野(数学、物理学、化学、生物学、宇宙地球、コンピュータ科学、社会・環境の科学、数理工学、物理学、分子工学、未来を拓く高分子、ロボット制御、海洋生物資源の科学、昆虫の生態と化学、植物細胞の構造と機能、土の物理 ミクロからマクロへ、地球環境学 1、地球環境学 2)から第1希望から第18希望までを回答。

◆ 専攻コース

1対1の対話型教育を核として、1～3各程度までのグループで研究室に入り、全国・国際コンテストや英文ジャーナル執筆に向けて指導を受ける。

専攻コースで2年次

- 薬科学
- 植物細胞機能学
- コンピュータを使った数学
- サイバーセキュリティ
- 昆虫世界の探検
- 微生物バイオテクノロジー
- 人類進化論

第2月次 第3月次

Page 34

京都大学ジュニアキャンパス (中学生向け)

京都大学ジュニアキャンパス 2015

2015-2016年度 9月13日(日)9:30～17:30 京都大学吉田キャンパス(入館内) 他

Page 35

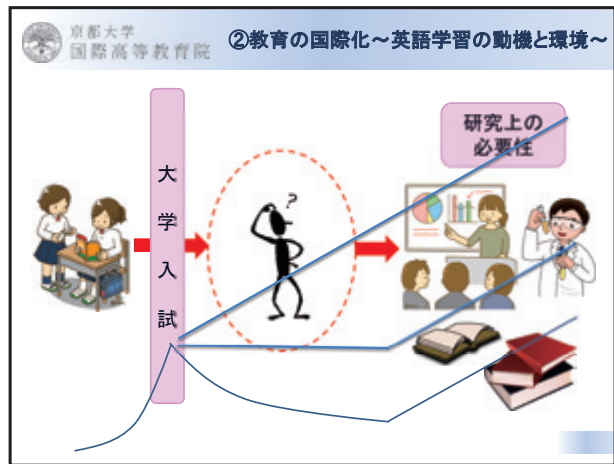
初年次教育 --- 国際高等教育院の取組

36

平成28年度からの教養・共通教育の主な変更点

- 科目群編成の見直し
- 履修しやすい時間割編成
- 英語での教育の強化
- 英語教育の再編
- 少人数教育の拡充
- 統合科学科目の開始
- 初年次教育の充実
- 学習環境の充実

37



京都大学 国際高等教育院 ②教育の国際化～英語学習の動機と環境～

1. 能力の把握

TOEFL ITP を新入生全員が受験  
→ 各自が英語の実践的運用能力を客観的に判定

2. 「英語で学ぶ」機会の確保

従来の「英語を学ぶ」に加え、「英語で学ぶ」機会を確保することで、日常の学生生活を通じて英語運用力を身につける

+ 海外からの留学生受け入れ体制の強化

3. 海外でのサマープログラムへの参加や留学の推奨

Page 39

英語教育の再編

- 1回生向けの英語科目の内容を強化し4技能の向上に努めます。
- TOEFL ITPを実施し、英語教育に活かします。
- 附属国際学術言語教育センター(i-ARRC)による課外学習支援を充実させます。

4技能の強化 英語(1回生)

学習者に応じた科目選択 E科目(2回生)

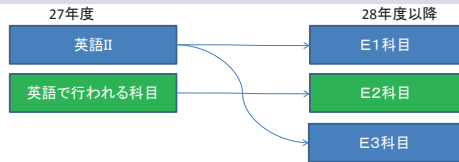
TOEFL ITP TOEFL ITP

i-ARRCによる課外学習支援

40

## 英語での教育の強化

- 英語での授業提供を拡充します。
- 2回生向けに「英語で行われる科目」と英語教育を連携させたE科目を導入します。
- 留学生のために英語での教養・共通教育の履修を充実させます。



41

## 留学生の割合

- Rule of thumb
  - 学部 200名 / 13000名 = 1.5%
  - 修士 400名 / 4800名 = 8.3%
  - 博士 800名 / 3600名 = 22%
- 出身国に偏り
  - 中国 50%、韓国 40% (学部)

学部の国際化は日本人学生にとっても重要

42

## さいごに

- マッチング重視のアドミッション
  - 特色入試と高大連携活動の両面作戦
  - 意欲ある学生(留学生も)の確保
  - 多様性の重視
- 初年次教育、教養教育の充実
  - 中等教育とのギャップの解消
- 教育の国際化
  - 日本人学生の英語力、対話力向上
  - 多様な留学生の受け入れ
  - 英語による講義の充実と活用
  - 海外の大学との連携強化

43

## 8. 報告①：「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」

理学研究科長／教授 森脇 淳



ありがとうございます。理学研究科長の森脇でございます。

何でお前がこんなことをするのかと不自然に思われる方もおられると思いますけれども、担当の副学長の先生が公用で来られないため、私がピンチヒッターとしてやるということになりました。半年ほど前はこういうこともやっていた事情もあり、少しは話せますのでしゃべらせていただきます。

高大接続ということが私のテーマでございます。昨今、キーワードとして注目を浴びておりますけれども、高大接続というのは別にそんなに新しいものでもないと思います。例えば理系の教育を考えてみましょう。理系の学問というのは大概積み上げ型の学問です。最近では高校時代の理科の選択は化学が主流で、あと物理を取るか生物を取るかによって、理系の2科目の選択が決まります。つまり、化学がまずベースにあって、物理か生物かという傾向があります。そういう意味においては、例えば生物はいいのですけれども、物理学をやっていない。つまり高校で勉強していたのだったらいいのですけれども、高校で勉強すらしていないという方もおられる。ところが、学部によっては物理学が必修になっているところがあります。理学部で物理学がない状態で単位を取っていかうと思うとやっぱり障害が出てくるということがあります。ほかにも例えば数学のカリキュラムがころころ変わります。ちょっと前までは複素数をやっていたのが行列に変わったり、また複素数に戻ってみたり、高校時代に何を学んだかということを見捨てて数学のカリキュラムというのは構成できないということがあります。昔からこういうことはそれぞれの先生方が意識してきたことです。そういう意味で、スムーズに高校と大学の教育を接続するということは、別に今、言われるような問題ではないのですけれども、文部科学省、特に下村文部科学大臣が入試改革というものに非常に興味がおありのようです。入試というのは高校と大学の教育の接点ですので、そこを改革していこう。それは理解できますけれども、それに伴って全体の流れをよくしようということで、高校の教育改革もさることながら、大学の教育も含めてやっていこうという形で高大接続改革実行プランというものが設定されたというので、昨今、特に注目を浴びているという状況でございます。

その改革をどのようにするかという工程表、これになってくるとどこまでが本当にできるかどうか私にはわかりませんが、若干絵に描いた餅という点もあるかもしれません。特に皆さんに関係しているところは、大学入試のあり方と大学教育の改革という部分であろうと思います。例えば今年ですと3つのポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの改革です。多分これらのポリシーを何年か前に作られたと思います。今は少しずつ変えられていると思いますが、作った当初は、アドミッション・ポリシーを作れと言われて、その後、アドミッション・ポリシー以外のカリキュラム、ディプロマを作るようになったと思います。順番としては、むしろどういう人材を育てたいか、どういう人材を輩出したいかということから考えて、ディプロマ・ポリシーというのを設定して、こういう人材を育てたいからどういう教育をすべきかということでカリキュラム・ポリシーを設定して、その教育をするためにはどういう人材を入れるべきかということでアドミッション・ポリシーを設定するというのが論理的な順番です。けれども、なかなかそういうわけにいきません。いずれにしても平成27年度にしっかりとしたポリシーを義務づけるということになっております。ほかにもこれから入試改革がいろいろ進んで

きて、この点については木南先生からご報告がありますので、ここでは省かせていただきます。

それから、接続の全般のイメージですけれども、高校側の教育、それから大学、真ん中の入試でございますけれども、特にことしの入学者選抜実施要項の中に、気になるキーワードが入っています。というのは、3つの学力観というものがあまして、1つ目が知識・技能、2番目が思考力・判断力・表現力、それから3番目に主体性・多様性・協働性というものがございます。1番目と2番目のグループは今までの入試でも京都大学でもそれなり確かめていると言えますけれども、3番目あたりになってくるとちょっと微妙な話になります。もちろん3つの学力については一つのパターンのテストで全部やれというのはかなり困難なことがありますので、こういう観点を重要視しながら、今後、入試を考えていかなければいけません。それから、こういう考え方を入れた形でアドミッション・ポリシーもそれぞれの学部で書いていかなければいけない状況だということだと思います。

具体的に京都大学においてどのような高大接続・高大連携活動を行っているか。北野先生から紹介のあった部分とかなり重なる部分がありますけれども、ざっと紹介させていただきたいと思えます。このスライドは山極先生のWINDOW構想です。WINDOW構想で山極先生は大学を窓に例えています。特に高大連携活動になりますと、高校というか、若い人たちから吹いてくる風をどのようにして大学で受けとめていくか、風通しのいい窓をつくっていくかということに当たります。

先ほども出てきましたけれども、まず一つは特色入試という形の高大接続の事業です。もともとはこのような入試をするということを後期入試をなくした時点から京都大学は約束していましたので、その約束を果たしたということでございます。多分もうあと1カ月ぐらいして、10月になると、早い学部ではそろそろ募集があって、ドキドキしながら待っているという状況でございます。特に後でも出てきますけれども、近畿及びその周辺の県の教育委員会と、これは別に特色入試の上で協力するのでなくて、周辺部分を含めているような形で協定を結んで高大連携する体制をとっております。それから、これも言わなくてもいいことかもしれませんが、特色入試はいろんな形で各学部でされておりますけれども、大まかに言ってまずセンター入試によって学力を担保し、学業活動報告書であるとか、学びの設計書等を通して学校における学修の成果というものを判定するというものです。さらに個々の学部においてそれぞれのカリキュラム・ポリシーに沿ったカリキュラムを行っていく上できちっとした適合力があるか、マッチングしているかということも判定していくというものがございます。その形はいろんな形がありますので、細かいことはここでは言わないでおきます。

それから、先ほど申しました教育委員会との連携ですけれども、ここに書いてありますように大阪府、滋賀県、兵庫県、京都府、京都市、和歌山県、奈良県、三重県、東京都、石川県、徳島県、徳島市、福井県と連携協定を結んで、いろんな形でこれから協力しながら高大接続活動をしていこうというものです。その接点として入試があることはもちろんですけれども、それだけではなく広い意味で協力していこうと連携協定を結んでいます。

それから、それ以外に京都大学がやっている主な事業としては、夏に行われている京都大学サマースクールです。私は具体的にはかかわっておりませんので細かいことは了解していませんけれども、文系・理系で23テーマについて模擬授業を行って、講義を通して大学での学びというものを生徒さんに理解いただくということです。大学に来てカルチャーショックになるということになるべくなくそうという意味で、スムーズにコネクションを図り、かつ、京大の紹介ということも兼ねたイベントだと思います。それからもう一つは、これは晩秋、11月ごろにやる京都大学サイエンスフェスティバルというものがございます。もともとは大阪府とやっていたものだと思いますけれども、大学に高校から生徒さんが来まして、いろんな形で研究発表をしていただくというものを指すと思



います。この中で優秀なものについては総長賞であるとか副学長賞だとかを授与することになっています。これも具体的にかかわっておりませんので細かいことは了解していませんけれども、こういう形の高大連携活動をしています。

それから、そのほかに学びコーディネーターというものがあります。大体博士後期課程及びポストドクターの学生さんを中心に、要望のあった高校に出向いて行って、自分の研究を高校生に向かって優しく紐解くという形の授業を展開しています。みんな若い研究者ですので、普段の学会等で専門家の前で変なことを言われて答えられなかったらどうしようというような不安を抱えながら発表するのではなく、自分の研究を若い人たちに紹介しながら、きちっと優しく説明できるということが大事だということを体験していただくことになっています。若い研究者は、当然これから教育者としてもやっていかなければなりませんので、こういう機会を通して教育する楽しさ、あるいは難しさ、いろんなものを学び取ってもらうことも意識しております。単に高校に出向いて行って、京大の紹介をするだけではなく、それ以外にも京都大学にとっては若い研究者を育てるという意味において非常にメリットのあることだと理解しております。

それから、最後になりますけれども、ELCASというものも実施しております。先ほど北野先生から私がしゃべると紹介があったものです。これは夏の前ぐらいに募集をかけており、一般枠と推薦枠というものがございます。推薦枠はそれぞれの都道府県の教育委員会から推薦していただく枠で、100名程度です。一般枠が50名で、応募していただいてこれを選抜するという形になっております。そういう意味で、教育委員会から推薦していただくのはどうしても公立高校からということになりますから、一般枠はどちらかというと、公立高校も含まれますけれども、私学からの応募が多いというふうに理解しております。前期は、実習も行いますけれども当初講義が中心です。後期は、実習が中心になります。専門分野に分かれ、広くいろんなことを実習、あるいは学んでいただき、2月か3月ぐらいにその成果を発表していただきます。その後、さらに選抜をして、国際クラスであったり、専修コースに分かれます。国際クラスというのは海外へ出向いて行って、基盤コースで学んだものを生かしてさらに深い学習をしていただくことになっています。専修コースは、それぞれの研究室に直接行っていろんな指導を受けるという形のもので、実際私も京都府の公立高校から1人生徒さんを受け入れております。よくできる生徒さんですから、素数定理という素数の分布に関する定理を学んでいただいております。大学院生でも力のない学生だったら理解できない内容ですけれども、ちゃんと理解してやっていただけるということは、ある意味楽しくもあります。本来きょうの午後やる予定だったのですが、きょうはここに来るのでキャンセルしました。

ELCASは、こういう形で理系が中心となって事業を展開しております。一応JST（科学技術振興機構）の関係で理系が中心ですけれども、JSTのお金もいつまで続くかわかりませんので、今後、文系も巻き込んだ形で展開できればいいかなと思います。私は責任あって言える立場ではございませんので、多分そうだろうということと言っているわけですけれども、そういう意味において、先ほど出てきました特色入試とも無関係ではない。論理的には関係がありませんけれども、無関係ではありません。と申しますのも、入試をして、マッチングがいい学生をとというのは手間暇のかかることです。こういう形で具体的に生徒さんに接してみると非常にいい生徒さんがいることがあります。そういう意味においては、特色入試とも無関係ではなく、人材を発見するという意味においては非常にいいプログラムだと思いますので、まだまだ理系に限定されておりますけれども、文系あるいは融合的な分野からも手を挙げていただけるとありがたいと思います。

最後になりますが、先ほども出てきましたけれども、アドミッションは選抜でなくマッチングであります。ある意味で、それはそうだと思います。理学部でもどうやって特色入試をふやしていくかということはまだまだ議論を重ねている最中でございます。当初尖った人材をとということであれ

ば少ない人数だけをとればいいということになりますけれども、今後もしかしたらもう少し人数を増やしていくということになれば、必ずしも尖った人材だけを求めていたのではそれだけの人数がとれません。現実はその通りですので、マッチしていない、もう少し安直に言いますと、意欲のない方を意欲のある方に置き換える。置き換えるというと非常に失礼な言い方だと思いますけれども、置き換えるというような発想で少し入試というものを考えて、そういう意味でマッチした人をとるという考え方で入試をやっていかないと、選抜という形ではなかなかつらいかなという認識は、理学部の中では進んでいるかなというような気がいたします。

以上で私の報告は終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

**司会** ありがとうございました。

続きまして、「入学者選抜と特色入試」と題しまして、木南敦教育担当理事補／法学研究科教授よりご報告をお願いします。

大体90分授業でいうと半分ぐらい過ぎたところですよ。あと2つご報告があります。

では、木南先生、ご準備ができましたら、よろしく願いいたします。

**全学教育シンポジウム**  
— 京大流・未来を拓く人の育て方 —

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

京都大学における高大接続・  
高大連携の取組みについて

理学研究科長  
森脇 淳

Page 1

高大接続改革のイメージ

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

■ 高大接続改革実行プラン

※ 高等学校教育、大学教育、大学入学選抜は相互に密接に関連し合うものであり、新しい時代にふさわしい高大接続の実現のためには一貫した取組が必要であることから、三者の一体的改革に取り組むこと。

【平成27年1月16日 文部科学大臣決定】

※ 「知能・技能」のみならず、「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」の育成に取り組むこと。

※ これからの時代に求められる力を育成・評価するために、学力評価のための新テストを実施する。

Page 2

高大接続改革のイメージ

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

高大接続改革に向けた工程表

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度～
大学入学選抜	新テスト導入	新テスト導入	新テスト導入	新テスト導入	新テスト導入	新テスト導入	新テスト導入
高等学校教育	新課程導入	新課程導入	新課程導入	新課程導入	新課程導入	新課程導入	新課程導入
大学教育	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入	新カリキュラム導入
高大連携	協定締結	協定締結	協定締結	協定締結	協定締結	協定締結	協定締結

Page 3

高大接続改革のイメージ

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

高大接続改革の全体イメージ(概要)

Page 4

高大接続・高大連携  
活動の展開

Page 5

WINDOW構想

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

大学を社会や世界に通じる窓として位置づけ、有能な学生や若い研究者の能力を高め、それぞれの活躍の場へと送り出す役割を大学全体の共通なミッションとして位置付ける

W : Wild and Wise  
I : International and Innovative  
N : Natural and Noble  
D : Diverse and Dynamic  
O : Original and Optimistic  
W : Women and Wish

Page 6

高大接続・高大連携のイメージ

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

高等学校

京都大学

高大接続型  
特色入試  
(基礎学力の担保)

※ 中心一校制  
※ 高等学校での学習における行動と成長  
※ 個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定

入試改革検討本部

統計調査

高大連携・入試広報

知的卓越人材の育成

■ 高等学校からの内閣な学びの移行を支援し、高校段階における大学での学び機会を提供

■ 京都大学主催による高大連携事業

教育委員会

■ 高大接続・高大連携に関する協定締結

■ 高大接続・高大連携活動の推進

■ G・D・A・I・S・T・P・A・N事業 (GSC)

■ 連携協定に基づく高大連携事業

■ 大学院生等を高等学校に派遣

Page 7

特色入試

京都大学  
KYOTO UNIVERSITY

センター試験  
(基礎学力の担保)

1 高等学校での学修における行動と成果の判定

2 個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定

学業活動報告書・推薦書

学びの設計書

能力測定調査

口頭試問・面接

■ 入試で高得点をとることに特化した外発的動機に基づく受動的な学びの是正

■ 能力・意欲・適性・志を多面的・総合的に評価する大学入学選抜

■ 幅広い学習に裏付けられた総合性と学力及び高い志を評価できる新しい入試制度

■ 7年間にわたって高等学校と大学とが連携してサポートしていくトータル人材育成の仕組み

Page 8



**教育委員会との連携** 

■ 13都府県市教育委員会との連携協定締結 (平成24年2月～平成26年8月)

◎ 大阪府、滋賀県、兵庫県、京都府、京都市、和歌山県、奈良県、三重県、東京都、石川県、徳島県、徳島市、福井県


(1) 高校生を対象とする多様な学習の機会の提供  
 (2) 京都大学学生による学校教育活動への支援の推進  
 (3) 教育及び研究上の諸課題に対応した調査研究の実施

■ 連携事業の展開  
 (1) 生徒の間において、京都大学に関する関心を高め、その志を喚起するもの  
 (2) 生徒による自律的・探究的学習の充実に資するもの  
 (3) 大学が必要とする、高等学校と学士課程教育との接合に関する調査研究に資するもの

H25: 5件/2, 614参加  
 H26: 13件/5, 745名参加



Page 9

**京都大学が主催する高大連携事業** 

■ 京都大学サマースクール (平成27年8月開催)

- ◎ 相互に知的刺激を受け、切磋琢磨するとともに、異なる文化、伝統、思想等を認め合い、視野を広げる一助とする
- ◎ 文系理系23テーマにわたる模擬授業を開講
- ◎ 学生との座談会 - 交流の中から大学での学びを具体化

■ 京都大学サイエンスフェスティバル (平成27年11月開催)

- ◎ 高等学校における次世代人材育成の高度化に対応する
- ◎ 高校生のチャレンジする意欲・能力にあふれる「研鑽・活躍の場」を形成することを目指す
- ◎ 十分な知識・技能、十分な判断力・表現力、及び主体性を持って多様な人々と協働する力の育成を最大限に行う場と方法の実現をもちます
- ◎ 各都府県市の代表12校による「生徒研究発表」
- ◎ 「総長賞」「副学長賞」の贈呈

Page 10

**学びコーディネーター事業** 



■ 大学院生等を高等学校に派遣

【事業概要】  
 博士後期課程及びポストドクター等を中心に「学びコーディネーター」を組織。

正課・課外、学年を問わず全国の高等学校で出前授業を展開

H25: 43校/6, 889名受講  
 H26: 124校/10, 783名受講

Page 11

**GSC-ELCAS** 

■ 科学体系と創造性がクロスする知的卓越人材育成プログラム

H26: 応募者300名/受講者152名

① 幅広い科学的知識  
 ② 国際性の付与  
 ③ 尖りあるイノベーション力  
 ④ リーダーシップ力をもつ人材

= “知的卓越人材”



(1) 募集 一般・推薦 150名  
 (2) 第一次選抜  
 (3) 基盤コース  
 前期: 講義 (月2回)  
 後期: 実習  
 (4) 第二次選抜  
 (5) 国際クラス [希望者のみ]  
 (6) 専修コース 各研究室に配属

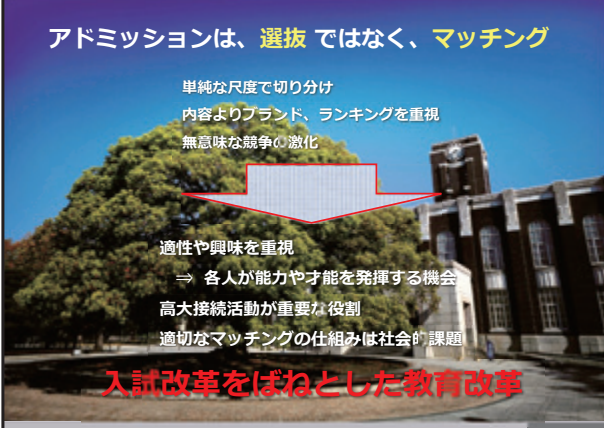
Page 12

**アドミッションは、選抜ではなく、マッチング**

単純な尺度で切り分け  
 内容よりブランド、ランキングを重視  
 無意味な競争の激化

適性や興味を重視  
 ⇒ 各人が能力や才能を発揮する機会  
 高大接続活動が重要な役割  
 適切なマッチングの仕組みは社会的課題

**入試改革をばねとした教育改革**



Page 13



## 9. 報告②：「入学者選抜と特色入試」

教育担当理事補／法学研究科教授 木南 敦

今、ご紹介いただきました法学研究科の木南でございます。

私はこの壇の上に来るのは2度目でして、一度目は入学者選抜方法研究委員会の委員長をしておりました。今回もまた委員長をしております。私の前任の委員長は二度とも数学の教授でして、前は西田吾郎先生で、今回は森脇淳先生です。前は入学者選抜と高校のカリキュラムの一般的な話をしましたが、今回は京都大学の入学者選抜が置かれている状況を知るために、データに基づきながら話したいと思います。お手元の袋の中にハンドアウトとして「入学者選抜と特色入試」という資料が入っておりますので、それに沿ってお話ししていきたいと思います。



1として特色入試の起源とありますが、これにはまず、国立大学の入学者選抜と国立大学協会との関係を知ることが重要です。そこで、スライドは毎年文部科学省が出す入学者選抜実施要項ですが、これは昨年のもので、国立大学の入学者選抜は第11というところに書いてありまして、この下にも少し続いているのですが、今年になって変わったのは「第11国立大学の入学者選抜」で、「国立大学の入学者選抜の日程等は国立大学協会が定める実施要項及び実施細目に基づき実施される」とあります。この点について変更があったと誰も騒いでいませんから、昔から国立大学の入学者選抜は国立大学協会の決まりで決まっているということになります。

これを前提として、次のスライドをご覧ください。国立大学協会と京都大学の間のやりとりを示すものです。この時に国立大学協会入学試験委員長は本学の総長であった尾池先生です。国立大学法人京都大学長殿と書いてありますけれども、尾池先生のことです。

そこで、次のスライドをごらんください。ここには、国立大学協会は平成18年度からの入学者選抜制度に関して次のように分離分割を維持する、原則学部で募集人員を分割して、分割比率は個別大学の裁量で弾力的に実施する、分割比率の少ないところに推薦入学、AO入試などを含めることについてはこれを妨げないといっています。この時点で推薦入学という言葉が出ておりますが、後に推薦入試という言葉を使うようになります。

そこで、京都大学については、平成17年に、大学として後期日程を募集しないと発表することになりました。それは困ったことになるわけですから、国立大学協会の入学試験委員長から問い合わせがありました。

そこで、国立大学協会に対して、総長である尾池先生はどのようにお答えになったのかというと、スライドにあるように、「各学部で平成19年度入学入試において推薦入学あるいはAO入試等の多様性選抜の実施の可能性について検討するように依頼しているところでもあります」というのです。この時から、このような依頼が続いていたことになります。これは、国立大学協会に対して京都大学はこういうふうになりますと対外約束していたということなのです。

その後、国立大学協会の会長から法人の長に宛てて問い合わせが届きます。スライドは、その当時の学長である尾池先生が国立大学協会の会長に対して回答された文書です。ここは、「他学部及び医学部医学科の平成19年度後期日程試験については慎重な検討の結果、実施しないことになっております」とあります。この段階では医学部の保健学科が存在したのですが、そのときは設置したばかりで、設置後4年間は最初の設置段階のとおりするべきだということで決着して、保健学

科だけは後期日程で募集しました。4年間はちゃんと後期日程をやって、5年目からやめたわけです。また、「引き続き、AO入試等の多様性選抜を行う方向を含め、鋭意検討いたしていることを申し添えます」とあり、京都大学は、AO入試あるいは推薦入試を検討すると約束をし続けてきていたわけです。後期日程で募集をやめたからこうなったわけで、今の特色入試に至る道の起源は後期日程の募集をやめたところにあります。これが特色入試の起源というところですよ。

それで、先ほど森脇先生がおっしゃいましたように、ある学部でAOに適したような入学者選抜の方法を採用したいという声が上がって、その後、北野先生のスライドにありましたように、全学でどのようにするか検討するということになりました。1つの学部がやれば、残りの学部はそれぞれがAO入試、推薦入試を実施できない理由というのを個別に明らかにしなければいけないという事態に陥ります。これはなかなか難しいことです。ほかができると言っているし、他大学でも成功例があります。これをどう解消するのかということを知恵を絞っていったということになったわけです。ただし、ある学部がAO入試型のことをやってみようとおっしゃったのは、対外約束をしたからその約束手形を落とすためにやるというのではなくて、取り巻く情勢が変化の中で、AO入試のようなものをやってみることが、教えてみたい入学者を確保するのにふさわしい方法だという考えに基づいていました。これが特色入試の誕生ということですよ。

5で特色入試の課題ということに触れるとして、次に入学者選抜の環境に移りたいと思います。スライドは18歳人口の変化を示す図です。この図では、18歳人口の人数は、学校基本調査の3年前の中学校の3年生及び中等教育学校前期課程の3年生の数を足して3年後の18歳人口とすることになっています。これは全国の様子なので、最初のピークと2度目のピークの関係は5分の4ぐらいのように見えます。これでは京都大学が置かれている環境がわかりにくいと思いますので、学校基本調査の数字をもとに都道府県別に算出してみました。

最初のピークで一番数が多いのは東京都です。2番目は、最初のころは北海道、次が大阪府だったのですが、北海道がたどった道筋はどうなっているかというのは別のスライドでもう少しはつきりすると思います。2番目のピークが1番目のピークの5分の4になっていることが示されますが、大阪府は2番目のピークのほうが大きい。これは人口の社会移動、地域的な移動によって生じたことです。北海道というのはずっと減り続けてきて、現在は9位という状況になっています。ここで気がつくことは、京都大学を取り巻く地域の府県は9位までの中に2つしかないということで、余り恵まれた状況にないということがわかります。

次のスライドに、10から16位を示します。ここでやっと京都府が出てきますが、京都府は順位ではちょうど真ん中ぐらいですが、広島県と新潟県、岐阜県には含まれています。京都府が京都大学を支える人口基盤には多分ならないだろうと考えられます。合計特殊出生率で見ると、京都府は約1.2です。広島県が約1.5、岐阜県が約1.4ですから、京都府は岐阜県のところに近づいていきます。地域的に両者の関係を比べて見ると、京都府は山城と、丹波、丹後とがあって、岐阜の東海の都市圏とそれ以外の美濃、飛騨との間の関係と似た状況になっていると考えられます。近畿圏を見ていきますと、先細りであるということがわかると思います。さらに中部圏というのは愛知県が見込みがあるということになります。さらに日本海に面したところを見ますと、急激に減少しています。瀬戸内海に面して福岡まで見ていきますと、スライドのようになります。四国というのを見ますと2度目の山が極めて低いわけですから、これからの減少はもっと激しいことが想像されます。

スライドは、日本銀行信用機構局の金融システムレポート別冊のPDFから持ってきたものですが、地域別人口推移と見通しが2000年を基準として示されています。東京の都市圏は2000年を100としたら、2015年前後から減少し始めています。地方圏は2000年からずっと減りっぱなしです。

このレポートは「人口減少に立ち向かう地域金融」という題がついていますけれども、多分高等教育に関しては「人口減少に立ち向かう各地の大学」というレポートがつくられているのだらうと思います。人口減少にどう立ち向かうのかというのが高等教育の課題だということになります。

国立大学の募集人員の増加ということですが、これは国立9大学の募集人員の推移を表にしたものです。東京大学は、平成16年に募集人員が約200名減っています。これは東京大学に専門職大学院として法科大学院が設置されたときに法学部の学生の収容人数が3割減じられたことを反映しているものです。ほかの大学は全部ふえていっているのですが、これは日本の高等教育に対する需要の増加、進学率の増加から見て、減らないのは当然であって、これを減らすというのは国立の公教育としての高等教育を担う機関としてあるまじきことだろうと思われまますので、減らすわけにはいきません。さらに東京大学の例を見ますと、文科1類で募集人員が約200名減ったわけですが、文科1類の入学者については、聞くところでは縮小コピーになっただけということです。受験産業のデータを見ると文科1類の入学難易度は下がり続けていて、去年度は第1段階選抜が実施されませんでした。ボーダーラインが下がり続けていて、3割減らしても効き目はほとんどないということになります。そこで、入学者数を減らすよりは現状を維持して、京大流の教え方というものを効き目のあるものにしていくほうがいいのではないかとということが予想されます。

次に、受験者の動向をみることにします。大学入試センター試験で文系・理系というのがどうなっているのかというので、地歴公民2科目、理科2科目を選択する受験者で、前者を文系、後者を理系と扱って状況を見てみますと、理系は文系の大体1.5倍だと思われまます。そして、「センターリサーチ」という自己採点システムで見ますと理系は文系の1.5から1.6倍程度になっています。別の自己採点システムである「データネット」で見ますと、理系は文系の1.7倍ぐらいになります。まとめてみますと、センター試験の場合には1.5、センターリサーチで1.6、データネットで1.7と、理系選択者がずっと多いということが示されます。

さらに、受験産業と言われるところから受験のデータを提供してもらいました。センター試験で900点満点として90%、85%の点数のところを見てみますと、文理の比について、2014年では、90%の人たちの比は理系のほうが4倍、85%では大体3倍から4倍の間ぐらいになっています。2015年は文理の比がひらいたように見えますが、これはセンター試験の数学②という科目が難しかったので、この値になったというのが予備校でデータ分析している人たちの見解です。

それでは、センター試験の高得点者はどこに行くのかを調べてみました。京大対東大という分類に加え、医学科というカテゴリーが、2年前からサンデー毎日の増刊『高校の実力』でも使われています。河合塾が開催する京大入試研究会という会合で配布された資料を2014年度について、京大、東大、医学科の対比がありましたので、2015年度についても同じものをつくってみました。京大は東大よりも合格者は少しだけ低いほうに振れていますが、それよりも注目すべきは医学科です。午前中、岩井先生が医学科を究極の職業訓練学校だと言及されましたが、その職業訓練の先に見える職業が極めて魅力的だと感じる人が多く、そのことが高得点者の数に現れています。同じことが15年についても見られます。今度は、駿台予備校が大学が開示した入学試験の点数データを集めたものを見ますと、東大で理科1類、2類、京大で医学部を除いてまとめてみますと、河合塾のデータと同じように、東大と京大の間には、理系ではセンター試験の点数で900点満点で30点ぐらい差が見られます。文系では差は40点ぐらいになります。この差に意味があるのかというと、ほとんど意味がありません。大学入試センター試験は科目によって1マークの配点が異なりますが、国語では最大8点で、数学は1点というのがあります。平均すれば、1マークの配点は3～4点です。30点から40点は、マークの結果が10個ほど正しくヒットしなかったという差しかないわけです。こういうようなことで、区別をされているというのが本当にいいのかということになります。

5に入りますと、高大接続システム改革会議の『中間まとめ』が本日の配布資料の中にありますが、43 ページに結果の表示のあり方等というのが書いてあります。これは結果の表示を変えたらどうかという提案があって、段階別で表示したらいいという内容です。段階別で10から12段階にしてみらうのがいいように思います。日本中の大学にとってもいいかもしれません。先ほどの30点、40点の差は見えなくなります。そして、各大学は個別の試験をきちんとやらざるを得なくなります。2つの試験をやって足せばいいということにはならないと考えられますので、そういうことが入学者選抜の改革を促すことになるのではないかと思います。

最後に、文部科学省が調べている入学者選抜の概要を見ますと、入学者数全体の約9万6,000人のうちで、AO入試と推薦入試を合わせた募集人員が約15%、後期日程の募集人員が16%。後期日程の学生募集はAO入試か推薦入試でかえることができるというので、当然の数値かもしれません。先ほど紹介があった東京大学推薦入試では、後期日程の募集人員分がそのまま推薦入試に回されましたが、ほかの大学も多分そうすることになるでしょう。大阪大学が世界適塾入試を平成29年度から始めますが、ここでは入学定員の10%をこの入試で募集するのが目標とされ、3年間で10%にするということですが、文系学部は最初から10%になっています。こうなると何が必要かということ、大学にとっては、高校生の様子を偵察し、これはと思う人に勧誘することを抜きにして、うまくナビゲートするということとはできないことになります。このための方策を考えるということが今後必要ではないかと思います。

以上でございます。どうもご静聴ありがとうございました。（拍手）

**司会** ありがとうございました。過去の資料から非常にたくさんのデータで、興味深い数値を見せていただいたと思います。

では、午後の部、前半最後になります。「平成28年度からの教養・共通教育」に関しまして、国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授でいらっしゃいます喜多一先生、お願いいたします。



## 入学者選抜と特色入試

木南敦\*

### 1. 特色入試の起源

- ・ 国立大学の入学者選抜と国立大学協会
- ・ 前期日程・後期日程とAO入試・推薦入試
- ・ 京都大学の国立大学協会に対する回答

### 2. 特色入試の誕生

### 3. 入学者選抜の環境

- ・ 人口減少 全体の動向
- ・ 人口減少 地域ごとの特徴
- ・ 国立大学の募集人員の増加

### 4. 受験者の動向

- ・ 大学入試センター試験 「文系」と「理系」受験者
- ・ 大学入試センター試験高得点者の特徴

### 5. 入学者選抜と特色入試の展望

- ・ 入学者選抜一般  
平成32年度の大学入試センター試験に代わるテストにおける「結果の表示」の変更
- ・ 特色入試  
東京大学推薦入試（平成28年度から）  
大阪大学世界適塾入試（AO入試と推薦入試）（平成29年度から）

---

\*京都大学教授（大学院法学研究科・法学部）・入学者選抜方法研究委員会委員長

<p>平成27年度大学入学者選抜実施要項</p> <p>(平成26年5月28日付付 26文科高第207号文部科学省高等教育局長通知)</p> <p>第11 国立大学の入学者選抜</p> <p>国立大学の入学者選抜の日程等は以下のとおりである。</p> <p>1 個別学力検査等の日程</p> <p>(1) 試験受付は、平成27年1月26日から2月4日までとする。</p> <p>(2) 個別学力検査等の日程については、前期日程を平成27年2月25日から、後期日程を同年3月12日以降に実施する。</p> <p>(3) 合格者の発表は、前期日程は平成27年3月6日から3月16日まで、後期日程は同年3月20日から3月24日まで(できるだけ22日まで)とする。</p> <p>(4) 入学手続は、前期日程は平成27年3月15日に、後期日程は同年3月27日に締め切る。</p> <p>(5) 各大学は、合格者又は入学手続終了者が入学定員に満たない場合には、いずれの国立大学にも入学手続をとっていない者を対象として、平成27年3月28日以降第2次募集又は追加合格による欠員補充を行うことができる。</p> <p>2 各大学に対する出願方法</p> <p>入学志願者は、各大学が定める手続・方法等により、上記1の(1)による出願に当たっては、前期日程の大学・学部等から1つ、後期日程の大学・学部等から1つの合計2つの大学・学部等に出席することができる。</p>	1
---	---

<p>平成28年度大学入学者選抜実施要項</p> <p>(平成27年5月27日付付 27文科高第261号文部科学省高等教育局長通知)</p> <p>第11 国立大学の入学者選抜</p> <p>国立大学の入学者選抜の日程等は、国立大学協会の定める実施要項及び実施計画に基づき実施される。</p>	2
--	---

<p>国立大学入学者選抜 要 項</p> <p>平成 27 年度大学入学者選抜実施要項</p> <p>平成 27 年 5 月 28 日付付 26 文科高第 207 号文部科学省高等教育局長通知</p> <p>第 11 国立大学の入学者選抜</p> <p>国立大学の入学者選抜の日程等は以下のとおりである。</p> <p>1 個別学力検査等の日程</p> <p>(1) 試験受付は、平成27年1月26日から2月4日までとする。</p> <p>(2) 個別学力検査等の日程については、前期日程を平成27年2月25日から、後期日程を同年3月12日以降に実施する。</p> <p>(3) 合格者の発表は、前期日程は平成27年3月6日から3月16日まで、後期日程は同年3月20日から3月24日まで(できるだけ22日まで)とする。</p> <p>(4) 入学手続は、前期日程は平成27年3月15日に、後期日程は同年3月27日に締め切る。</p> <p>(5) 各大学は、合格者又は入学手続終了者が入学定員に満たない場合には、いずれの国立大学にも入学手続をとっていない者を対象として、平成27年3月28日以降第2次募集又は追加合格による欠員補充を行うことができる。</p> <p>2 各大学に対する出願方法</p> <p>入学志願者は、各大学が定める手続・方法等により、上記1の(1)による出願に当たっては、前期日程の大学・学部等から1つ、後期日程の大学・学部等から1つの合計2つの大学・学部等に出席することができる。</p>	3
--	---

<p>国立大学入学者選抜 要 項</p> <p>平成 28 年度大学入学者選抜実施要項</p> <p>平成 27 年 5 月 27 日付付 27 文科高第 261 号文部科学省高等教育局長通知</p> <p>第 11 国立大学の入学者選抜</p> <p>国立大学の入学者選抜の日程等は、国立大学協会の定める実施要項及び実施計画に基づき実施される。</p>	4
---	---

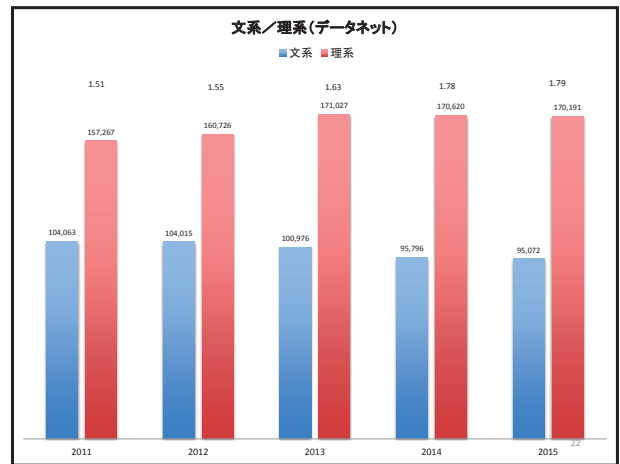
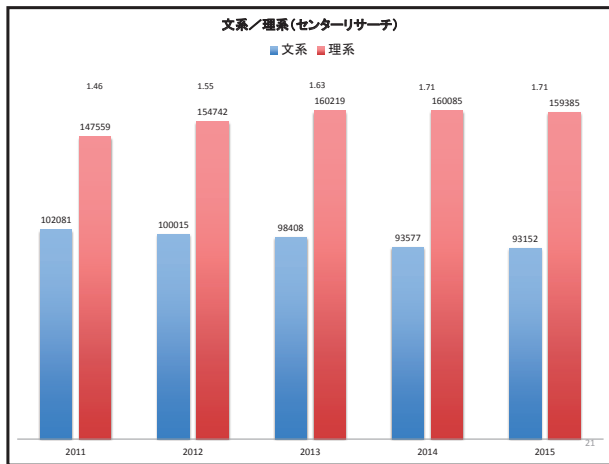
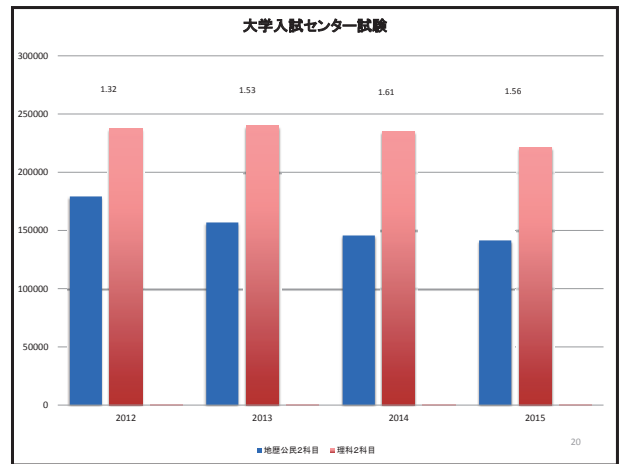
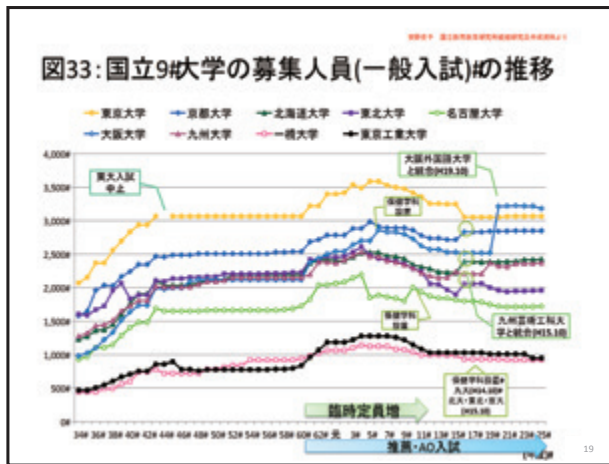
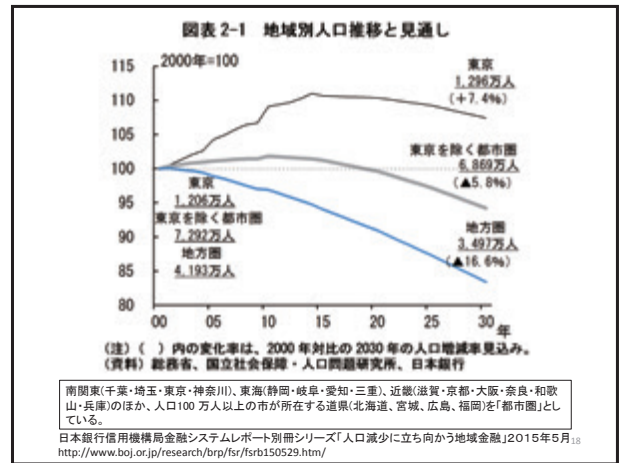
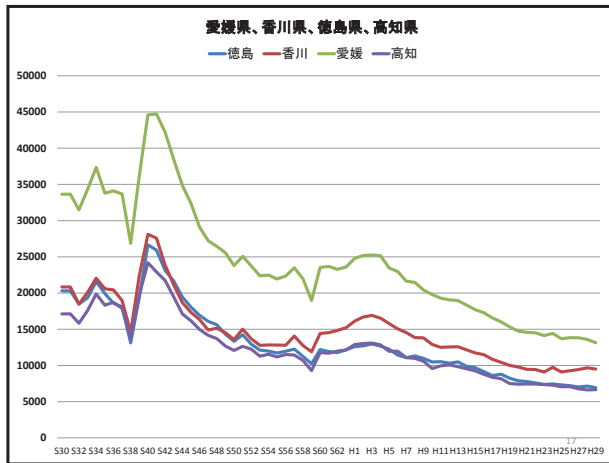
<p>平成16年6月の国大協総会において、平成19年度以降の国立大学入試の基本方針を会の総会までに取り纏めるとの方針ができました。京都大学の各学部ではこれに合わせる形で、入試の現状分析、後期入試の問題点、前期入試の充実等については2年にわたる検討の結果、前期一本化の方針を打ち出した次第です。しかしながら京都大学のこのような方針が、昨年11月の国大協総会で承認された「平成19年度以降の国立大学入試の基本方針」における「平成19年度入試は18年度的方式を踏襲する」から逸脱するものであるとの入試委員会の指摘は京都大学として真摯に受け止めるものであります。京都大学はこれまで推薦入学、あるいはAO入試は実施していませんが、現在各学部にて19年度入試において推薦入学あるいはAO入試等の多様な選抜の実施の可能性について検討するよう依頼しているところであります。</p>	5
--	---

<p>国立大学入学者選抜 要 項</p> <p>平成 19 年度大学入学者選抜について (要約)</p> <p>平成19年度以降の国立大学入学者選抜実施要項については、既に昨年11月の国大協総会において、平成19年度以降の国立大学入学者選抜の基本方針が決定し、京都大学はこれに合わせる形で、入試の現状分析、後期入試の問題点、前期入試の充実等については2年にわたる検討の結果、前期一本化の方針を打ち出した次第です。しかしながら京都大学のこのような方針が、昨年11月の国大協総会で承認された「平成19年度以降の国立大学入試の基本方針」における「平成19年度入試は18年度的方式を踏襲する」から逸脱するものであるとの入試委員会の指摘は京都大学として真摯に受け止めるものであります。京都大学はこれまで推薦入学、あるいはAO入試は実施していませんが、現在各学部にて19年度入試において推薦入学あるいはAO入試等の多様な選抜の実施の可能性について検討するよう依頼しているところであります。</p>	6
--	---

<p>国立大学入学者選抜 要 項</p> <p>平成 19 年度大学入学者選抜について (要約)</p> <p>平成19年度以降の国立大学入学者選抜実施要項については、既に昨年11月の国大協総会において、平成19年度以降の国立大学入学者選抜の基本方針が決定し、京都大学はこれに合わせる形で、入試の現状分析、後期入試の問題点、前期入試の充実等については2年にわたる検討の結果、前期一本化の方針を打ち出した次第です。しかしながら京都大学のこのような方針が、昨年11月の国大協総会で承認された「平成19年度以降の国立大学入試の基本方針」における「平成19年度入試は18年度的方式を踏襲する」から逸脱するものであるとの入試委員会の指摘は京都大学として真摯に受け止めるものであります。京都大学はこれまで推薦入学、あるいはAO入試は実施していませんが、現在各学部にて19年度入試において推薦入学あるいはAO入試等の多様な選抜の実施の可能性について検討するよう依頼しているところであります。</p>	7
--	---

<p>国立大学入学者選抜 要 項</p> <p>平成 19 年度大学入学者選抜について (要約)</p> <p>平成19年度以降の国立大学入学者選抜実施要項については、既に昨年11月の国大協総会において、平成19年度以降の国立大学入学者選抜の基本方針が決定し、京都大学はこれに合わせる形で、入試の現状分析、後期入試の問題点、前期入試の充実等については2年にわたる検討の結果、前期一本化の方針を打ち出した次第です。しかしながら京都大学のこのような方針が、昨年11月の国大協総会で承認された「平成19年度以降の国立大学入試の基本方針」における「平成19年度入試は18年度的方式を踏襲する」から逸脱するものであるとの入試委員会の指摘は京都大学として真摯に受け止めるものであります。京都大学はこれまで推薦入学、あるいはAO入試は実施していませんが、現在各学部にて19年度入試において推薦入学あるいはAO入試等の多様な選抜の実施の可能性について検討するよう依頼しているところであります。</p>	8
--	---





大学入試センター試験受験者比 地理歴史・公民2科目/理科2科目

	2011	2012	2013	2014	2015
センター試験		1.32	1.53	1.61	1.56
センターリサーチ	1.46	1.55	1.63	1.71	1.71
データネット	1.51	1.55	1.63	1.78	1.79

地理歴史・公民2科目は、国語、地理歴史・公民2科目、数学①、数学②、理科(1科目、2015年からは基礎の付いた科目2科目または基礎の付いていない科目1科目)、外国語  
理科2科目は、国語、地理歴史・公民(1科目)、数学①、数学②、理科2科目、外国語

センター試験90%以上、85%以上得点者文理比率  
(いずれも900点満点で、810点と765点以上)  
(自己採点結果による値)

90パーセント	2011	2012	2013	2014	2015
センターリサーチ	1.977	3.099	2.623	3.913	5.049
データネット	2.215	3.462	3.022	4.342	5.734

85パーセント	2011	2012	2013	2014	2015
センターリサーチ	1.85	2.63	2.58	2.90	4.08
データネット	2.12	2.84	2.96	4.20	4.50

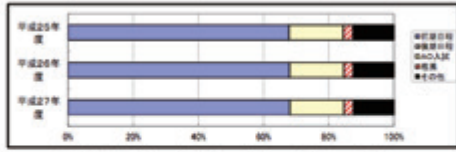
「センターリサーチ」の結果は河合塾提供。  
駿台予備学校・ベネッセコーポレーション実施のセンター試験自己採点集計「データネット」は、駿台予備学校提供。



国立大学の募集人員のうち、推薦とAO入試が約15%、  
後期日程は約16%

### 1. 募集人員の推移

◎国 立



	前期日程	後期日程	AO入試	推薦	その他	合 計
25年度	84,949	15,941	2,810	12,035	575	96,310
26年度	85,037	15,932	2,769	11,959	573	96,270
27年度	85,101	15,798	2,822	11,870	545	96,136

文部科学省「平成27年度国立大学入学者選抜の概要」より

## 10. 報告③：「平成28年度からの教養・共通教育」

国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授 喜多 一



国際高等教育院の喜多でございます。

お手元に1枚もののビラを入れさせていただきました。スライドのハンドアウトではなくて、こちらのほうが色がきれい입니다。今日の私の仕事は、平成28年度から1回生に適用される教養・共通教育の枠組みがかなり変わります。そのことをご理解いただくこと、特に学部の先生方は、今、履修の要件の見直しをお願いしている最中ですので、そのことをかいつまんでご報告させていただくこととさせていただきます。

まず、国際高等教育院が平成25年度に設置されたのに、何で平成28年度からカリキュラムを変えるのだということをご理解いただきたいと思ひます。設置されたのが平成25年度なのですが、それまで教養・共通教育の企画を担当しておりました高等教育研究開発推進機構での検討に基づき、平成25年度から枠組みを見直ししました。一部改革を先倒してやっていただいたと理解しております。それから3年かけて教育院で企画評価専門委員会にワーキンググループを設置して、こういうカリキュラムにしましょうということを決めました。それから国立大学強化改革評価推進補助金事業として外国人の先生方をお招きして、英語で授業をしていただくという科目提供を昨年度から始めております。また、外国語教育を強化するために附属の国際学術言語教育センターを設置し、準備段階のものが多くございますが、今、いろいろ活動をやっていただいております。

このように、平成25年度にカリキュラムを一回見直しておりますので、カリキュラムが3つ並行して走るといのはなかなか学生にとってもわかりにくく、事務処理上も大変だということで、平成28年度にさまざまな改革を集中させようということになり、平成28年度から科目等の見直しを行わせていただくことにいたしました。

関わっておられる先生方も、担当する先生以外は京大の教養・共通教育はどのような構成なのかということがおわかりになりにくいと思ひます。例えば提供している科目数がトータルで1,166種類、並行開講されているものがありますので、実際に行われているクラスの数約3,000という非常に大規模な活動でございます。このうち現在既に、これは平成26年度の実績ですが、134科目は英語で授業を提供しております。ご担当いただいている先生方のうち、常勤が1,274人ですので、非常勤にかなり多く頼らざるを得ません。英語、数学を中心に365人の非常勤の先生方に授業をお願いしております。受ける学生のほうは、1学年大体3,000人ですので、1回生、2回生を合わせると6,000人ぐらいなのですが、実際に登録している学生をみると、3回生、4回生になっても全学共通科目が面白く思っている学生と、取らざるを得ない事情にある学生を含めて8,000人を超える学生が登録し、総登録科目数は6万7千科目という非常に規模の大きな活動でございます。

北野先生のスライドにも入れていただきましたが、お手元のビラにありますこれだけの項目のことを順にお話をさせていただきたいと思ひます。

まず平成25年度に科目群の編成を見直しております。それまでA群、B群…という言い方をしていたのを、現在は人文・社会科学系科目群、自然・応用科学系科目群、外国語科目群、それからこれに含まれないものを現代社会適応科目群、拡大科目群に変更しました。ポケット・ゼミというのはこの拡大科目群の中に含めて考えております。平成28年度の科目群の再編成は、人文・社会科学系、自然・応用科学系はそれほど大きな変更をしないのですが、それ以外のところがなかなか履修

要件が書きにくいということもありまして、もう少し明確になります。一部もとに戻すようなところもありますが、こういう形の科目群に編成します。人文・社会科学科目群、自然科学科目群、外国語科目群、それから現代社会適応科目群から情報を独立させます。それから今、2つに分かれている保健系の科目とスポーツの実習の科目を、僕なんかは昔、保健体育というのを履修したのですが、もう一回一体化させます。次に、キャリア形成科目群、それから後ほど紹介します統合科学科目群、ポケット・ゼミというのは京大の教養・共通教育の一つの成功事例であります、それを強化して少人数教育科目群という形で設定します。また、これとクロスする形で、E科目という新しい考え方を導入させていただきます。

そして、時間割編成というのが大変でして、全学共通科目の履修の手引きを見ていただきますと、1クラス40人とかそれぐらいの規模で、クラスごとに全部時間が違います。理解不可能です。我々が理解不可能なので、多分学生は自分のクラスがこうだということしかわからないと思います。しかし平成28年度からはそれを幾つかの大きなブロックに割りまして、そのブロックの中、例えば大体学部が1つのブロックとか2つのブロック、工学は大きいので幾つかのブロックになりますが、そのブロックの中では例えばクラス指定している科目はこれですよとか、人文社会系の科目はこのスロットにたくさん入りますよといった形で、時間割をブロックの中で共通化させてしまいます。こうしますと、今は入学して大学に来て、あなたは何組ですと言われるまでは自分の時間割は組めないけれども、合格したらもう時間割を大体は組めるようになります。もう一つは、朝、起きるのが苦手な学生さんのことを少し心配しているのですが、いわゆる必修性の高い語学であるとか自然科学系の科目を1限から4限に集めて、5限を空けてしまいます。この空けた5限は、自由選択科目用にできるところが多いので、一つは人文社会科学系の科目を集中して開講する。もう一つは、前期には少人数教育のILAS（アイラス）セミナーをここで開講する。それによって、現在起きている、どうしても取りたいと思う科目があっても、クラス指定の科目や専門の科目とぶつかって取れないということもなくしてしまおうという意図があります。後期も同じでございます。人文社会科学系の科目と、それから後期に開講する統合科学科目を5限に集中させて、自由に取っていただくということで、わかりやすい時間割をデザインしました。学部の皆さん方にも学部科目の調整に随分ご協力をいただきました。

次が、北野先生のスライドでも出てきましたけれども、英語の教育と英語での教育。一つは英語での教育です。今、補助金をいただいて各学部で採用頂いている外国人の先生に英語で授業をしていただいています。ただ、なかなかそのままでは英語で授業を取ろうという学生さんの数というのはそれほど多いわけではございません。現在、履修者数の平均は1クラス15人ぐらいですが、今後もう少し科目を増やしてまいります。2回生向けに英語で行われる科目と英語教育を連携させて、先ほどのチャートにありましたE科目という形で導入していきます。現在、英語IIという2回生向けの英語科目をE1とE3、どちらかと言うと人文社会科学系の中身の科目をE1、それから英語のスキルアップの科目をE3に分けて、英語で行われている科目はE2に分類します。それにより、より実践的に英語で学ぶ機会を誘導していこうということです。それから、E2には英語で授業を行っているいろんな種類の科目が入りますので、留学生にとっては教養・共通教育を英語で履修できるという環境をつくることにもなります。

これを後ろ支えするという形で、英語教育の再編を現在、行っております。まず、英語という科目は1回生だけにし、2回生はE科目という形で展開をします。1回生についてはリーディング、ライティング、スピーキング、リスニングの4技能の強化ということを明確に打ち出して、今、実際の科目をどうするか、学部の先生方と授業を担当する先生方でいろいろご相談、調整もさせていただいております。それから、TOEFLを1回生に受けていただいております。学内実施できるT

O E F L I T Pのテストを入学した当初と1回生の後期の後ろのほうで2回実施するという形で、英語教育に活かしていきます。自分の立ち位置をより客観的にわかっていただくということです。それから附属国際学術言語教育センター、i-ARRCという組織を設けておりますが、その目的は、課外の学習を支援していくことにあります。これは1回生、2回生だけではなくて、3、4回生、上級生になってもいろんな相談をしたりする機会を持たせています。2回生は先ほどの人文社会系科学的な内容のE1科目、スキルアップのE3科目と、それから英語で行われる教養科目のE2科目とをうまくそれぞれの学習者に応じて科目選択をしていただくという形で、より実践的な英語につなげていくことを考えております。

続きまして、少人数教育です。1年生に対して研究に触れてもらいながら大学になじんでもらうことを目的としたポケット・ゼミのことは、ご存じの方も多いかと思います。それにもう一つ、人間・環境学研究科の先生方を中心に基礎ゼミナールという科目の前期分だけを、これもやはり少人数の教育ですので一体化させまして、ILASセミナーという名前で実施させていただきます。この科目についてはぜひ科目のご提供をお願いできたらと思っています。まだまだ全学生に足る数で開講できていません。先ほどのお話でも1回生をつまづかせないことが大事だと言われておりましたので、こういうところで少人数で教育していくということにぜひご協力をお願いしたいと思えます。それから、前期の5限を主な開講時限として、学生の皆さんに自分の好みにより合った科目を選びやすいようにということに配慮させていただきます。

もう一つが、これは全く新しく始める科目でございますが、統合科学科目です。大学に入ると、専門と教養教育との関係が常に問われるわけです。ここでは現代社会のさまざまな課題そのものを取り上げて、しかも文系の先生、理系の先生、両方の先生にコミットしていただいて、両面から接近して主体的に、総合的に考えるということを学生に学んでもらう機会を持ってもらう。それによって2回生、3回生と続いていく専門に対してある種、相対的にそれを見る目を養ってもらおうと思っております。また、後期の5限に配置して、科目選択を容易にします。現在、取り上げて準備していただいているテーマは次の5つでございます。生命と社会が2種類、それから地球環境と人類のバランス、閉じた地球で生きる—エネルギーの問題、それから災害の問題ということで、こういう難しい問題、答えがないかもしれない問題に文系だどというアプローチがあるのか、理系だどというアプローチがあるのかを考え、対話的に授業をしていく。クラスサイズを小さくしていくのですが、対話的に授業をしていきたいと思いますということで準備をさせていただいております。

あとは、先ほどからも課題になっています初年次教育です。テクニカルな話が多くて恐縮なのですが、一つは情報環境機構と協力しまして、学生のIDを、入学しないと使えないのですけれども、入学する前に発行します。合格して手続をしたら、そのIDを利用して大学のいろんなITで学んでもらったり、ウェブを使って情報をe-learningでいろいろ知ってもらったり、あるいはいろんな情報を事前に登録してもらおうというようなことを準備をしております。これは結構大変で大事なことでして、1回生は入学して1週間ぐらいで履修登録を全部しないといけないので、なるべく余裕のある時期にいろんなことをやってもらいます。今、オンラインでコンプライアンスに関して4項目を学んでもらっていますが、これもガイダンスだけではなかなか時間も取れず、学生もガイダンス漬けになっているという状況を改善するために作成しました。ことしは学生の履修指導に失敗しましてe-learningの履修率が高くないのですが、こういうものを事前に学んでもらえるようにして、できれば保護者の方と一緒に学んでもらい、学生が抱えるであろう問題を一緒に理解してもらおうというふうに考えております。また、不合格になって再履修するということは結構、学生をつまづきの要因になります。なるべく各学期ごとに確実に学修できるようにするためには、どうやって支援していこうかということを考えております。



最後に、学習環境の充実を図っております。今、吉田南の構内は工事中でございますし、皆さんに少しわかりにくい名前ですが、国際人材総合教育棟という、i-ARRCの先生方に教材作成のチームラーニングや、会話発音の演習、国際セッション、あるいはテストテイキングという多様な学びを支える学習空間をつくるよう準備しております。それから、来年の1回生にはできるだけコンピュータを持ってほしいとお願いしていこうと思いますが、さまざまな科目の特に自学自習をICTでも支えようということを考えています。そのために例えば無線LANなども強化をしている最中でございます。

来年度に入ってくる新入生は違う制度が適用されますので、現1回生とは違うカリキュラムで学ぶのだということをまずはご理解いただきたいと思います。また、制度が変わっていることをわからずに上級生が下級生にいろいろ伝えることも良くないことですので、その辺のご理解をお願いします。それから、例えば今、学部には卒業要件の見直しをお願いしたり、英語の授業の教材についてご相談をしたりしております。それからILASセミナーの科目提供をぜひお願いしたいので、ご協力もお願いできればと思います。

以上でございます。（拍手）

**司会** ありがとうございます。非常に魅力的で、これからの学生がうらやましいなと思いました。

これで午後の部の前半を終了いたしまして、ここで15時20分まで休憩をさせていただきます。

先ほどもお伝えいたしましたが、休憩の後、話題提供いただきました内容をもとにディスカッションを行います。封筒の中にこうした質問票がございます。ぜひこれまでのご報告、ご講演に対しましてご質問等をいただければと思います。ご質問に関して、今、出口のところに箱を用意していただいておりますので、できましたら15時10分までにこちらにご提出ください。

（休 憩）

**司会** それでは、本日最後のプログラムになります。パネルディスカッション「京大流・未来を拓く人の育て方」、コーディネーターは飯吉透教育担当理事補／高等教育研究開発推進センター長にお願いしております。

飯吉先生、お願いします。

# 平成28年度 **教養・共通教育**の変更点

## 科目群編成を見直します

人文・社会科学系科目群  
自然・応用科学系科目群  
外国語科目群  
現代社会適応科目群  
拡大科目群  
(ポケット・ゼミ)

人文・社会科学科目群  
自然科学科目群  
外国語科目群  
情報学科目群  
健康・スポーツ科目群  
キャリア形成科目群  
統合科学科目群  
少人数教育科目群

**E科目**

## 履修しやすい時間割を編成します

- 1回生全体を履修内容に応じてブロックに編成します。
- クラス指定科目は1～4限に集め、ブロック内で曜時限を統一して配置します。
- 前期5限にILASセミナー、後期5限に統合科学科目を配置します。
- 人文・社会科学科目を5限やブロック共通のクラス指定科目以外の曜時限に配置します。

## 英語での教育を強化します

- 英語での授業提供を拡充します。
- 2回生向けに「英語で行われる科目」と英語教育を連携させたE科目を導入します。
- 留学生のために英語での教養・共通教育の履修を充実させます。

## 英語教育を再編します

- 1回生向けの英語科目の内容を強化し4技能の向上に努めます。
- TOEFL ITPを実施し、英語教育に活かします。
- 附属国際学術言語教育センター (i-ARRC) による課外学習支援を充実させます。

## 少人数教育を拡充します

- ポケット・ゼミと基礎ゼミナール(前期)を統合してILASセミナーとして実施します。
- 前期の5限を主な開講時限として選択を容易にします。

## 統合科学科目を開始します

- 現代社会のさまざまな課題に文系、理系両面から接近し、主体的に考察する統合科学科目を開設します。
- 後期5限に配置して科目選択を容易にします。

## 初年次教育を充実させています

- ECS-IDの早期発行により入学前準備を支援します。
- コンプライアンス教育などにオンライン学習を活用します。
- 各学期毎の確実な学修を支援します。

## 学習環境を充実させています

- さまざまな科目でICTを活用します。
- 無線LANのアクセスを強化します。
- 新営の国際人材総合教育棟を活用して語学学習環境を充実させます。



京都大学国際高等教育院

## 平成28年度からの 教養・共通教育

国際高等教育院  
喜多 一

## これまでの国際高等教育院の活動

- 高等教育研究開発推進機構で科目群を見直し、25年度から実施。
- 平成25年度に国際高等教育院、発足
  - 教養・共通教育の在り方について、企画評価専門委員会にWGを設け検討
  - 国立大学改革強化推進補助金事業として外国人教員による英語での全学共通科目の提供を開始(H26~)
  - 附属国際学術言語教育センターを設置(H26~)
- 科目群等の見直しなど大幅な改善を平成28年度から展開
  - 年次進行に配慮

## 教養・共通教育の科目数、登録数

科目群	科目数	登録数	科目数	登録数	科目数	登録数
前期	67	1,274	67	1,274	67	1,274
後期	67	1,274	67	1,274	67	1,274
計	134	2,548	134	2,548	134	2,548

うち英語で行われる講義(前期67科目、後期67科目、計134科目)

担当教員:常勤 1,274人、非常勤等 365

履修登録者 8,368人、登録科目数 67,341

平成26年度の実績

## 平成28年度からの教養・共通教育の 主な変更点

- 科目群編成の見直し
- 履修しやすい時間割編成
- 英語での教育の強化
- 英語教育の再編
- 少人数教育の拡充
- 統合科学科目の開始
- 初年次教育の充実
- 学習環境の充実

## 科目群編成の見直し

### H25~27年度の科目群

人文・社会科学系科目群  
自然・応用科学系科目群  
外国語科目群  
現代社会適応科目群  
拡大科目群  
(ポケット・ゼミ)

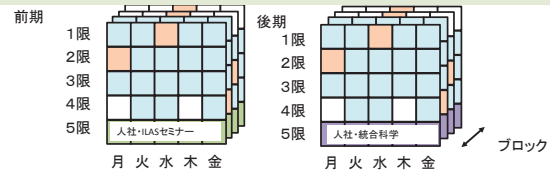
### H28年度からの科目群

人文・社会科学系科目群  
自然科学科目群  
外国語科目群  
情報科学科目群  
健康・スポーツ科目群  
キャリア形成科目群  
統合科学科目群  
少人数教育科目群

E科目

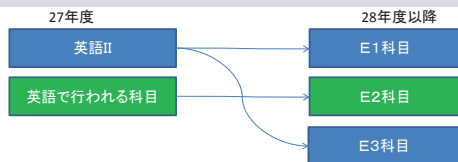
## 履修しやすい時間割編成

- 1回生全体を履修内容に応じてブロックに編成
- クラス指定科目は1~4限に、ブロック内で曜時限を統一して配置
- 前期5限にILASセミナー(少人数教育科目)、後期5限に統合科学科目を配置
- 人文・社会科学科目を5限やブロック共通のクラス指定科目以外の曜時限に配置



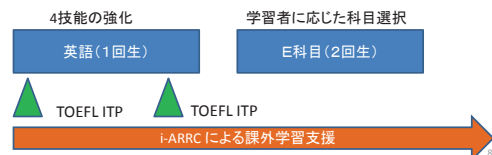
## 英語での教育の強化

- 英語での授業提供を拡充します。
- 2回生向けに「英語で行われる科目」と英語教育を連携させたE科目を導入します。
- 留学生のために英語での教養・共通教育の履修を充実させます。



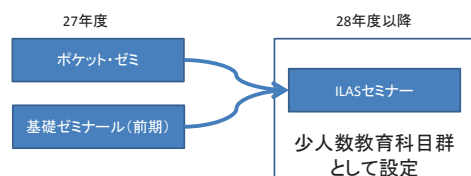
## 英語教育の再編

- 1回生向けの英語科目の内容を強化し4技能の向上に努めます。
- TOEFL ITPを実施し、英語教育に活かします。
- 附属国際学術言語教育センター(i-ARRC)による課外学習支援を充実させます。



## 少人数教育の拡充

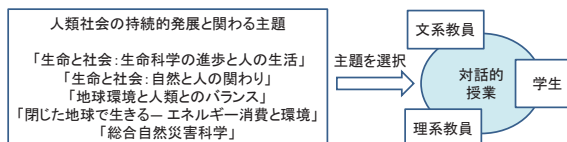
- ポケット・ゼミと基礎ゼミナール(前期)を統合して ILASセミナーとして実施します。
- 前期の5限を主な開講時限として選択を容易にします。



9

## 統合科学科目の開始

- 現代社会のさまざまな課題に文系、理系両面から接近し、主体的に考察する統合科学科目を開設します。
- 後期5限に配置して科目選択を容易にします。



10

## 初年次教育の充実

- ECS-ID の早期発行により入学前準備を支援します。
- コンプライアンス教育などにオンライン学習を活用します。
- 各学期毎の確実な学修を支援します。



コンプライアンス教育用 オンライン学習教材

11

## 学習環境の充実

- さまざまな科目で ICT を活用します。
- 無線LAN のアクセスを強化します。
- 新営の国際人材総合教育棟を活用して語学学習環境を充実させます。

国際人材総合教育棟  
教材作成、チームラーニング、  
会話・発話練習、ポスターセッション、  
テストテイキングなどを支援



12

皆様のご理解とご協力をお願いします。

13



## 11. パネルディスカッション：「京大流・未来を拓く人の育て方」

◇コーディネーター	教育担当理事補／高等教育研究開発推進センター長	飯吉	透
◇パネリスト		総長	山極 壽一
	教育・情報・評価担当理事	北野	正雄
	理学研究科長／教授	森脇	淳
	教育担当理事補／法学研究科教授	木南	敦
	国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授	喜多	一
	大阪府立大手前高等学校長	柴	浩司
	ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEO	仲	暁子



**飯吉** あらためまして、飯吉です。よろしくお願いいたします。

10時から始まって、かなり長丁場になっており、皆さんもお疲れだと思いますが、あと1時間半ほど、何とかラストスパートでテンションを上げていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。皆さんには、あとでクリッカーというものをお配りすることになっておりまして、参加型で進めてまいりますので、是非テンションを上げていただければと思います。

まず、本日のパネルのタイトルは、シンポジウムのタイトルと同じく「京大流・未来を拓く人の育て方」とさせていただきます。それでは、パネリストの皆さまを簡単にご紹介させていただきます。と言っても、おふたりパネルから参加していただく外部のお客さまがいらっしゃいますが、あとは京大の先生がたです。これまでご講演・ご報告いただいた方につきましては、簡単にお名前と肩書きだけ紹介させていただきます。

まず、皆様から向かって左、山極壽一総長です。（拍手）

続きまして、北野正雄教育・情報・評価担当理事です。（拍手）

続きまして、森脇淳理学研究科長／教授です。（拍手）

続きまして、木南敦教育担当理事補／法学研究科教授です。（拍手）

続きまして、喜多一国際高等教育院副教育院長／学術情報メディアセンター教授です。（拍手）

続きまして、大阪府立大手前高等学校長の柴浩司先生ですが、ここにスライドで簡単にご略歴をご紹介させていただいております。柴先生は、大阪府立高校の教員として30年ほど勤務されてお

まして、その間に大阪府教育委員会等でご活躍され、本年の4月から大阪府立大手前高等学校の第27代校長にご着任されました。

何かお一言いただけますでしょうか。

**柴** 大手前高校校長の柴でございます。

今、ご紹介がありましたが、あともう一つだけ肩書きがありまして、京都大学に子どもがお世話になっておりまして、保護者という立場もございます。どうぞよろしく願います。(拍手)

**飯吉** 続きまして、仲暁子さんをご紹介いたします。本学の経済学部卒業後、ゴールドマン・サックス証券に入社され、その後、知らない方はおられないと思いますが、Facebook Japan に初期メンバーとしてご参加された後、現在ウォンテッドリーのCEOをお務めになっておられます。このウォンテッドリーがどういう会社であるかは、また後でご講演の中でご説明があると思います。唯一の女性パネリストであり、また一番お若いということもありまして、是非このパネルを弾んだものにしていただけるのではないかと期待しております。

お一言いただけますでしょうか。

**仲** きょうは1人だけ毛色が違う形で、全然空気の読めない発言をしてしまうかもしれませんが、温かく見守っていただければと思います。きょうはよろしく願います。(拍手)

**飯吉** 空気を読めなくて、大いに結構でございます。ぜひ忌憚のないご意見をいただければと思います。

それでは、最後のおふたり、柴先生と仲さんには、この後10分ほどそれぞれご講演いただきます。その前に、5分ほど私の方からこのパネルの趣旨について簡単にご説明させていただきますので、申し訳ありませんが、パネリストの皆さんは一度ご降壇お願いいたします。

この間に、今、スタッフが皆さんにクリッカーという小さいリモコンのようなものをお配りしております。お1人1つだけお取りください。使い方等につきましては、後ほどお2人のご講演が終わってからご説明させていただきますので、今は皆さん興味深そうに見られておりますが、いじらないでどこかに置いておいていただければと思います。

今日のシンポジウムは、「京大流・未来を拓く人の育て方」というテーマでここまでやってまいりました。ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、この京大の特色入試のポスターで、総長が今風に言えばちょい悪オヤジというか、「かかって来い」と挑んでいる感じです。今日もそのようなお話しをされた先生がたがおられました。是非、意欲や志のある人たちを京大に呼び寄せたい、ということでもあります。こういう人たちを、もちろん特色入試だけではなく一般入試もあり、また卒業後は大学院に続いて行かれる方も多いのですが、午前中に10学部にご発表いただいたような特色のある教育で、京大は、しっかり育てていかなければなりません。

ここでは、ごく簡単な趣旨説明ということでスライド1枚にまとめさせていただきました。今日ここまで色々なお話がありましたが、その中で出てきたキーワード的なものをざっと拾ってみました。上の方には、「自学自習」、「自啓自発」、「主体性」、「自主性」のようなキーワードが並び、また3段目には、「国際性」、「コミュニケーション力」、「語学力」など、色々ありますが、ここら辺の力をつけていかななくてはいけない、という話であります。冒頭の総長の基調講演の中でも触れられましたが、教育・研究の環境というのは非常に大事だろうということでもありますし、各学部の特色ある紹介ビデオ、それから先生がたのお話の中でも、教育にどのような工夫をされているか、というお話もあったかと思えます。その中で、各学部の特徴的な文化というものもありますし、もちろん京大という大学の文化もあると思えます。さらに、北野先生がお話しになりました「教育を良くしていくための制度改革」や、部局の先生がたも関わられている「3つのポリシー」、つまり「どのような人をとるか」、「どのように育てるか」、それから「どのようにして送り出す

か」、これらを考えていく必要があります。

これからお二人にお話しいただきますが、まず大学に入る前の高校の校長先生、柴先生にお話しいただきます。もちろん高校だけではなくて、本来大学は社会人を呼び戻していくということも大事ですので、将来的には社会人の学部生も増やしていかなければなりません。また出口のところでは、仲さんにお話しいただきますが、卒業生、それから起業、人材関連の会社をやられている立場でお話しいただければと思います。社会からの要請、それから京大の場合、かなりの数の学生さんが学部を出られたら大学院に行かれますので、そのような方々をどのように送り出したらいいか、ということでもあります。

その中で、スライドの一番下のところにありますが、様々な教育の種類とでも言いましょうか、初年次教育、それから教養・共通教育、先ほど喜多先生から教育院の最新の状況のご紹介がありました。さらに学部の専門教育、大学院に繋がっていくということでもあります。また、フィールドワーク、実習体験、授業外学習、ここら辺の正課の中に必ずしも入らない経験や学びも、京大の教育の強みということで、これまで色々とやられています。

これらを踏まえて、是非パネリストの皆さん、そして会場の皆さんとの意見交換を通じ、これから京大の教育を通して何をどのように育てていくべきか、またさらに発展させていくにはどうすればいいかということについて、議論を深めていければと思います。

以上が、趣旨説明であります。それでは、まず大手前高校の柴先生の方から 10 分ほどご講演をいただきます。拍手でお迎えください。（拍手）

**柴** 改めまして、柴でございます。どうぞよろしくお願ひします。

先ほどご紹介にもあったように、大手前高校の校長ではありませんけれども、教育委員会で高大接続であるとかそういった話をしておりましたので、教育委員会的な思いで話すことが 50%ぐらい、それから大手前高校の校長としての高校の話が 40%ぐらい、あと 10%は親としての気持ちを含めながらお話しさせていただきたいと思ひます。

大手前高校のお話は、時間が余りありませんので、別紙の資料がございますので割愛させていただきます。きょうは中学・高校・大学の接続の話と、それから本校の取り組み、それから大学のほうに期待することと 3つの話をさせていただこうと思ひます。

いろいろなところでお話がある接続の話なのですが、私ども高等学校としては、中学生を受け入れて、そして大学に送り出していくという真ん中を背負っています。当然高校入試があって、大学入試があるわけですが、一つ、中学から高校という接続についても実は路線一貫教育ではありませんので、一旦そこでバチッと切れたという形での入試が実際行われています。そこをリレーゾーンのような考え方ができないか。もちろん高大もそうなのですが、そういうことを教育委員会としても考えていました。

大阪府は入試選抜制度を少し変更いたしました。どう変えたかという、ポイントを5つほど上げていますけれども、上から3つ目ぐらいからが今回の特徴のことになってきます。まず3つ目の調査書の様式変更についてお話しします。この調査書というのは先生方に書いてもらうものなのですが、活動や行動の記録というのを先生方にしっかり書いてもらう、それを3カ年の方式で書いてもらうということにしました。それから全員に対して自己申告書を提出してもらう。自己申告書というのは自分の思いであるとか、これからやりたいことであるとか、これまで思いを高めて





きたこと、そういうことを全員に書いてもらうということにしました。主に今、申し上げた活動・行動の記録と自己申告書をもとに、ボーダーゾーンはアドミッション・ポリシーでとろうというふうに入試制度を変えました。

具体的に申しますと、募集人数の110%までを総合点で1群にしているのですけれども、90%までは学力といいますか、総合でとります。残りの10%は、ある意味でそこからは誰をとってもいい、点数ではないのです。自己申告書に書いている志であるとか、京大の特色入試的で言うと学びの設計図であるとか、自分の報告であるとか、そういったことをしっかり読んで、そしてそこからアドミッション・ポリシーに極めて合致した生徒をとろうというふうに入試を変えました。これは本校のアドミッション・ポリシーです。ペーパーも入れていますので、後ほど見ていただいたらいいのですけれども。

こういうふうにしたのが昨年度です。私が学校へ赴任してから、中学校とかからたくさん問い合わせがありました。どうやって対策をとったらいいですか、と。どうしても入試となると対策という話になっていました。それが対策にならないようにするには、どのようにしなければならないのか。3年生には直前なので、余り言うともそれが対策みたいになるのでよくないなということで、学校内でさらに議論しまして、中学生に対して調整的な働きかけをたくさんしなければいけないなど考えました。うちの課題研究の発表会に中学生に来てもらって、あるいは質問してもらって、そういうことをまずしました。それから体験授業をたくさんやるようにしました。中学生にたくさん来てもらって、高校の学びを、真似事かもしれないのですけれども、たくさんしてもらうように、特に1年生、2年生にしています。そういうことによって高校での学び、今、何を考えているかということをちょっと高めてもらうような仕組みをやっています。それが中学校と高校の接続の話です。

高校と大学の接続の話ですけれども、先ほどから北野理事であるとか、皆様方のご報告の中であったように、書かせてもらっているのは失礼を承知で書きましたけれども、大阪大学のこれまでやっている理学部の研究奨励AO入試のイメージで書きました。SSH全国大会で発表した人とか、学生科学賞とかで全国大会に行った人とか、そういった人が出願できて、実際に書類選考とかプレゼンをやってもらって、センター試験で最後何点取らなあかんというのを大阪大学理学部でおられるわけです。それが適塾入試に移っていくと聞いています。京都大学よりも先にこういうのを大阪大学でやっておられますけれども、こういったものは非常に評判もいいです。大阪府の府立高校のTOP10の学校をGLHS（グローバルリーダーズハイスクール）と言っていますけれども、毎年この制度で大阪大学の理学部に行っています。これは一つの入試との接続で、高校現場から言うともとてもいい感じで思っているという入試です。ですから、今度の京都大学の特色入試もそういった形で、私らも今、3年生には働きかけをしているところであります。

余り時間がないのですが、これは大学接続に向けて高校の学びを変えないといけないということで、科学の甲子園大阪大会というのをやっています、実技というのを去年から入れたのです。そうすると、実技というのは何かというと、ある課題があって、いろんな実験器具があって、その中から考えて実験器具を選んできて、それをどうやって使って実験して調べればいいのかということを考えないといけない、そういった競技なのですけれども、府立高校は結構実技競技が弱かったのです。やっぱり理科の授業で実験を6年間やっている学校と比べると、3年でやっているというのは弱いねということが出てきたので、うちの学校で考えたのがこれです。やっぱり体験するということが必要だ、考えながら実験をさせないといけない。アクティブラーニングの話なのですけれども、何らかの実験とかをどんどんやらせていく、体験する。知識がどうやってふえるかという、それをなぜとか、不思議だなとか、これは知っておく必要があるということで振り返って家で勉強するとか、自学自習で知識をつけていく。優秀な生徒はそれでいけるのではないかというふうなこ



とで動いています。

うちの学校としては、サマースクールとか、東京研修とか、こんなのはどこもやっていますけれども、うちの学校としてもそういう実体験に即した学びを高めるものを実施しています。それからここにあえて書かせてもらっています4番目、5番目、先ほどからありますグローバルサイエンスキャンパス、京都大学のELCASもそうですし、ことしから大阪大学もSEEDSプログラムがスタートしています。ELCASのほうは大阪府の生徒もたくさん推薦で行かせてもらっていて、これは非常に接続にとってはうまいことしている事業だと思います。たしか土曜日に2回ほど行かせてもらって、今まで理学部だけだったのが工学部とか薬学部とか農学部とか、こういったことができれば、先ほどの接続であるとか特色入試というところに直接つながらなくても、マッチングと言っていたその言葉どおりに、マッチングというのが極めて実現しやすい形になるのじゃないかなと思っています。

それからもう一つ、GLHS連携事業ということで、大阪府のほうで連携協定を結ばせていただいて、京都大学キャンパスガイドというのを特別にやっています。それで学内に入れていただいて、特別にいろんな学部等の案内をしてもらって、これで京都大学の志願者がふえました。私事ではありますが、うちの息子もキャンパスガイドに行って、やっぱり京都大学に行きたいなと思って実際に行かせていただいているということで、こういうキャンパスガイドとかそういったものはとっても接続にはきいている手法でありますので、続けていきたいなと思っています。

最後になりますけれども、期待すること。ここで期待することとあえて書かせてもらいましたけれども、きょうたくさんお話を聞いていて、ほぼほぼベクトルが合っていて、大体そういうふうな感じで京都大学が進めていかれているのだなというのがよくわかりました。先ほど高校入試でも言いましたけれども、10%ぐらいというのは実は誤差なのと違うかと思っています。入試に対して見たとき、実はうちもアドミッション・ポリシーによる入試の人数枠は全体の10%で、点数幅で言うと何点かという、4点ぐらいです。ですから、そのぐらいの中での10%の幅というのはある意味誤差なのと違うか。そしたら、志の高い者をとった方がいいのと違うか。そのメッセージ性が中学生には効果的だなと思いましたから、そういうところにチャレンジしていただくというのは期待しているところであります。

先ほど申しました特色入試が対策という形にならないようにということで、少しお手間をかけますけれども、オープンキャンパスとか、発表会とか、ELCASみたいなものとか、そういうのはお願いしたいと思っています。それから教養教育については、先ほど北野先生からお話がありましたので、非常にありがたいというか、そういう形で高校も送り出したいと思っていますし、英語についても、先ほども変えていきますというお話がありました。これまでずっと大阪府と京都大学といろいろ仲よくさせていただいてきたものですから、大体ベクトルが合っていて、きょうはよかったなど、大阪府が進めている方向と京都大学が進めておられる方向がベクトルが合っているので、高校3年間、それから大学というのが1人の生徒に対して同じ目線で、同じ方向性で教育ができるということで喜んでおります。

どうもありがとうございました。（拍手）

**飯吉** 柴先生、どうもありがとうございました。我々にとって高大連携は勿論大事であります、さらに中高接続、アクティブラーニング、国際性をどう育てるか、それから最後には大学教育改革の期待まで、幅広く短い時間でお話しいただきました。どうもありがとうございました。

皆様から質問票をもう既にいただいておりますが、特に今の柴先生のご講演、そしてこれから仲さんのご講演がありますが、このお2人に対する質問票も仲さんのお話が終わった後に追加で回収させていただきますので、何かございましたらぜひ質問票のほうをお願いいたします。

それでは、続きまして仲さんのご講演に移りたいと思います。よろしくお願いいたします。拍手でお迎えください。（拍手）



仲 こんにちは。仲です。今日はよろしくお願いします。

今日は3つお話ししたいと思います。一つが、本日は先生方がたくさんいらっしゃると思うので、皆さんが教えている京大生が卒業後どういうふうなキャリアをへてどうしているのかみたいな、一サンプルとしてのお話。二つ目が、今私がやっていること、何をやっているかについて。三つ目が、きょうのパネルディスカッション上、提言をくださいという話なので、提言というお話をしたいと思います。

まず、学生のころにやったことですが、在学中は勉学に励んだというよりも結構面白いことをやっていました。例えば京都大学にミスコンが2004年入学当初はなかったのですが、11月祭はおもしろくないねということで、1回生のときなのですが、ミスコン実行委員会というのを立ち上げて、協賛とかを取りつけたりしていました。ドレスの協賛とかを集めていたら学生団体から反対運動が起きて、結局できなかったというのを1回生のときに体験したりして、ヤフーのトップニュースで「京大でミスコン騒動」というのが出て公式サイトが落ちたりしていました（笑）。また、1回生の終わりぐらいから2回生のときに、Chot★Better という学生のための情報フリーペーパーを作ったり、3回生のときに起業したりとか、いろいろやっていた、ちょっと変わった学生でした。

その後、キャリアパスとしては、ご縁があったゴールドマン・サックス証券というアメリカの投資銀行に入りまして、日本株を海外の機関投資家向けに営業する仕事をしていました。特にシンガポールとか香港にクライアントが多かったです。2008年、入った年にリーマンショックがありまして、株価のチャートが垂直になって、百年に一度の危機みたいな感じで大暴落しまして、ヘッドカウントも減っていき、雰囲気が一変したオフィスで日々を過ごす中、その業界にいる10年後の自分がイメージできず、結果的に退職しました。

その後、ご縁があって、フェイスブック・ジャパンに参画しました。当時国内には75万人ユーザーしかおらず、それを成長させようとアメリカのパロアルト本社からハーバードやスタンフォードなどを出ている優秀な同い年ぐらいのエンジニアが来て、プラス日本人3人で最初、小さなマンションでやっていました。当時7億人が世界中でフェイスブックを使っていて、今は10億人になって、日本で75万人だったのが今では2,000万人が使っているのですが、その革新性がすごいなと思って、自分でもそのFacebookプラットフォームを活用したサービスを開発してみたいと思うようになりました。

これが起業のきっかけです。フェイスブックを基盤にしたサービスを、4年ぐらい前にマンションの一室で始めました。その後順調にパイが大きくなってきていて、今はこんな感じのオフィスに引っ越しました。ちょうど1カ月ぐらい前に入居したんですが、もともと3畳ぐらいしかなかったスペースだったのが、今は350坪ぐらいのオフィスに入れたということで、結構事業としても大きくなってきているかなと感じますし、メンバーも結構多様性に富んでいて、海外進出なんかもやったりしています。以上が、今経営している会社がどんなところかと、私のキャリアがどんなふうになってきたかということです。

次は、ウォンテッドリーって何みたいな感じだと思うので、ご説明をしたいと思うのですが、もともと問題意識としまして、両親が大学で研究者として教えているのですが、仕事というのは楽しいものに違いないと子どものころからずっと見てきました。なので、大学に行くのは社会で将来活躍するための必要な教育期間なのかなと思って、そんなにすごく勉強が好きだったわけではないの

ですけれども、大学に行きました。大学で勉強したら、その後すごく好きなことができるに違いないと思って卒業したのですけれども、卒業してみると意外と世の中で働いている人はすごくつらそう。30歳で子どもとか家のローンとか背負うものが増えて、自分のやりたいことではないけれども、朝、満員電車に乗って揺られて行くみたいな人が増えてきているし、就職当初も、外資系はハードワークで、朝の9時から朝の5時まで働いて、シャワーを浴びてまた会社に行く、そういう人も多かったですので、メンタルで病んだりすることも多くて、何のために働いているのだろうと思いました。なので、もともと起きている時間の半分ぐらいは人生で仕事に使うのだから、仕事で好きなことができ、社会貢献とか自己実現ができるようなものがやりたいという思いで今、やっています。

やっているサービス、実現するサービスとしてやっているのは、ウォンテッドリーというビジネスSNSを展開しています。大きな事業の柱で言うと、企業と人のマッチングをしています。今は月間70万人ぐらいが使っているのですが、「シゴトでココロおどる」という形で、共感を軸に人と企業をマッチングしています。なので、報酬とか福利厚生とかは募集に書いてなくて、何でこのチームがその事業をやっているのかみたいなのを中心に書いています。ちょうど4年目なので、1.2万社ぐらいを扱っていて、最初はベンチャーが多かったのですけれども、最近は大手企業も入ってきていて、三井住友銀行だったり、ソニー、電通、あとはベネッセ、日テレなども使っている状況です。

最後に提言に入っていきたいのですけれども、2点あります。一つ目が学業と就業の断絶をなくす、二つ目が実践的なプログラミング・起業教育の推進です。

一つ目なのですけれども、さっき言ったように特に文系の学生は社会に出たあと働くわけですが、経済学とかを勉強して、マクロ経済、ミクロ経済をやっても、最終的にはパワポをつくったり、営業に行ったりしてお給料を稼いで生きていくみたいなのがさだめなわけで、学生のときは遊びまくって、突然就活期間が来るからとりあえず会社を受けて、みたいになると、入った後にはこんなはずじゃなかったみたいなことが起きています。特に今は高度成長期が終わって、入ったあと60歳まで面倒見てもらえるといったことはないわけです。我慢していても企業が一生面倒をみてくれない今の時代、自分が何をやりたいのかとか、どういう人と働きたいのかを真剣に考えることが、卒業後に充実したキャリアを築く上で必須なのじゃないかと思っています。

その解の一つが、アメリカで盛んなインターンです。日本でいう説明会もどきの数日のインターンではなく、例えば1年生から夏期休暇などを利用して、普通の従業員と同じように勤務をさせてもらうという機会を得ることで、自分が将来どういう仕事をしたいのかみたいなのがわかるし、それに対して今の学業のときに何を学んだらいいのかみたいなことがわかるわけです。私も学生時代は、社員のようなコミット感でアルバイトさせてもらったりしていたので、「働く」ことのリアリティが強く、キャリアの幅が広がったなと思っています。これがずっとサークルばかりに明け暮れたりとかして、突然就活みたいなことでやって、入ったら違ったというよりは、事前に就業体験みたいなのがインターンという形で提供されているのはとても理想的だと思います。これは企業側の問題も結構大きいと思うのですけれども、大学側も単位とか出しているところがふえていますし、より学生の背中を押してあげるような形になったらいいのじゃないかなと思っています。

ウォンテッドリーが提供しているインターンアプリには、サイバーエージェントの社長とお話ができる募集や、為末大さんという陸上選手の方がやっている会社でマーケティングを手伝うみたいな募集があります。実際こういう会社の中に入って行って遮二無二働かせてもらうみたいな就業体験をさせてもらうことでよりキャリアがつながるし、学業により実が入るようになるのじゃないかと思っています。私も学生のときに組織論を学んでいて、「会社の経営者や従業員は、会社の利益最大



化よりも私益の最大化を優先する」というのを学んだのですが、それを実際に自分がインターンで仕事を動かすとその学んだことについてより深く考えるきっかけがあったりと、実際の仕事とリンクして理解が深まった経験があるので、実際の場で働くのがいいのかなと思います。

特に関西の学生さんはその機会がかなり少ないんじゃないかなと思っていて、ウォンテッドリーのユーザーは、早稲田、慶応が多くて、東大がその後、東大に比べても京大生がウォンテッドリーを使ってインターンをやっている人は半分ぐらいなのですね。早稲田とかに比べると5分の1みたいな感じになってしまっています。受け入れする企業が少ないというのもあたりまえなんですけれども、そんな数少ない関西の学生なんですが、最近は京大生でも夏休みとかを利用して東京の企業でインターンをしている学生もふえています。実際に京都大学の学生さんが2名、1年程休学して弊社でインターンをしていたりするのですけれども、最近はギャップイヤーの代替手段として、休学が流行ってきていると色々な学生さんと話していて感じます。関西はそういう機会が少ないので、そういう機会がふえたらいいんじゃないかなと思います。

提言の二つ目は、より実践的なプログラミング・起業教育の推進についてです。

起業に関して言うと、最近は卒業後に起業をして、会社を売却して20代で十億円ぐらいの資産を手に行っている事例も出てきています。それは一つのキャリアパスだと思っています。普通に商社に入って、年収1,000万とかで30歳とか40歳になったとしても、生涯賃金は4~5億ですね。それに対して若いときに自分で何かつくってそういう企業に売却して生涯賃金を稼ぐという生き方もあり得るわけです。それが可能になった背景としては、エコシステムというのが今できてきていて、お金を出すところもふえていますし、それを買ってくれる大企業もふえてきていますし、それをメンタリングしてくれる企業の人もふえてきています。DeNAというのを皆さん知っているかわからないですけれども、モバゲーとか、横浜ベイスターズを持っている会社ですが、DeNAの共同創業者の人が投資してくださって助言してくださったりとか、他にもサイバーエージェントという会社の藤田さんとかが助言してくださったりしていて、すごく環境が整ってきているので、キャリアパスがすごくアメリカに近づいているんじゃないかなと思います。こういう事象も起きているということを知っていただけたらと思います。

あとは、さっきのインターンみたいな話になってしまうと、学業に専念すべきときに仕事についてしまうとどっちつかずになってしまうんじゃないかみたいな懸念はあると思うのですが、研究に没頭して、それを応用して起業するということもあり得るのです。例えば東大の松尾先生という方の研究室は複数起業家を輩出して、最近上場したグノシーという会社があるのですが、そこもその研究室の学生さんが機会学習とか言語解析とか、その研究を応用してそういう会社をつくっています。研究内容が実際にそういうプロジェクトとか起業につながることもあるということをお話ししたかったという感じです。

最近アメリカでたくさんのメガベンチャーが生まれていて、グーグルだったりとか、フェイスブック、ツイッターなど、時価総額が1兆円とかを超える企業がたくさん生まれています。そのインキュベーションになっているのはシリコンバレーなのですが、その一環としてスタンフォード大学で研究している学生のところに実際に成功した起業家が訪れてレクチャーをする。きっかけを提供するという意味で起業家との交流みたいなものが、特に京都は少ないというので、起業教育的な観点からは促進されるといいのではないかなというのがあります。

次にプログラミング教育ですが、プログラミング教育は既に多くの大学で存在します。私も情報処理というのを大学2年生のときに取っていました。それはすごく眠くて、聞いているだけで全員寝ちゃうみたいな感じで、やっている内容も、ターミナルを開いてコマンドを叩いて操作する。それはすごくおもしろくなくて、スタンフォードとかでやっている内容はもうちょっと高度にはなる



のですけれども、例えば Ruby とかいうわかりやすい言語を使って、簡単なアプリケーションをつくって、実際に動くものをつくれたりするのです。簡単なものなのですけれども、ニュースサイトをつくれたり、ブログとかをつくれたりするのです。技術を目的とするのじゃなくて、手段として問題解決に使えるんだよというのを伝えることによって、かつ文系の学生とかに伝えることによって、京大の皆さんはすごい地頭がいいのに、そこから派生してくるのを使うみたいなのがなかなか抜けているというか、弱いのかなというふうに思うので、問題解決の能力みたいな、きっかけづくりみたいなのでプログラミング教育をもうちょっと実践的なものを取り入れていったらいいんじゃないかと思います。

最後に、さっき志がある学生を入れるという話をしたのですけれども、ミスコンとかフリーペーパーをつくってみたい例を見たらわかるとおり、別に志とかはあんまりなかったのですね。高校生に志があったら、それは嘘なのじゃないか、言っているだけみたいな気がします。私も30歳になったのですけれども、過去4～5年七転八倒しながらいろいろやってきている中で、自分の行く道はここなのじゃないかみたいなのが見えてきています。なので、とにかくいろんな刺激とかきっかけとかを与えて、その人がいろいろ失敗するチャンスとかを与えて、その先に志というものが見えてくるのではないかと思います。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

**飯吉** どうもありがとうございました。「仲さんのように京大から羽ばたいて、未来を拓く人が出てきているのではないか」、「ならば京都大学の教育改革は、本当に必要なのか」というような雰囲気になるかもしれませんが、そうなるとそこで終わってしまいますので、パネルを続けたいと思います

パネリストの皆さん、どうぞお席にお戻りください。

「学業と就業の断絶をなくす」というのは、非常に大切なご提言だったと思います。自分としては、仕事で心を踊らせるためにも、このパネルを盛り上げていかなければならないと改めて肝に銘じております。

シリコンバレーに10年ほど住んでおまして、別にIT企業ではなくて教育の財団におったのですが、家の裏に住んでいる人が株式公開したあと引っ越していくのを見て、自分はまじめに働こうと思っていました。余談ですみません。

それでは、いよいよお待ちかねのパネルディスカッションに移りたいと思います。

今、柴先生と仲さんのご講演がありましたけれども、これに対して質問票がもしあれば、申し訳ありませんが、挙手していただければスタッフの方が回収しますので、よろしくお願いします。

これは、クリッカーと言いまして、今、流行のアクティブラーニングで使うIT機器で、欧米ではかれこれ10年以上前から使われているのですが、日本では数年ほど前から導入が始まり、最近ではスマホ等で代用する場合があります。この後、パネルディスカッションに入る前に、一度クリッカーがどういうものか、練習をチェックを兼ねてやってみたいと思います。

一番僕が好きなのは、「起きている人は1番を押してください、寝ている人は2番を押してください」という効果的な使い方、そうすると1番しか押されなくて、いかにアクティブかということがよくわかるのですが、今は冗談でありまして、1問目は、これをお願いしたいと思います。

「社会からのニーズへの対応と京大らしい人の育て方は、現在マッチングがよくとれていると思いますか」というのが質問です。これに対して回答は4択になっております。もし一度選んだ答えを変えたい人は、押し直していただければ、前のは取り消されます。それでは、1、2、3、4のどれかを選んで押ししていただけますでしょうか。一番後ろの席の方もちゃんと電波が届くことはチェックしてありますので、全会場をお願いします。よろしいでしょうか。

では、回答結果を開けます。1、2、3、4と並んでいますが、「大いにそう思う」という人は少ない、出だしはいいですね。「ある程度はそう思う」が一番多いですね。4番目の「質問が間違っている」というのは、京大ならではのと思ってご用意したのですが、やはり相当な数があります。これについてお1人ずつお話しされると10分、20分お話しくださる先生も多いかと思しますので、是非それは後ほどの懇親会のときに意見交換していただければと思います。ありがとうございました。

それでは、もう一つだけ練習したいと思います。2問目、似たような質問なのですが、「社会からのニーズへの対応と京都大学らしい人の育て方は、今後よりよくマッチングさせることが可能か」。未来に向かっての話であります。これを先ほどと同じ4択でお答えいただけますでしょうか。パネリストの方も、もしよろしければ押していただけますでしょうか。

興味津々ですが、結果はどうでしょう。「大いにそう思う」が結構あります。一番多いのは、「ある程度そう思う」ということで、これを2つ合わせると、総長が今、「へえー」と仰いましたが、意外だったのでしょか（会場、笑い）。今、このシンポジウムをやってよかった、と実感しております。「質問が間違っている」と回答された方もまだおられますが、大体ざっくりいって、「そうは思わない」と言われる方の倍ぐらいの方が「何とかなるのではないか」というオプティミスティックな印象を持たれたということでもあります。もちろんこの回答内容を結論づけるということは、ここでは全く意図してはいませんが。

続きまして、パネルの皆さんにお互いにコメント、インタラクションしていただこうと思うのですが、まず皮切りに、山極総長に今日のこれまでのところを振り返って、少しコメントをいただければと思います。よろしくをお願いします。

**山極** では、簡単に。最後の柴さんと仲さんのお話はとても刺激的で、午前中、午後、大学教育ということについてのさまざまな話を聞いた上で改めてお聞きすると、とてもよくわかりました。

私の印象を一口で言うと、京都大学は多様だなということです。この多様性をうまく出すか、ネガティブな面が出てくるかというのは、我々教職員の努力にかかっていると思います。何せ京都大学の教員は約3,000人おりますけれども、そのうちの800何十人かは附置研究所やセンターに所属する先生です。つまり学部教育に直接かかわっていない先生方であって、その先生方は原則としては研究に専念しておられる。でも、そういう先生方でも基礎教養教育にかかわることができるというのが京都大学の特色です。東京大学と違うのは、教養部というのがあるわけではなくて、全学が一致して基礎教養教育に携わる。しかし、学生は初めから各学部にも所属しているということです。これがいわゆるポジティブに出るかネガティブに出るかということを私は考えています。というのは、学部の先生方は1回生からその学生に責任を持っているわけですから。そういう自負もあります。だから例えば少人数教育をやったり、それから学生相談室を設けて、学部の先生方がその学部学生のためのいろんな指導をしたりしているわけです。東京大学はそれができないのです。教養部の先生方がそれをやっている。東京大学ではそれはちょっと解消して、学部の先生方が教養教育に手を伸ばそうとしている。京都大学ではそれとは逆に、そのネガティブな要素が強かったものだから、国際高等教育院というものを立ち上げて、そこで専任の先生方を設けて、京大という立場から全学共通教育を実施し始めた。これが私はうまくいっていると思います。これをうまくマッチングさせる、つまり学部教育と全学共通教育をマッチングさせながら、出口を見据えていくということが必要なのです。

ただ、一つ問題があります。それは今日、お話の中にもあったように、学部によって教育の仕方が非常に違うわけですから。例えば経済学部のように必修科目が1つもない。医学部のように全てが必修科目である。全然違うわけですから。こういう違う中で、まさに大学に入ってきた学生、これはみんな

な京大生です。そういう意識を持って入ってきます。私もそうでした。そういう学生の立場からすると、どういう履修ができるのかということを考える。出口に立ったときに京大生として卒業していくわけですし、しかも卒業した後も京大生としての意識を持ち続ける。群れないのが京大生だと言いますけれども、最近は我々も努力して、同窓会組織も大分整ってきました。京大生という意識やアイデンティティがある程度高まってきたように思うし、京大で何を学んだのか、過去を振り返ってみると、京大でよかったなと思う人が出てきてほしいと思います。

では京大生としてまとまった教育や学習というのは一体何であったのか、あるいはどうするべきなのかということをごどこかで考えなくちゃいけない。それを一番よく考えているのは恐らく全学共通教育に携わっている方々だと思います。学部を問わず、こういう学問が必要なんだという意識でいろんなコースツリーをつくったりしているわけです。こことどうやって学部教育をうまく連携させていくのかというのが重要だと思います。

私が問題だと言うのは、さっき仲さんがちょっと話をされていましたが、すべての学生が高い志を持って、あるいは志を決めて入ってくるわけじゃないのです。私もそうでした。入学してから、これは俺とちょっと違うかな、私とちょっと違うよねというふうに考えたときに、転向したくなる。そのときになかなか京都大学ではできないのです。入学試験の点数というのがずっとつきまといますから。今、GPA制度というのがあります。これは京都大学も導入しようとしています。これは学生のモビリティを高める上では非常に重要です。つまり大学に入ってから成績の平均点というものを持って、それをもとに渡り歩いていけるという制度なのです。これは京都大学に限らずほかの大学でも、あるいは国際的に外国の大学に行く際にも非常に有効です。こういうものに対応していかななくてはならないのではないかと。つまり一旦京都大学に入って、例えば医学部でやろうとしたけれども、あるいは工学部でやろうとしたけれども、やっぱり違う学部に行きたいなと思ったときに、これを補足してあげるような制度設計の仕方というのが今の時代は必要なんじゃないかということです。

私が知っている学生でも、ほかの大学に移ったり、あるいは大学をやめてしまったりということがありました。工学部の伊藤先生がおっしゃっていたように、1回生で折れてしまう学生というのは結構数いる。そして留年率が高い。これは学生が入ってから自分の能力や自分の進む道というものを考え直しているということのあらわれだと思うし、それがうまくいっていないということのあらわれでもあります。ですから、学生の立場に立っていろんな道を用意してあげることが必要なんじゃないか。私はW I N D O W構想の最初の指針として **Wild and Wise**、と掲げましたけれども、ワイルド、つまり野心的な、意欲的な気持ちを持って進む学生をぜひともほしいし、育てたいと思います。ですから、その野心というものをうまく伸ばしてあげるような環境を京都大学はこれからつくっていきべくなのじゃないかなということを強く感じました。

もう一つ、出口ですけれども、最近は経済同友会や経団連の方とお話をしていると、さっき仲さんの話にちょっと出てきたけれども、インターンシップという話題が出てきました。これは日本ではまだ就活に使われている可能性が高い。つまり短期で、数日で行く学生が多いわけです。それでは全然身につけません。海外では半年なり1年なりというインターンシップが結構あります。しかも学生は金をもらってインターンシップに行っている可能性が高い。日本では企業が金を出しているのが10分の1ぐらいです。これをもう少し考え直していかないと、特に文系の学生にとっては、どういう社会体験を積んで実際に社会に出ていく用意をするのかということがなかなか今の時代は見えにくいので、これはやはり産業界と大学がかなり協力をして、用意をしてあげたほうがいいのかなと思います。

きょうはいろんなことを考えさせられるお話でしたが、これからいろんな話題が飛び込んでくる

ことを期待しています。どうもありがとうございました。

**飯吉** どうもありがとうございました。幾つかの貴重な、また大胆なご提言もあったかと思えます。一つは、マッチングというお話が今日何度も出てまいりましたように、高大接続に関しては、「高校から大学に行くときのマッチング」ということが喫緊の課題なのでありますが、山極総長が仰ったのは、入学した後でも、恐らく野心的な志のある学生というのはいろんなものにチャレンジしていくからこそ、もしかすると違う活動をやってみたくなったり、違う学問のことを考えてみたりするのかもしれないので、「大学に入ってから柔軟なパスというものも、ある程度考えたほうがいいのではないか」というようなことだったかと思えます。

まず1点目として、その辺りについて他のパネリストの先生がたから、何かコメント、ご意見などございますでしょうか。

**北野** 高校生相手にマッチングということで決断を迫っている場面なのですけれども、私、高校等に行って説明しているのですが、選ぶといってもそんな狭く選ぶ必要はない。360度あったときに、大体どっちの方向、プラスマイナス15度か30度かわかりませんが、こっちのほうに行くのか、こっちのほうに行くのか、こっちのほうに行くのか、それぐらいは最低限考えてもいいんじゃないですかというふうに言っています。

それから、あとは選択肢を選ぶと二度と、こっちへ行ったらこっちの人生はないのかということそんなことはなくて、またいろんな機会に合流していく。例えば森脇先生がこっち行って私がこっち行ったときに、10年後ぐらいにまた同じところにいるということは幾らでもあるわけで、こっちに行った人と出会うことは幾らでもあるのだということを高校生に言っています。通じているかどうかよくわかりませんが、そんな話をしています。

それから、先ほど志の定義について少し議論がありましたけれども、私もそんなに高校生に志があるとは思っていませんし、私自身もまだこの年になって志があるかどうかよくわからない状況なのですけれども、高校生に志と問うているのは、要するに親とか周りの人、もちろん受験産業の人たちの意見を参考にするのはいいけれども、それに100%乗ってはいけません。自分に何かが必要なので、それをとりあえず志と言っておこうというような意味合いで投げかけているつもりです。今、本当に周りの意見が強くて、先ほどあった医学部指向というのがどんどん強くなっていて、小学校の段階でそれがインプットされてしまっていて、人生を縛っているわけです。その呪縛を解くのは非常に困難なのですけれども、何とかそういうことを若者に伝えるために、とりあえず志という言葉を使っているのです。もっといい言い方があればほしいなと常々思っているところです。

**飯吉** ありがとうございます。他のパネリストの方、いかがでしょうか。森脇先生、何か。

**森脇** 特にないのですけれども、山極先生のほうから指摘があったように、大学に入ってから進路の選択がしにくくなるというのは、私もこういうものとかかわっていますから、問題があるかなと思います。特に大学に入ってきてから、みんなスタートライン、同じ位置に立って、よーいドンとまた改めて切磋琢磨すべきなのだけれども、違う方向を考えてみたいというときに、2年前の結果、受験の成績というので進路が縛られてしまうというのはどうかと思います。もちろんそれぞれの学部の運営等、問題がいろいろ生じるということはわかるのですけれども、それをGPAにするということは皆さんから怒られますからそう簡単には言えないところはありますけれども、この進路の幅を広げていくという意味において、今後そういうことを考えていきたいということはおっしゃるとおりだと思います。

それから、志といいましたら、仲さんから指摘があったように、受験のマシンとなって入ってこられる方が、それは決して少なくない数の方がおられて、入ってきてから全く何をしたいのかわからない。あるいは高校の時代に自分は高校でかなりいい成績だったけれども、大学に入ってきて



てから周りを見ると自分よりもっとえらいやつがいるということで心が折れてしまって、その後何もやる気が出てこないという方もおられるので、そういう意味では受験のマシンと化したような方よりはどちらかというとなつな方のほうが京都大学ではマッチするのではないかという気持ちもありますので、志というか、なつな気持ちを持った方という言い方がいいかもしれませんけれども、ちょっとした感想でございます。

**飯吉** 先ほどのインターンシップの話や今の森脇先生のお話を踏まえると、「学生さんの志というものは、実は入学した当時はそんなにないのではないか」という話にもなりそうですが、さっき仲さんのお話の中で、経済学部で勉強されていた頃は、バイトに行ったぐらいでも授業で学んだことが体感し理解できた、と言われていました。実際このような形で、大学の中での学びと社会の接続が生まれると思うので、その意味でインターンシップとかサービスマーケティングと言われるようなものは非常に大事だと思います。このサービスマーケティングとか、仲さんが言われた「学業と就業の断絶をなくす」ということを、いかに大学時代に体験させていくかということについて、ご自身の体験でも結構ですし、何かご意見がある方がおられれば、いかがでしょうか。

**喜多** 今の仕事ではないのですが、学術情報メディアセンターというか、情報環境機構で学生に随分手伝っていただいています。もちろんそれは業務としてお願いできる線はきちっと引きながらも、プログラミングとかを学生さんに手伝ってもらったり、それをやっていると、業務規律とは何なのかとか、ユーザーに対して何を提供すべきなのかとか、向こう側に人がいるのだということを知りながら仕事をしてくださるようになる。そういうことの実験というのはすごく貴重で、でも、専門は何なのかというと地震学ですとか、なかなかそちらでそのまま身を立っていくことも難しい学問もありますので、それこそ学内でも実はやっているのだというご紹介だけさせていただきます。

**飯吉** どうもありがとうございました。他にいかがでしょうか。

**山極** 私自身、学生生活で非常に重要だと思ったことは、考えることと気づくことなのですね。いろいろ周りの人間が、先生方がいろいろ切琢磨していると考える習慣はできます。ただし、気づきというのはいろんな場面に自分が出くわさないと、あるいは体験というものを通じてできないものでもあります。文字情報だとか絵の情報を見ていてもなかなか気づきというのは得られない。だから、他人の身になって考える。今、ちょっと喜多さんがおっしゃいましたけれども、向こう側に立って考えてみて、こんなニーズがあったのか、あるいはこんな世界があったのかということの気づきというのはとてもその人間にとって自分を見直すいいチャンスになるし、あるいは自分の進路、あるいは自分の能力を見直すいいチャンスになると思うのです。それをどうやって与えられるか。そんなものは与えられないよという方々が多いかもしれませんが、でも、そういう機会をなるべく本学の学生に体験してもらおうということは必要なんじゃないかなと思います。そういう意味で多様性、つまり学ぶだけではなくて、いろんなところに行く機会を用意することは必要なことだと思います。

**仲** 山極先生がおっしゃったことに共感するのですが、会社の採用とかで思うのは、弊社の採用をやっていると思うのですが、大学の偏差値と地頭のよさというのは強い正の相関があります。とはいえ地頭がいいだけだと仕事はできなくて、それ以外のファクターがあり、チームになるとそれがさらに強くなるのです。コミュニケーション能力が低い学生であったりとか、問題解決する意欲がない学生でも、問題解決したいのだと言っている影響を受けて逆にやる気がわいてきて、チームとして問題解決に至ったりというのを見てみると、さっき山極先生がおっしゃったように、きっかけみたいなことがあることによって、京大生は、授業に行かずに寝ているとか、スロットに行ったりとか、そういう学生が文系では多いんですが、そういう人たちが刺激を受けて、こんなところで自分は貢献できるのだ、チームとして何か問題解決に取り組むみたいなことが増えるといいと思

います。私の好きな岡本太郎の言葉があるんですが、情熱があるから人が動くわけではなくて、物事をやっているから情熱がわいてくるというふうに言っているのですね。なので、何事もきっかけというのは必要なのだと思います。

志の定義はいろいろあると思いますが、きっかけがあるとその中で自分の進むべき道みたいなのが見えてきますし、生きる活力みたいなのがわいてきて、結果として学業に励んだりとかするというふうに思います。

**飯吉** ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

**北野** 今、博士後期課程の学生のインターンシップという事業をやっている、2カ月間企業にドクターの学生を派遣するというのを、複数の大学、複数の企業でコンソーシアムをつくってやっています。ドクターというのはどうしても研究室にこもってしまって、自分の研究だけ一生懸命やる。でも、社会に出るときにいろんな問題があって、必ずしも絶対研究者になるというわけでもないので、そのアジテーションというか、可能性を広げておくためという意味もありますし、社会、会社の側からドクターの人材というのはどういうものかというのを体験していただく。双方の理解のために博士後期課程のインターンシップを拡充していこうとしています。ただまだこれは駆け出しで、今後展開していかないといけないのですけれども、とりあえず試行的な段階で、成果として企業から帰ってきたら挨拶ができるようになったという評価が真っ先にありました。これは先ほど言ったコミュニケーションということで、大学の中、研究室にいとそういう意味での明示的なコミュニケーションをしなくても成立してしまっているわけです。彼はわかっているだろうとか、割と家族的な感じにいるのですが、やはり社会に出るとそうはいかなくて、たった2カ月なのですけれども、意識的に物事を言わないといけないという環境にいと、変わる。それは全く表面的なことなのですけれども、ほかにもいっぱい見えないところで変わっていることがあるはずなので、少し場面を変えるというのを積極的に取り入れていくということが大学としては大事だと思っています。

**飯吉** ありがとうございます。

それでは、時間も限られておりますので、この後、皆さんからいただいた質問票に対して各パネリストの方からお答えいただこうと思います。その前に、今日の大きなテーマの1つである特色入試の話もありましたので、高大接続全般についてであります。そろそろ会場の皆さんの指がうずいているころだと思いますので、またクリッカーをやってみたいと思います。

実は、この嫌な質問は、我々、北野理事を初め副学長、理事補、教育関係者で京大交流会と呼ばれる、高校の先生がたや予備校関係の方々との交流の機会を持つと、必ず聞かれるものです。「京大は、これからこの特色入試の枠で選抜する人数を増やしていくのですか、いかないのですか」という辛い質問を、大体いつもは北野先生が捌いてくださるのですが、つまり高校としては、これからこのような選抜方式の枠を拡大していくのであれば色々指針法を変えていかなければならない。今日、柴先生も大手前高校でアクティブラーニングを導入したり、国際性を高めるとか、色々な試みをされているというお話をしてくださいましたが、高校側がそういうことをしても大学が受け入れる方法を変えなければ、学生さんは「受験マシン」のまま、それが変わらなければ高校側としてもそのような努力が徒労となってしまう訳です。ですから、これは別に嫌がらせの質問というよりは、高校の先生がたが、どうしようかと考え悩んでおられるということですので、是非本日まで参加いただいている皆さんに忌憚のないご意見をいただければと思います。勿論、特色入試というのは高大接続の在り方の一つに過ぎませんが、こと特色入試に関しては政策的にも非常に注目の集まっているところでもありますので、是非これをお聞きしたいと思います。乱暴な質問であるということとは重々承知しており、今回は、敢えて4の「質問が間違っている」というのは外させていただきます。

きましたので、その点ご了承いただければと思います。

今回は、3択であります。回答者数は、先ほどより7名ぐらい増えました。面白そうだということで、後から参加者が増えてきたのでしょうか。そうだといいですね。回答は、1番が一番多いですね。「よい学生が集められるのであれば、もう少し枠を広げてもよい」ということですね。敢えて（選択肢から外された）4を選んで下さった方も1名いらっしゃる。さすが京大、という感じです。「そうせざるを得ない」というのを合わせると、肯定的な回答は、大体3分の2程度ですね。

この結果を見て、パネリストの皆さんから、何かコメントや解釈、どうしようかというご意見など何かございますか。

**柴** よい学生というのはどういう定義になりますか。実は中学から高校にかけての話も同じような話になるのですが、さっきの志の話じゃないですけども、もちろん志というのはないけれども、思いをすごく持っている子がいたときに、すごく伸びていって、尖っていくという子を、入試でとってもらえるというのはありがたいなとは思いますが。しかし、私は課題研究とか、そういう活動は優秀な生徒にとっては意外とペーパーテストで取れるような知識とか技能を自分で勉強するきっかけにもなるし、それから整理して知識を自分で使えるようになるし、相互効果で学力は上がっていくと思っているので、最終的にそれで入試でとってもらう、どんな入試であっても対応できるようになるのがエリートといえますか、いい子はそれでいけると思っています。ですから、先ほど言ったように文化が変わってきていて、勝手に自分でどんどん勉強していってという昔みたいな子はかなり絶滅してきているような気がしているのです。大阪府の特講クラスがある府立高校であったとしても、昔みたいな子はいなくなっている。何をもちよよい学生かという、昔を意識したらそんな子は来ないのと違うのかなと僕は思っています。厳しい言い方ですけども。

**飯吉** 「よい学生」とは、偏差値がよいということではないと思いますが、「よい学生」、こちらでは勝手によいと選択肢に書いてしまいましたが、是非パネリストの皆さんにどういうのが「よい学生」なのかお尋ねしたいと思えます。一言では言いにくいと思えますが、いかがでしょうか。

**木南** よし悪しと直接関係あるかどうか自信はないですが、私は研究の関係でファミリー・ウェルス・トランスミッション、家族内世代間資産移転ということについていろいろ文献を見ているのですが、その中で文化的相続ということに言及されています。文化的相続は、1960年代にシカゴ大学ロースクールの先生が累進課税に関する論文の中で使った言葉です。祖父母の世代、父母の世代においてどれだけ家族に投資したのか、その結果を文化的に子どもたちが相続していく。文化的相続が大学の入学において有利に働くことは否定できないわけで、このことをどのように考えるのかということが、どんな学生を受け入れるのかということを考えるときに必要だと思えます。これは先ほど出ましたデータをいただくのに予備校に行っているいろいろ話をするわけですけども、予備校の高校生の現役コースというので、1年生から来る人の90%は親が医師だと言われていいますから、どういうふうな人がこういうのに乗ってくるのかということをよく見極めた上でやらないと、大学というのは文化的相続のメカニズムとして利用されることになります。そういうことを考えた上で、国立大学でしたら、もう少しそういうことを目配りした上でどういう学生がいいのかということを考えていく必要があると思えます。

また、文部科学省が打ち出している学力の三要素の2つ目、3つ目というのは文化的相続によって培われるものに極めて近いので、そういうことを余りに取り入れすぎると、学生に多様性を欠くということになるので、これは入学者選抜というのを考える上で非常に重要です。2018年問題ということが既に説かれているのですが、2018年から10数年かかって18歳人口が100万人になっていく。この中で人口減少社会に立ち向かう国立大学というのをどう捉えるのかという中で、本当に京都大学で教えたい学生というのを考え、京都大学にとってよい学生は何かということを見ていかな



いといけないと考えます。

大阪府立の公立高校のことをおっしゃいましたが、高校時代に住んでいた場所というのとどこの高校から入ったかというデータがあります。高校生のころに大阪府と兵庫県に住んでいたけれども、大阪府や兵庫県に所在する高校通っていなかったという人が相当数います。京都府は、住んでいたという人よりそこにある高校に通っていたという人が多いので入超です。奈良県も入超です。和歌山県も若干入超ですが、滋賀県からは県外の高校に通っていたという人のほうが多い。こういうことが起こるのには、お金が重要な役割を果たしています。

大阪府の公立高校というのはそういう面では公立中学校に残った中学生を相手にされているということで、非常に条件が悪いということだと思います。リーダーシップを取りそうな子どもたちのある部分が抜けていっていることになるからです。これは兵庫県でも起こっていることでしょう。また、京都でも起こっているということでしょうから、こういう中で何が良い学生ということは多面的な観点から定義していく必要があって、特色入試というのも気をつけないといけないということになります。

また、入学試験というのは難しくなりすぎるといろいろな人が受験しなくなるということで、入学定員が多くて普通に入ってくるというのが大事な事です。これまで、高校3年生で国公立大学を目指す人は大体20万人というラインがずっと続いています。浪人をする人は過去20数年間の間で半分になって、6万人ぐらいになっています。今後浪人する人はもっと減っていくと思いますから、どんな人をどういう形で受け入れるのかということをもっときめ細やかに考えていくことが必要であり、それがよい学生というのはこういうことだということを押さえる一つの方法だと思います。

**飯吉** 多様な選抜方法、それは一発での選抜方法に限らず、今日お話があったように少し中長期的に見ていくようなものも含めて、その中で何がよい学生なのかということをおある程度多様に考えていかなければいけない。その上で入学定員も安定させなければいけないということで、木南先生からのご指摘、大変ありがたいと思います。

それでは本パネルの最後の部分に移らせていただきます。皆さま方からいただいた質問に時間の関係で全部はお答えできないかもしれませんが、できるだけ多く取り上げさせていただければと思います。

まず、総長宛てにいただいております。工学研究科の竹内先生から、「国際化に関し、京都大学全学として10年後に目指したい留学生の割合、学部、大学院のお考えはおありでしょうか」というご質問ですが、いかがでしょうか。

**山極** これは余り根拠なく私の希望で言えば、今、本学の学生は大体2万4,000人ぐらいで、留学生が1,800人、つまり1割いってないわけです。アメリカのトップ大学が大体3割から5割、イギリスなどは5割いっている。そういうところを見ると、日本の大学が国際化するためには、言い換えれば日本の大学が日本の国のためだけに資する学生ではなく世界のコスモポリタンを育てるような位置を目指すのであれば、やはり少なくとも2割ぐらいの留学生を受け入れることを目指したほうがいだろうと思われまます。

先ほどから国際化、国際化という話がいろんな学部の先生から出ておりましたけれども、今、大学院は結構国際化ができています。でも、学部の国際化というのは進まないですね。これは制度上の問題もたくさんあるし、それからカリキュラムの内容という問題もあります。どういう学生を京都大学は海外から求めるのかということをし少し指針としてつくっていかないと、今のところ十把一絡げで留学生と言っているわけですが、日本の学生と同じようにいろんなタイプの学生があると思います。どういうことを目指すどういう学生を京都大学は受け入れていくのかということをもう少しきちんと皆さんに議論していただいて、それを京都大学の指針にして、日本人学生と外



国人学生を混在させながら、さまざまな異文化交流の中で1つ学業というのをやっていければなどというのが私の希望でございます。

**飯吉** ありがとうございます。

もう一つ総長宛てにいただいております。実はあと2つほどありますが、時間の関係でこれを選ばせていただきました。iPS細胞研究所の齋藤先生から、「フィールドワークの活用をぜひ進めたいのですが、フィールドワークを全学的に普及させていくにはどうすればよろしいでしょうか」というご質問です。

**山極** これは学生の目標というのか、基本的には先生なわけです。その先生が率先して外に出て行かないとフィールドワークというのはできない。ただし、もちろん研究室の中でやっている先生はたくさんいらっしゃるわけで、そのためにはやはり外の世界とつながる、これを私は窓と呼んでおりますけれども、そういうところを活用しながら学生を交流させるということをしていく必要がある。これは個人の先生方の努力だけではなくて、大学本体として、あるいは学部のシステムとして幾つかそういうものをつくったほうがいいのではないかと考えております。

具体的に言えば、これはまさに連携ということなのです。例えば京都市や京都府にはさまざまな施設がございます。文書館もあるし、博物館もあるし、美術館もある。そういうところと連携をして、例えば府立資料館と連携してこちらの資料を活用する。それを見ながらさまざまな人的・物的交流をしていくということが可能だろうと思います。そういう窓口というのは京都大学にはいっぱい開いている。それをまだ我々は活用しきれていないのではないかなと思います。それこそがフィールドワークにつながる道ではないかなと考えております。

**飯吉** ありがとうございます。

続きまして、北野先生と喜多先生さらに皆さん宛てに、理学研究科の鈴木あるの先生から、「英語による全学教育科目はなぜ外国人教員でなければならないのでしょうか。英語を話す日本人教員ではだめな理由をお知らせください」というご質問をいただいておりますが、いかがでしょうか。

**北野** これはだめということは全くございません。英語で提供していただいたらいいし、現にやっていただいている先生もおられます。ただ、現状で授業を既に持っていたいでいる状況で、プラスアルファ英語でということはなかなか直ちにはお願いできないということですので、今後、必要なところに英語での講義というのは当然出てきてもいいかなと考えています。特に教養・共通教育はそれをお願いするだけでもなかなか大変なところがございまして、さらに英語でというと、お願いすることはできるのですけれども、実際にそれに応えてやってくださる可能性が残念ながらそんなに高くないと考えられます。そのため、現状ではそういう外国人教員をお願いしておりますけれども、これは当然横展開していくことは期待しておりますし、今の外国人の先生方も学部教育、大学院教育も担当しておられるので、そういうところでの英語での展開というのがきっかけというか、起点になればいいなという思いでやっています。

**喜多** 北野先生がおっしゃるとおり英語でやっていただいても構いませんけれども、誰に何のために、学生にとってそれがどういうメリットがあるのだというところから設計しないと、例えば英語での教育を議論していると、日本語で学ぶほうが効率いいじゃないという議論があるようです。特に基礎的な科目になればなるほど、つたない英語で学ぶぐらいなら日本語でしっかり学んでほしいというご意見もありますし、何のためにどうやって、学生目線でものを考えていくことが大事かなと考えています。

一方で、留学生を獲得していくということになりますと、本当に京都大学でいろいろ研究を頑張っておられる先生方にぜひオリジナルなコンテンツで授業を提供していただくということが留学生にとっては非常にチャーミングな授業になっていくはずでございますので、やはりどういう学生に

何を勉強するのかというところから、そういう議論ができるだけの準備が始まったのかなと思っています。

**飯吉** ありがとうございます。

いよいよ時間も押し迫ってまいりましたので、あと2問だけご紹介させていただこうと思います。

まず一つ目は森脇先生に、高大連携接続についてです。「高大連携接続の場合、相手となる高校は進学校に限られ、平等性が損なわれることになりませんか」という、人間・環境学研究科の小方先生からのご質問です。

森脇先生宛にはもう1問ありまして、ただ、これは森脇先生他関係の方と書いてありますのでどなたでもよろしいのですが、「高大接続のような活動のいわば究極の形である京都大学附属小中高をつくってはいかげでしょうか」という、これまた大胆なご提言です。

まず一つ目の質問、相手の高校が進学校に限られてしまうということについて、森脇先生、よろしくをお願いします。

**森脇** 例えばELCASというものに限って申しますと、確かに提携している教育委員会のほうから推薦していただくのは、大阪府ですと10校の範囲ですし、他の都道府県もそういう意味ではいわゆる進学校と呼ばれるところでございます。ただ、一般枠のほうについては別に高校を指定しておりませんので、どんどん意欲のある学生さんは来ていただければいいと思います。ただ、私は今は立場が違いますけれども、先生方に多大なご苦勞をお願いしてやってもらっているという状況もございまして。一般的な形ですとするとかなり大きくしてそういうことをしなければいけませんので、作業の効率等を考えますと、しかも京都大学にとってもこれは決してボランティアだけでやっているわけではございませんので、やはり実りあるものにしたいといういろんなことを考えますと、ある程度対象を絞らざるを得ないというところはあります。もちろん進学校だけではないところにも非常に才能のある人たちがいるということは、私も数学グランプリとかいうのを少しお手伝いしたことがありますけれども、確かにその通りです。そういう点を配慮しながらこの事業は続けていくべきだと理解しております。今はそういう立場ではございませんので、そういう理解のもとでこの事業にこれからは協力していきたいと思っております。

**飯吉** ありがとうございます。

二つ目、これは野生動物研究センターの平田先生からの、京都大学附属小中高という斬新なアイデアについて、森脇先生皮切りで結構ですが、どなたでも。

**森脇** そういう意味では他大学でも、東大でも一応あるのですけれども、限られた形でありますし、附属の高校、中学校を持たれているところもあります。そういう意味においてアイデアとして非常におもしろいものがありますけれども、注意する必要があります。例えば東大は持っておられるのですけれども、かなり限られた形で障害を持った方に対してというような形のものでございます。普通の高校を設置しますとそれこそ大変な競争が発生するようになりますので、つくるときに相当理念を練って、そうならないようにしなければいけません。非常におもしろいアイデアだと思うのですけれども、実際にやるとなるとかなり作業は大変かなと思ってしまいます。でも、そういうことはこれからあっても私はいいいとは思っております。

**喜多** 飯吉先生にぜひオープン・エデュケーションでエンカレッジをしていただくように、つまり貧困であるとか、あるいは進学率も先ほど総長からもお話がありました、どこが低いのかを見ますと明らかなのです。九州のほうとか東北のほうの進学率が低く、熊本大学で教養教育の集会があったときに、文科省の方が熊本県の大学進学率はタイの全国平均より低いのですと言っていました。そういう状況があって、大学に来たくても来られない方もおられるという問題をどうやっていくか。一つの道具はオープン・エデュケーションかなという気がします。

**飯吉** 北野先生、いかがですか。

**北野** 進学校の中でも入試に特化しているところだと、逆にSSH等はやらない、時間のむだだとおっしゃっているところもあります。そういうところが逆に高大接続ということに少し冷たいこともあるので、いろんなパターンがあるなという気がします。

**木南** データを紹介しますと、京都大学の志願者の出身高校は全国で1,000程度です。合格者がいるのはその半分程度です。合格者が1、2、3名という学校は合格者を出す全体の3分の1程度になります。週刊誌などでは多いところを取り上げますがけれども、裾野は非常に広いということはわかり、これは京都大学にとって良いことであろうと思います。

**飯吉** どうもありがとうございました。

残念ながらあつという間に、パネルディスカッション終了の時間が来てしまいました。それでは最後に、パネリストのお1人ずつに1分程度でお願いいたします。今日は、「京大流・未来を拓く人の育て方」というテーマでここまでやってまいりましたが、何か京大に対する期待や提言など何でも結構ですので、お一言ずついただければと思います。

では、向かって右側の仲さんからお願いできますでしょうか。

**仲** ゴールドマン時代に強く感じたのですが、海外の機関投資家は日本パッシングといって日本は誰も見ていません。香港だったりシンガポール、東南アジア、中国に主役が移ってきています。アメリカは過去に日本に製造業が奪われたのですけれども、新しくIT産業みたいなのが出てきていて、新しいメガベンチャーがどんどん生まれていく中で、日本はどんどん遅れをとっているし、20年後には半分以上の人口が60歳以上とすごい悲惨な状況なわけです。GDPもどんどん下がっていく。そういうときにどうやったら日本で新しい産業が生まれるだろうと考えていた時に出会った本がありまして、カリフォルニア大学バークレー校の経済学者のエリック・モレッティさんの本なんですけど、その方がいろいろ統計学的に分析した結果、すごく優秀な研究者の方がいる都市でイノベーションが起き始めるというようなことが書いてありました。なので、京都大学でなくてもいいのですけれども、日本の大学に期待することとしては、お金がかかってもいいので、シンガポールの大学がしているような形で2,000万、3,000万払って世界的に有名ですごく優秀な研究者の方を引っ張ってきて、その人たちを20~30人ぐらい束ねて、そこで研究したり、海外の研究者をどんどん呼んできて、そこに集積してつくっていくみたいなことをしていくと、マクロな話になってしまうのですけれども、より日本が新しい産業をつくっていく上でのいいのじゃないかと思いました。

きょうはありがとうございました。（拍手）

**飯吉** ありがとうございました。基本的に京大関係者しかいない場なので、ぜひ京大に期待していただきたいと思います。他の大学のことは取り敢えず忘れていただいて（笑）。

続きまして、柴先生、よろしく申し上げます。

**柴** ありがとうございました。先ほどちょっとありましたけれども、リーダー育成、リーダーを育てるというところでいうと、私が思っているのは、昔と違って少し手間をかけるとか、背中を押すとかが必要ということです。そして無理やりやらすということも含めて、何らかの仕組みをつくっておかないと、以前のようにリーダーが育って行ってそれで世界で丁々発止するような人材というのはなかなか育たない状況になっているのと違うかな、と。大学の先生方もそうですし、高校の教員も昔に比べて仕事がふえているのは事実だと思います。その忙しい中ではありますが、そうしないと日本は人しかいないところなので、人を育てるというところに、本来やらなければならないことかどうかというところはわかりませんが、一手間かけるということを高校はしっかりやっていきたいと思っていますので、大学のほうもぜひともよろしくお願ひしたいと思っています。（拍手）

**飯吉** どうもありがとうございました。

それでは、京大のパネリストの先生がたから、お一言ずつお願いします。

**喜多** 自大学らしい教育とかいうこと自体がテーマになる大学はそんな多くないはずなのです。だから、どういう矜持を持ってどういう育て方をするのだということにはぶれさせない。むしろ世の中がそっちに近づいてきているのではないかという気もしているので、京大らしいとは何かということを問い続けることが大事かなと思います。（拍手）

**飯吉** ありがとうございます。

木南先生、お願いします。

**木南** お金の話をするのは品がないということになるのですが、最後にお金の話をしてもいいかということで、仲さんをお願いなのですが、経済学部長が貴社がIPOしたらすぐに電話をしますから、そのときには京都大学で世界中から2,000~3,000万円払える教授がもっと来るのにぜひ協力してください。（拍手）

**森脇** きょうはいろんなテーマが出ましたけれども、喫緊の課題として例えばこれからの学年暦等のことが重要なテーマになると思います。きょうのテーマからも出てきましたけれども、学生を大学に縛りつけておくことだけが学生の将来のためにはならないというような形も出てきましたので、そういう意味で学年暦も必ずしも学生を大学に縛りつけるだけじゃないのだという観点でまたいろいろ考えるべきかなと思います。（拍手）

**飯吉** ありがとうございます。

北野先生、お願いします。

**北野** まず特色入試のクリッカーの結果は非常に心強いといえますか、私も外からどうしますかと聞かれて、よく見ながら考えますとしか今のところ言いようがなかったわけです。しかし、前向きに捉えてくださっている先生が多いということで、単純にふやせばいいというものではないのですが、やはり意欲ある高校生がチャレンジしてみたいという形だけではぜひつくっていかないと、誰もこれを受けとめなかったら何もならないわけですから、ぜひいい形になるように知恵を絞っていかないといけないなと思いました。

それから、留学生につきましても、山極先生は2割とおっしゃったのですが、学部で2割ということになりますと今の6倍、7倍というところにふやしていかないといけないということで、かなり学部にとっては大きい仕事になっていくと思います。しかし、これは恐らく京都大学の活性化という意味では非常に重要なファクターになると思いますので、これにつきましても引き続き議論を続けていただきたいと思います。

ことしの夏は高校、予備校を回りましたが、京大ファンは国内にはたくさんいるということは身にしみて感じました。潜在的には京都大学に来て頑張ろうという若者がたくさんいる気がしますから、そういうところにしっかりメッセージを出していくことが必要かなと思います。（拍手）

**飯吉** ありがとうございます。

それでは、最後にパネルの締めの一言を山極総長、お願いいたします。

**山極** ことしの4月にドイツのハンブルクであった世界学長会議に出席しまして、非常に強い感銘を受けました。それは何かというと、今や教育というのは一国の問題ではなくて、世界の問題だ。つまり教育の権利にアクセスできない子どもたちがたくさんいる。高等教育というのは、その責務を世界でネットワークをつくって果たしていかなくてはならないということです。だから、僕はMOOCというのをやろうとしているわけですが、つまり京都大学が誇る研究資源というものはやっぱりオープンアクセスできるようにしていかなくてはならない。それがこれからの世界の趨勢だろうと思います。京都大学は研究大学であるということは実際誇るものと言えるかもしれない。



だからこそ学生にとっても、研究者にとっても魅力的な京都大学であり続けなくてはならないし、それはもっとアクティブに高めなくてはいけないだろうと思います。そのために世界に発信しなくてはいけない。金はなくとも京都大学に行きたいという世界の学生をつくらなくてはいけないと思います。京都大学はそういうことを目指す資源をいっぱい持っています。先ほど言いましたように、教育に直接かかわっていない教員が3分の1もいるわけです。そしてそれはそれぞれの世界の学者、世界の研究コミュニティとつながっているわけです。そういうものをもっと活用して、京都大学を研究者の集う場所として、あるいは京都をさまざまな研究者だけではなくて芸術家や文化にかかわる人たちが集まる場所にしていくということが京都大学のこれからの一番大きなミッションではないかと思っています。ぜひ皆さんに協力していただきたいと思います。（拍手）

**飯吉** どうもありがとうございました。

それでは、これを持ちましてパネルを終わらせていただきます。クリッカーでお尋ねする必要もなく、眠っておられる方は1人もおられなかったようで、大変アクティブなご参加、どうもありがとうございました。

それでは、最後に、もう一度パネリストの皆様がたに温かい拍手をお願いいたします。（拍手）

**司会** ありがとうございました。

それでは、このまま閉会の挨拶に移ります。パネリストの方はそのままお願いします。クリッカーはこの時間を利用して回収いたしますので、係の者にお渡しください。

それでは、飯吉透教育担当理事補／高等教育研究開発推進センター長、閉会のご挨拶をお願いいたします。

第19回 京都大学全学教育シンポジウム

『高大連携』から『高大接続』へ  
～大阪府立大手前高校の取組み～

平成27年9月2日

大阪府立大手前高等学校  
校長 柴 浩司

大手前高校Webサイト <http://otemae-hs.ed.jp/>

大阪府立大手前高校概要

まこと のぞみ  
つよき信念 たかき理想

- ◆ 創立129年 文理学科160名・普通科200名
- ◆ 文部科学省、大阪府教育委員会からの指定  
 Oスーパーサイエンスハイスクール(SSSH)…文部科学省  
 —科学する力を身につけたリーダー育成プログラム開発—  
 OSSH科学技術人材育成重点校(コAPSSH)…文部科学省  
 —「数学」の分野に特化した能力開発プログラム研究—  
 Oグローバルリーダースハイスクール(GLHS)…大阪府教育委員会  
 —グローバル社会のリーダー育成をめざす研究—
- ◆ 進学実績  
 京都大学+大阪大学+神戸大学+医学部医学科 約120名  
 国公立大学 約250名

『高大連携』から『高大接続』へ  
～大阪府立大手前高校の取組み～

1 中学校 → 高等学校 → 大学

① 中学校と高等学校の接続  
平成28年度以降の大阪府公立高校入学選抜

② 高等学校と大学の接続

2 本校の取組

- ① 科学の甲子園大阪大会の結果より
- ② 授業の進め方
- ③ 円滑な高大接続に向けた取組み

3 大学入学選抜に期待すること

1 中学校 → 高等学校 → 大学

中学校 入試 高等学校 入試 大学

- 各段階の教育の接続はリレーゾーン
- 入試を「点」でなく「線」で捉える

1 ①中学校と高等学校の接続  
平成28年度以降の大阪府公立高校入学選抜

入試改革のポイント

- 入試日程の原則1本化
- 中学校3か年の調査書を選抜資料に
- 調査書の様式変更（「活動/行動の記録」を新設）
- 全員が自己申告書を提出
- **ボーダーゾーンでアドミッションポリシーにより合否決定**

1 ①中学校と高等学校の接続  
平成28年度以降の大阪府公立高校入学選抜

- ボーダーゾーンでアドミッションポリシーに合致する生徒を優先的に合格に

合格点の上  
合格点の下

<Step1> 総合点(●)の高い順に募集人員の110%に相当する者を(1)群とする。

<Step2> (1)群の中で総合点の高い者から募集人員90%に相当する者を合格とする。

<Step3> <Step2>で、(1)群の中で合格が決まっていなかった(2)群(ボーダーゾーン呼称)とする。ボーダーゾーンの中からは、自己申告書及び調査書の「活動/行動の記録」の記載内容により、高等学校のアドミッションポリシー(求める生徒像)に極めて合致する者を総合点の順位に関らず優先的に合格とする。

<Step4> <Step3>による合格者を除き、改めて総合点の高い者から順に、募集人員を満たすまで合格とする。

1 ①中学校と高等学校の接続  
平成28年度以降の大阪府公立高校入学選抜

大手前高校のアドミッションポリシー

■本校の理念  
本校は、国際社会で活躍できるグローバル・リーダーの育成をめざし、「つよき信念(まこと)」「たかき理想(のぞみ)」の精神のもと、自然科学、社会科学、人文科学の各領域において、先進的な教育に取り組んでいます。今後も更なる飛躍を図り、地球規模の困難でかつ複雑な課題に挑戦する人材を育成し、人類社会の発展に大きく貢献します。


■本校が求める生徒像

- (1) 旺盛な探究心を持ち、数学的リテラシー、読解力、英語運用能力、科学的リテラシー等を高めることはもとより、すべての教育活動に積極的に取り組みたい生徒
- (2) 身につけた教養や高めた能力を社会のために生かし、よりよい社会をつくっていくこととする高い社会貢献意識をもつ生徒
- (3) 「地球の構成員」として、互いの個性を認め、異なる文化や歴史を尊重できる豊かな感性や、たくましく生きるための力を身につけたい生徒

1 ①中学校と高等学校の接続  
平成28年度以降の大阪府公立高校入学選抜

アドミッションポリシーに極めて合致する生徒を見極めるために

- ・学校説明会等への中学生への直接的な説明  
→ 「対策」にならないように  
→ 1、2年生への働きかけ
- ・体験授業・体験実習  
→ 課題研究発表会の中学生への公開  
→ 学校説明会で体験授業



## 1 ② 高等学校と大学の接続

本校が目指す大学入試改革

京都大学 大阪大学 東京大学 ……

### ① 出願要件

- 課題研究成果
- コンクール・コンテストの成果
- 英語能力に関する資格取得 など

### ② 選考

- 書類選考（アドミッションポリシーに基づく自己申告書）
- 口頭試問（プレゼンテーション）
- センター試験得点率 など

9

## 2 本校の取組

### ① 科学の甲子園大阪大会の結果より

総合順位	学校名	筆記合計 (満点360)	実技合計 (満点360)	総合計 (満点720)	筆記順位	実技順位
1	国立A	222	281	503	6	1
2	私立A	253	233	486	1	5
3	私立B	241	241	482	4	3
4	府立A	245	228	473	3	7
5	府立B	250	215	465	2	10
6	府立C	229	234	463	5	4
7	私立C	194	243	437	9	2
8	府立D	191	233	424	10	5

・総合順位/実技順位 1～3位は中高一貫校

■ 見えてきた課題

10

## 2 ② 授業の進め方

- 知的好奇心、社会貢献意識、使命感を高めること  
→ 第一線で活躍する方による講話  
年齢の近い先輩等との対話
- 知識を実感すること  
→ 実験・実習の充実
- 授業では定着をはかること  
→ 個々の知識をつなげる授業

アクティブラーニング

学びの質や深まりを重視するために、課題の見直しと解決に向けて主体的、協働的に学ぶ学習

反転授業

11

## 2 ③ 円滑な高大接続に向けた取組み

### (I) サマースクール

文理学科全員(160名) + 普通科希望者

京都大学及び近隣施設で講義、ポスターセッション、先輩方との対話

### (II) 東京研修

1年希望者(40名)

東京大学、東京工業大学等で講義、見学、先輩方との対話



## 2 ③ 円滑な高大接続に向けた取組み

- (III) 海外研修（アメリカ研修、マレーシア研修、シンガポール研修など）  
希望者（合計160名）  
スタンフォード大学、UCバークレー校等で講義、見学、研究者との対話
- (IV) グローバルサイエンスキャンパス  
京都大学エルキャス、大阪大学SEEDS
- (V) GLHS連携事業  
京都大学キャンパスガイド（12月）、大阪大学ツアー（11月）  
大学入試関連説明、講演、発表、学部説明



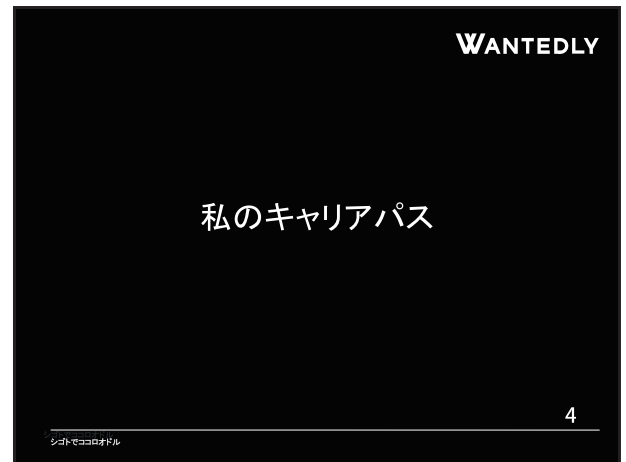
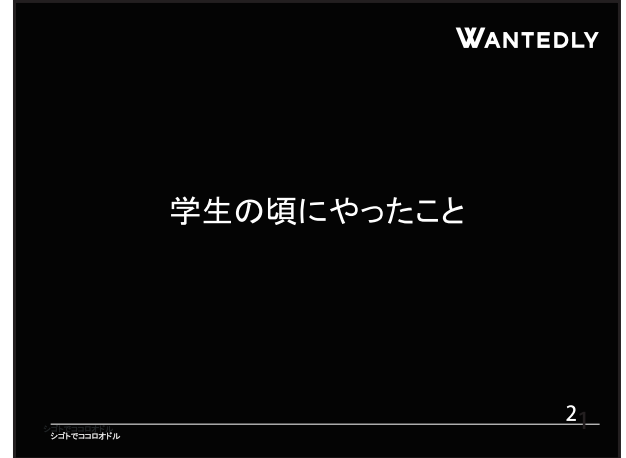
## 3 大学教育改革に期待すること

- 入試改革 一定の総合的な学力は必要だが  
→ 「10%」は誤差!? グレーゾーンに挑戦を!
- 特色ある入試の導入に向けて、高校生への直接的なアプローチを!  
→ オープンキャンパス、発表会、GSC など
- 教養教育の充実!  
→ アーリーカレッジ VS レイト・スタディゼーション
- 英語能力をさらに伸ばす仕組みを!  
→ 大阪府はTOFEL仕様の英語教育を推進

14

ご静聴ありがとうございました

15





シゴトでココロおどる人をふやす

働くを面白くする  
ビジネスSNS

月間利用者数  
**60万**  
人



働くを面白くする  
ビジネスSNS



利用社数約  
**10000**  
社

提言内容

1. 学業と就業の断絶をなくす
2. 実践的なプログラミング・起業教育

1. 学業と就業の断絶をなくす
2. 実践的なプログラミング・起業教育

1. 学業と就業の断絶をなくす

17

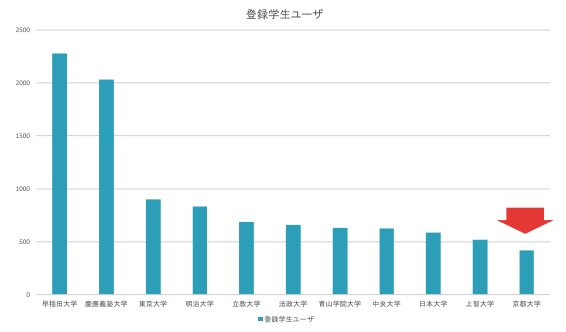
シフトでコロポドル



シフトでコロポドル



シフトでコロポドル



シフトでコロポドル

20

1. 学業と就業の断絶をなくす
2. 実践的なプログラミング・起業教育

21

シフトでコロポドル

- 成功した起業家との交流
- 実践的なプログラミング

22

シフトでコロポドル

## 12. 閉会挨拶

### 教育担当理事補／高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透



本日は、どうもありがとうございました。本シンポジウムは、教育担当理事とFD研究検討委員会の主催・企画ということでやらせていただいております、その委員長という立場でご挨拶させていただきますが、本当にすごいフルコースの1日でありました。幸いなことに、皆さまのクリッカーを通さなくても伝わってくる熱気というものがあありますし、京大の教育の今後について前向きにお考えいただいているということが、ひしひしと伝わってきた1日だったと思います。

先ほどのパネルに続いて、改めてまとめることもないと思いますので、ここではお礼だけに留めさせていただきたいと思います。まず、柴先生、それから仲さん、本日わざわざお忙しい中をお越しいただき、シンポジウムを盛り上げていただき、どうもありがとうございました。（拍手）

それから、総長、理事はじめ京大の先生がた、またお忙しい中、午前中に紹介がありました学部の特色ある教育のビデオ制作にご協力いただいた皆さま、またセッション中にご登壇いただきました各部局長や先生がた、どうもありがとうございました。

また、FD研究検討委員会の委員の先生がたや、各事務部も色々とお手伝いいただきました。国際高等教育院の事務部、吉田南共通事務部、教育推進・学生支援部の皆さん、そして高等教育研究開発推進センターの教職員・スタッフの皆さんにも、色々とお手伝いいただきましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、本シンポジウムが、今後の京大の教育の進展に向けた様々な取り組みに貢献する機会となったことを願いますとともに、今後の皆さまの部局、また各先生がたの教育研究の一層のご発展をご祈念いたしまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。（拍手）

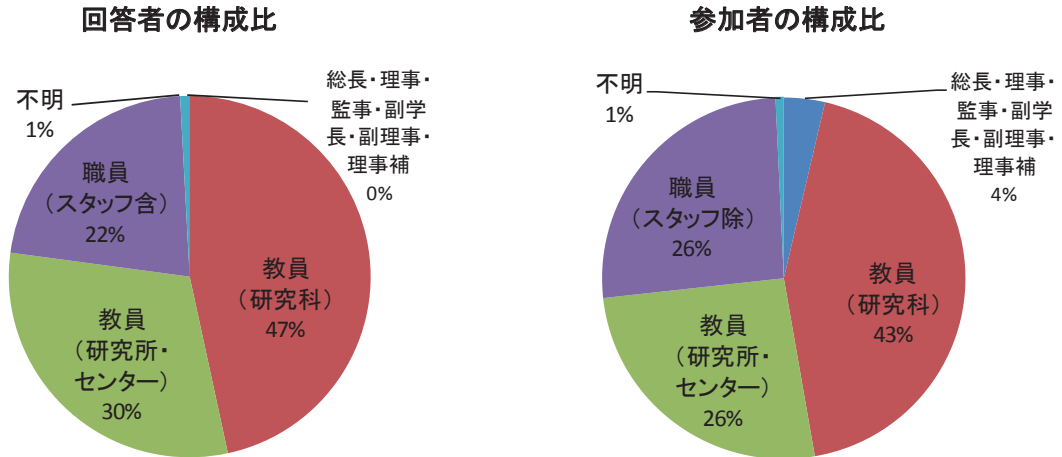
**司会** これをもちまして第19回全学教育シンポジウムを終了いたします。

皆様のご協力でここまで来ることができました。最後に、参加者の皆さん、ご講演者の皆さんへの拍手をもって終わりたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

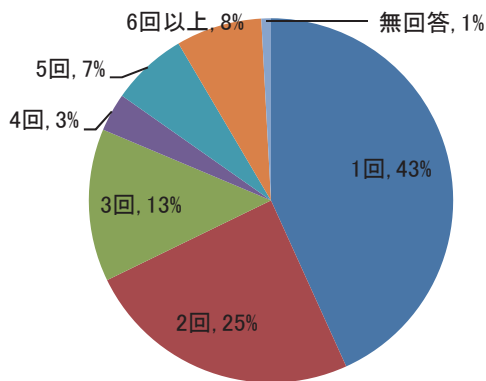
### 13. アンケートの結果について

今後の改善に資するために、参加者全員にアンケート(内容は118ページ参照)を実施した。

- 参加者数(スタッフ含) 273名
- アンケート回答数 118名(スタッフ22名除く アンケート対象者251名)、回収率47.0%

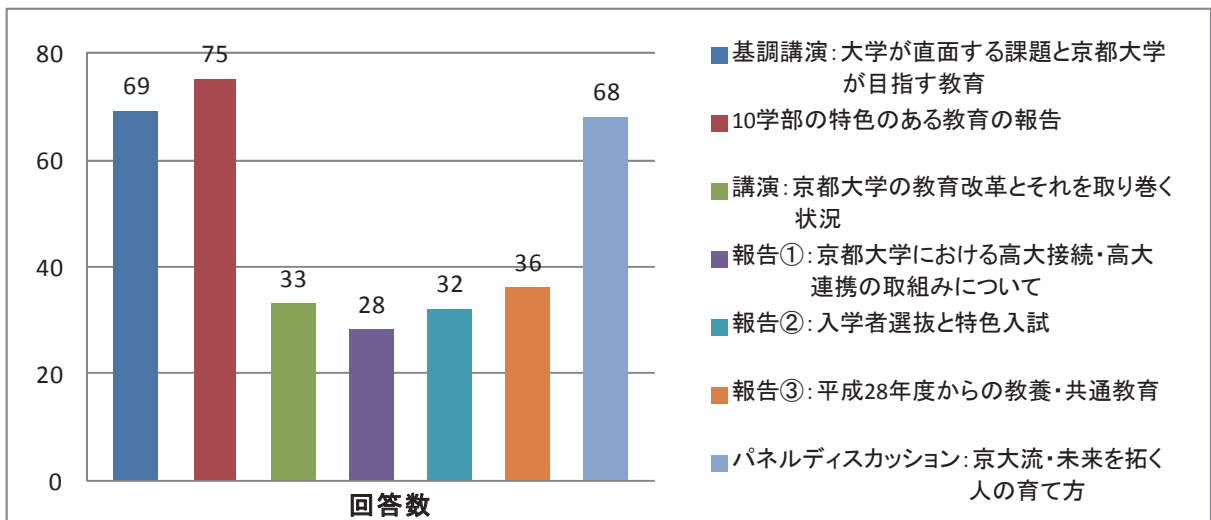


#### 1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。



#### 2. 今回のシンポジウムについて

① 良かったプログラムに  をつけてください。(複数回答可)





② プログラムの内容について、感想をご記入ください。

■ 教員(研究科)

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
	○						(10 学部の報告が)京大が多様な学部で構成されている事が理解できた。有意義だった。
	○						10 学部における教育体制の特色を端的にまとめて紹介してもらえたので、非常に参考になった。他学部の状況を知ることができて勉強になりました。せっかく作成された Movie でするので、何らかの形で公開(学内のみでもいいので)してもらえるといいなと思いました。
○	○					○	10 学部のムービーとコメントは、なかなか他学部について知る機会がなかったので興味深かった。
				○			10 学部の教育の特長がよくわかりましたが言いつ放して終わった印象です。
	○					○	10 学部の特色ある教育の報告では、他の学部もそれぞれに様々な工夫をなさっていることがわかり、大変参考になりました。ビデオのまとめ方や段取りも非常によくできていました。ご担当者の皆様に心よりお礼を申し上げます。パネルディスカッションでは、大手前高校の校長先生と、OGの Wantedly CEO の方が、日頃知らない話を聞かせてくださって、興味深かったです。特にOGの方は、場違いな立場にも拘らず堂々と振る舞われ、有意義なご発言をなさり、若いのにご立派だ、さすがだと感心しました。
○		○					10 学部の特色は、どうも表面的な映像内容になっているように感じる。何が共通で問題なのか、どこが違うのか、互いに取り入れられる要点はないのか?などの議論があるべきでは。
○	○	○	○	○	○	○	他学部の教育システムを知ることができて勉強になった。高大連携はいい取り組みだと思うので、ぜひ機会を増やすべきだと思った。コースツリーは卒業までの経路を見せることで、やる気に繋げる意図がある一方、専門学校のように学生の選ぶ喜びを奪っているようにも感じた。
	○						他学部の教育への取り組みが良く理解できました。今後の参考にしたいと思います。動画による報告は良かったですが、音声聞き取りづらかったのと、文字や図が一部見えづらいのが少し残念でした。
○	○		○			○	他学部の教育内容を知る機会が少ないため、大変参考となった。
○	○					○	他学部の取り組みが聞けてとても参考になった。
	○						各学部の履修条件の違いなど、他学部の教育について知る機会が得られて良かったです。

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
○	○					○	部局ごとに教育のあり方がまったく異なる、ということが前提としてあるなかで、自分が属するのとは別の部局の状況を知るうえでは有益な内容でしたが、部局横断的に広くあてはまる有効な取り組みがあるとは思えないので、「京大流」という枠が設定できるのかどうか疑問に感じました。 あとは、産業界との「マッチング」に収斂することがない教育の側面とその文化的意義について、大学としてもっと強くアピールしていけないものかと歯痒く思いました。
	○					○	学部の特徴紹介は、確かに他学部の状況がよくわかりましたが、別に「特色」として強調するまでもない事例も多かったという印象です。また、「うちはこんな風にうまくやっています」という事例よりも、「こんな事に困っています。これがうまくいきません。」といった事例を紹介してもらう方が、より有意義ではないでしょうか。成功例より失敗例の方が、学ぶべき点が圧倒的に多いと思います。
○	○						普段、他学部で行われている教育に関する取り組みはなかなかきけるものではなく、これらが1つのセッションでできたことは非常に有意義であった。
○	○						普段、他学部の教育内容や取り組みは全く知らないことだったため、非常に新鮮でした。またムービーを流すアイデアはよかったと思います。最後までひきつけられました。
○							あまりに長すぎませんか。午前中だけで十分ではないでしょうか。例えば、10学部の特徴と取り組みを知ることは有意義だと思いますが、スライドを作成すれば十分で、ビデオを作る必要はなかったように思います。そのために費やした時間や費用を他のことに利用してほしいです。
○	○	○	○	○	○	○	いずれも大変興味深うかがいました。京都大学として、10年後、20年後にどのような立ち位置をめざすのか(地方大学として、関西の大学と競争? それとも、世界の中の Kyoto U?)。それに基づく、どういう教育、学生の育て方をするのか。今後議論があればと思いました。 仲さんのおっしゃるように、アインシュタイン、山中先生のような魅力のある学生が多くいることは大変重要だと思います。
○	○		○			○	インターンシップは実社会でのフィールドワークだと捉えることもでき、京大の精神にとってもあっていると思う。それを数ヶ月～半年、1年としっかりできるカリキュラム(選択・時期の柔軟性)を考えていくことが必要だと感じた。「こころざし」「良い学生」に関する議論が考えさせられました。

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
					○		<p>学習会に近い内容だなという印象を持ちました。聞いて良かった点は以下の2つです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特色入試を導入せざるを得なかった理由とその起源→なぜ京大でわざわざ推薦入試をしなければならなかったか、理解できなかったから</li> <li>・教養・共通教育の変更点→まとめて話を聞いたのは初めてだったので、方向性としては良い方向に向かっていると思います</li> </ul> <p>おもしろかったのは大手前の先生と卒業生の女性の方の話かな。</p>
○	○		○	○		○	<p>軌道修正の機会は現状よりも改善すべきと考える。しかし、素質・能力が伴う修正が重要で、軽率な修正を防ぐ必要があるだろう。</p> <p>多様であることは京大らしさの一つであろうが、京大らしさ=多様は少し考え直すべきだろう。”オリジナル”であることが京大生の良さであり強みである。”変人”さを売りにする仕組みをつくりたい。</p>
○	○	○	○	○	○	○	<p>ご講演、ご報告など勉強になりました。ありがとうございます。社会の変化に対応しつつ、安全で安心できる魅力あるキャンパスをつくっていくことが大切であることはいうまでもないです。ですが、昨今の学生に対する教育の流れをみると、京大のヒドウン・カリキュラム(雑多で猥雑なものを含む自由な雰囲気、個人を尊重する気風)などが薄められていくような不安も少し感じます。学生を「ほっておくこと」、「生徒として扱わないこと(学生として扱うこと)」も時には必要かと思えます。自身が学生の時には、グループワークやディスカッションは苦手で、1人で思う存分、好きな本を読み、好きな講義を聴き、文章をまとめるのが好きでした。今でも、声には出ていないが、そのようなタイプの学生(1人でほうっておいてほしい)は京大に多いかもしれないと思います(時代の変化とともにむずかしいとは思いますが)。</p> <p>WANTEDLYの方が、ミスコンの話を学生時代の良い思い出としてされていましたが、私はそういうものを大学に持ち込むのに反対なので、やや違和感を感じました。大学時代にやることってもっと他にあるのでは・・・と(旧いかもしれませんが)。</p>
○	○					○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学の入試と教育の見通しを得ることができた。</li> <li>・教育を語ると原理的になりがちであるが、なかなかうまく回避していた。</li> <li>・入試を相対化するのが教育の役割である以上、入試の技術論は時間と労力の浪費だと再認識した。</li> </ul>
○	○	○	○	○	○	○	<p>アドミッションポリシーはボーダーラインでこそ考慮すべきだと思います。大手前高校の入試は参考にすべきだと思います。</p>

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
		○				○	志、意欲など話題になったキーワードは評価が困難なものであるが、大変重要なエレメントであると考えます。
						○	仲さんの「志」をめぐる発言が、最も印象的で共感いたしました。「良い学生を取る」目的が、大学の魅力/ランキングを上げるため、というのが全体の印象であり、それは学生を道具化しているようで、疑問です。もちろん入試/受験制度の犠牲になっているような学生がいることも実感としてわかりますが、そうした学生の万能性をのばしてゆくのが大学の義務であり責任であると思います。
○	○					○	仲さんのように、卒業して10年以内の卒業生をパネリストに話してほしい。
						○	仲さんのお話が新鮮でした。
			○		○		社会人の方の講演は面白かったが、むしろ、学生時代から意欲を持って何かにチャレンジをしていた人は、本学ではレアケースである。学生時代には普通に(言葉は悪いが目立たずに)勉強をしてきて、社会人になった方の体験談や学生・教員へのメッセージを書くほうがシンポジウムとしては適切であったと思われる。
						○	人を育てる、その意味で大学(京都大学)を考えるきっかけになりました。
○				○	○	○	基調講演で総長の考えが直に聞けたのはよかった。
				○		○	現状を認識するという意味ではよい内容なのですが、改善するにはどうすればよいかということについての議論は少し薄かったかもしれません。
			○	○	○	○	「よい学生」を採ると考えるとき、全ての学生を個別に扱いますが、「1000人の集合としてのよい学生の組み合わせ」を採るということも大事かもしれません。
	○					○	各プログラムの持ち時間が短いので、もう少し突っ込んだ話が聞けなかったのが残念であった。
○	○	○	○	○	○	○	初めての参加のためか、学部教育に深く関わっていないためか、講演内容は全体的に新鮮で興味深く聞きました。しかし申し訳ないですがパネルディスカッションそのものはそこまで興味が持てず、ゲストお二人の話のほうが面白かったです。
○	○	○	○	○	○		全学教育に関する最近の知識が乏しかったため、どのお話も大変為になりました。
○	○						「平成28年度からの教養・共通教育」は勉強になった。
○		○	○				執行部の考えがわかって、良かった。



① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
			○				総長ご自身が、一連の教育改革を、本気でやる気があるのか、よくわからなかった。
○							総長の考える「京都大学が目指す教育」のイメージが良く分かりました。この点は良かったと思います。一方、それ以外の報告・講演は状況報告のようなものばかりで、興味深いものではありませんでした。
○				○	○		内容が多すぎて、理解がついていかなかったのが残念です。
○		○					議論すべき内容が整理されており、また講演もよかったと思います。非常に有意義な時間であったかと思います。
○	○	○	○	○	○	○	昔より大分良い。
○	○					○	興味深い内容でした。準備された方々に敬意を表します。

■教員(研究所・センター等)

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
	○					○	「10学部の特色のある教育の報告」は、各学部の工夫と努力について知ることができ、さらには制作されたビデオの完成度が高く、大変印象に残った。惜しむらくは、各学部の教員へのインタビューの際、周りのノイズが大きく、やや聞き取りづらかったのが難点であった。が、それらを差し引いても、大変良く作られたビデオであった。
	○						「10学部の特色のある教育の報告」を聞き、学部により教育方針に差があることが分かりました。
○	○						10学部の動画はよくできていて、かえって表面的な見栄えばかりで本質を隠すのではないかと思った。しかし、見ているうちに、各部局の先生方の真剣な思いが感じられるようになった。参考にはなるのだが、一人で実践できることには限界がある。こうした動画制作やFDの準備にここまで労力をかけるべきか疑問ももった。
○	○						他学部の様子、課題を知ることができ、勉強になった。 映像資料をみて、広報力の重要性を実感した。 部局ごとの伝統や工夫を実感する一方で、せっかく一つの大学の中で一緒にいることの強味があまり生かされていないように感じた。

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
○	○			○		○	とくに各学部の教育の特色が短時間でも知れたのがよかった。
							午前の10学部のムービーは、このシンポには有益だったと存じますが、他でも上映されたりなさるのでしょうか？理学部に長く居た経験に照らしますと、「学部の」特色ある教育という一側面は示せても、「学部の」ということで各教室の特色が捨象され、「理学部」の教育の本日が全く伝わらないものでした。他学部のムービーも同様かと推察しました。このシンポの聴衆以外に受け手をイメージできませんでした。
	○					○	各学部の教育実践は互いにあまり知られていない。大変な手間だったと思うが、短いビデオクリップを使って情報をシェアするのはよい試みだったと思う。またご登壇いただいた先生などキーパーソンが見えたことも重要でこれらの方々のネットワークでコミュニティ形成ができるといいのではないかと。それぞれの特徴ある実践はその裏に大変なご努力があるのだと思う。どういう点に配慮し、どう準備し、どう改善を続けてきたか、どういう課題をなお抱えているか、など実践者の視点からの苦勞が分かるといいのではないかと。
○		○		○	○		APとCPは充実していたのに対して、DPは皆無？
					○		アマチュア集団の話合いという感が否めない。目的意識が不明確で、この後にどの様な action plane が出てきて、それらを京大の教育(入試)制度をどの様に具体化できるのか、そこまで詰めて講義し実行しなければ、年一回恒例のお祭り以外の何物でもない。
○		○				○	いずれのプログラムも、これまであまり取り上げられていない話題が含まれていて大変参考になった。
							感覚的に教育の重要性を理解するだけでなく、データに基づく教育改革が必要と思います。全て改革するのではなく、焦点を絞るのがよいと思います。(ex. 留年者をへらす)
○	○					○	基調講演の内容はすばらしかったが、資料が乱丁等のため参照しにくく残念であった。 留学生は必ず京都大学のファン、京都のファン、日本のファンにしなければならない。絶対にその逆にしない努力を。 京都アカデミアは是非実現させたい。 学部教育比較は大変興味深かったが、数を欲ばりすぎ。しばってより詳しい方がよかった。大きな学部は多様なはず。 山極総長のパネルディスカッションでの発言にかなり強く共感できた。

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
○		○				○	現状と課題を把握できたことは、よかったですと思います。様々な考え方があり、まとめていくことが難しいことは理解できますが、是非とも前向きな議論を重ねて頂きたく存じます。
	○					○ ○	今年は学部教育の映像・コメントやクリッカーを使ったフロア参加など新たな試みがあり、新鮮であった。
○	○	○	○	○	○	○	これまで20回近く開催されてきた実績が感じられ、プログラム内容が良く纏まっていると感じました。
							制度やカリキュラムの改革は教える側から検討され、実施されるものであるため、大学という全人的な教育の場の一側面に光をあてるにすぎません。学生の自己実現に向けて、課外活動や学外活動を含めて、京都大学がどのような場を提供しようとするのか、どのような魅力をもっているのか、自省する機会があって良いように思う。
○	○					○	どのような人材を輩出するのか、明確なビジョンを示すことは重要と再認識した。ただ、目標を達成するための取り組みについては、一貫性を感じず、物足りなさが残った。
○	○					○	入試～初年度教育の話が多かった。京大として、どのような人を輩出するかも重要に思う。
○						○ ○	山極新総長の考え方を知ることができた。平成28年度からの教養・共通教育の改革内容が整理できました。高校の考え方や、現状が解かった。卒業生の提言が生の声として新鮮だった。
○	○						山極総長の講演では、具体的データやご自身のビデオ講義紹介などを交えて簡潔なプレゼンがなされ、理解しやすく親しみやすい内容であった。10学部のビデオ紹介は、かなり駆け足ではあったが、特色を掴むうえでは、有意義であった。
○	○				○	○	自分が関わってこなかった他研究科の内容が興味深かった。総長の基調講演も京都大学らしく面白かった。京都大学は wild でいくというメッセージを感じた。
○	○					○	私自身は実験所所属のため、全学共通科目との接点は少ないが、プログラム全体を通して現在議論されている事柄をある程度理解することができた。様々な取り組みが紹介されており、また、フランクな意見が交わされていたので、有意義なシンポジウムだったと思う。
○				○	○		京大が今何を重要視しているのかがよくわかって、仕事をする上で参考になった。

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>					現在の各学部における教育の取り組みと問題点についての概要を知ることができて、とても参考になり、有意義であった。ただ、京都大学らしい教育について、具体性があまり感じられず、いまひとつ良く分からなかった。クリッカーを用いたパネルディスカッションだったが、実際に使用したのは1回のみで、今回はお試しの域を出なかったのが残念でした。
	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	外部の方の参加もあり、充実していた。
<input type="radio"/>						<input type="radio"/>	京大外の方々の参加がとてもよかった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	卒業生でかつベンチャー起業家である Wantedly 仲 氏の発言が大変興味深かった。今後もそのような立場の方を積極的に招いてほしい。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>					<input type="radio"/>	短い時間に出来るだけ濃い内容にしたいという、関係者の熱意と努力を感じました。良く練られてまとめられていたと思います。初めての参加で不勉強のためだと思いますが、今まで議論されてきた教養・共通教育の理念とあり方について簡単にでも報告して頂き、その上で学部の教育について発表して頂けるともっと深まる気がしました。
	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>				入試改革などの危機感もあり、迫力のある内容でした。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	勉強にはなるのですが、聞いてばかりいるせいで少々疲れます。

■職員

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
<input type="radio"/>		<input type="radio"/>				<input type="radio"/>	「気づき」の多い内容でした。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>						10学部の教育を映像で比較して見ることができたので、非常に有意義でした。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>					<input type="radio"/>	学部のFDビデオ、音声に若干聞き取りにくいところがあり、企画が面白いだけに残念に思った。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	京都大学の教育の「今」が分かりやすく説明されるプログラム構成で、事務職員としてとても参考になりました。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大学の進むべき方向が分かってよかった。
						<input type="radio"/>	本学関係者以外の方々からの意見を多く聴くことができている。

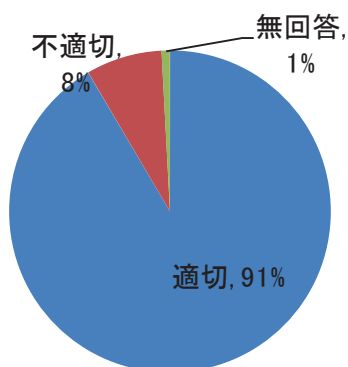


① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基調報告	10学部	講演	報告①	報告②	報告③	パネル	
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	インターンシップの位置付けを考えることができました。仲さんの話が新鮮でよかったですと思いました。
<input type="radio"/>						<input type="radio"/>	柴氏と仲氏の話は非常に面白かった。
						<input type="radio"/>	仲さんがおもしろかった。
	<input type="radio"/>					<input type="radio"/>	柴さんと仲さんのお話は大変興味深く刺激的だった。お二人の熱いものが伝わってきて、仲さんのお話は学生にも聞く機会をつくることができればよいと思う。学部によって教育の内容が異なっていることも初めて知る話で興味深かった。
<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	入試関係では過去の流れより、現在のデータに基づく分析や傾向をもって紹介してほしかった。 外部の方の話が興味深かった。 もっと京大を批判する意見があっても良い。
	<input type="radio"/>					<input type="radio"/>	パネルディスカッションが非常に良かったです。仲さんのご意見が、皆をリードしていて議論が深まりました。総長のご提案が一石を投じていて興味が引かれました。プログラムの内容は統一した方が良いと思います。高大接続なのか等、テーマを絞るべき。シンポジウムの目的をはっきりするべき。教員が参加しているので、パネルディスカッションを通じて会場全体で議論、討論すべき。
	<input type="radio"/>						プログラムとしては全体的に良かったが、少し盛り込みすぎたように感じた。折角「10学部の特色ある教育の報告」でインタビューをビジュアル化するというおもしろい試みをされたのだから、それについての質疑応答やこれについてのパネルディスカッションもあれば、より深いものになったように思う。パネルディスカッションは時間が短すぎてテーマからそれたように感じた。もう少し時間を取り、まとめる時間があったほうが良い。
	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				<input type="radio"/>	プログラムをもう少し絞り、個々の内容を充実した形で行ってほしい。
	<input type="radio"/>					<input type="radio"/>	大学でどのような教育や取り組みが行われているかを知ることができる良い機会となりました。事務職員も教員や学生に間接的に支援を行っていますが、対象の方々が何をしていたり何を必要とされているのかを把握しておくことは大事だと思いました。

■不明

① プログラム (複数回答可)							② プログラムの内容について、感想をご記入ください。
基 調 報 告	10 学 部	講 演	報 告 ①	報 告 ②	報 告 ③	パ ネ ル	
○	○	○	○	○	○	○	適切だと思う

### 3. シンポジウムの開催時期について、ご意見をお聞かせください。

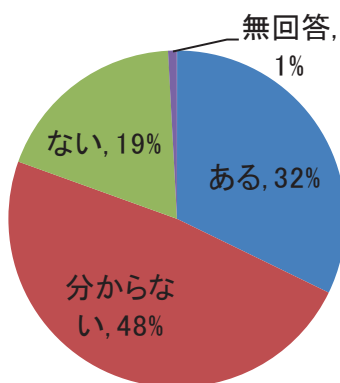


※適切でないと回答した方 → 具体的な開催希望時期をご記入ください。

- ・11月祭の間に。[教員(研究科)]
- ・8月末(大学院入試の時期と重ならないよう)。[教員(研究科)]
- ・9月中旬。[教員(研究科)]
- ・9月下旬。[教員(研究科)]
- ・もう一週間後に。[教員(研究科)]
- ・もう一週間後。[教員(研究科)]
- ・9月後半。[教員(研究所・センター等)]
- ・7、8月。[職員]
- ・9月中旬。[職員]

### 4. その他

① 今回の討論内容を所属する部局で話合う機会がありますか。



※「ある」と答えられた方にお尋ねします。それはどのような機会ですか。

- ・学科会議等。[教員(研究科)]
- ・カリキュラムの改善を論じる際。[教員(研究科)]
- ・教育委員会。[教員(研究科)]
- ・教員懇談会。[教員(研究科)]
- ・教室会議等。[教員(研究科)]

- ・教室会議など、会議報告があると良い。[教員(研究科)]
- ・教授会。[教員(研究科)]
- ・教授会報告。[教員(研究科)]
- ・研究科会議(教授会)での報告。[教員(研究科)]
- ・研究科会議など。[教員(研究科)]
- ・雑談。[教員(研究科)]
- ・会議。[教員(研究科)]
- ・学部の教育シンポジウムや教育制度委員会等。[教員(研究科)]
- ・教務委員会、全学共通教育委員会など。私は参加できないのでわからないが、教授会、専攻長会議、将来計画委員会などでも取り上げられる可能性はあるでしょう。[教員(研究科)]
- ・工学研究科運営会議。[教員(研究科)]
- ・将来計画委員会。[教員(研究科)]
- ・情報学研究科も参画している学際融合センターの高度情報教育基盤ユニットで。[教員(研究科)]
- ・教授会で報告。[教員(研究所・センター等)]
- ・教授会において、参加教員がシンポジウムの簡単な報告をおこなう。[教員(研究所・センター等)]
- ・国際高等教育院の会議にて。[教員(研究所・センター等)]
- ・所属教員全員が参加する会議。[教員(研究所・センター等)]
- ・スタッフ・ミーティング。[教員(研究所・センター等)]
- ・制度的な枠内と、枠外の双方。[教員(研究所・センター等)]
- ・部局の会議、教員同士の会話。[教員(研究所・センター等)]
- ・教授会で報告します。[教員(研究所・センター等)]
- ・私的な集まりや懇親会など。[教員(研究所・センター等)]
- ・所員会議においてシンポジウムの内容を報告する。[教員(研究所・センター等)]
- ・専攻会議やコース会議の場。[教員(研究所・センター等)]
- ・本務ではないが、情報環境機構などサポート業務でのヒントとなる。[教員(研究所・センター等)]
- ・テーマの採り上げ方などについて。[職員]
- ・事務内の連絡会、ミーティング、教育関係委員会。[職員]
- ・大学評価や IR の業務。[職員]
- ・業務上の WG など。[職員]
- ・部内打ち合わせの機会など。[職員]

**② 今後このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げるべき討議テーマについて、ご提案があればお書き下さい。(判別不明な文字は■で代用)**

- ・「京大らしい教育とは何か」を、多くの教員で議論する場が必要だと思います。「京大らしさ」も多様であっていいと思いますが、どのような「らしさ」まで許容できるのか、全学である程度の共通認識を持つべきではないでしょうか。現状では、各部局、あるいは教員個々人が、それぞれ自分に都合のいい「京大らしさ」をイメージしていて、かえってマイナスになっている部分もあるように感じます。[教員(研究科)]
- ・京大が求める学生像に合致した入試制度の将来像。[教員(研究科)]



- ・\*今回同様の内容で大学院教育について。
  - \*学生の多様な能力の育成、入試への反映と関連して、教員の能力評価の多様化について。[教員(研究科)]
- ・入試・高大接続について。[教員(研究科)]
- ・2-②の回答に関連しますが、一つの部局にとって有効な改革案が他の部局で通用するとは思えないので、このような全体シンポジウムを何度も開催する意義があるのかどうか、やや疑問です。[教員(研究科)]
- ・2年前から導入している TOEFL-ITP の効果や総括はそろそろあってもいいなと思います。[教員(研究科)]
- ・今、全学共通教育では大きな改革が行われているが、この改革が本当に効果をあげているのか、見極めることが大事だと思う。[教員(研究科)]
- ・学生の意欲を高めることに関する内容。[教員(研究科)]
- ・学生のメンタルヘルス関係。[教員(研究科)]
- ・メンタルトラブル。精神的に問題を持った学生さんとの接し(付き合い)方について。[教員(研究科)]
- ・学生の自死の問題と父兄と大学の関係。[教員(研究科)]
- ・障がい学生へのケア精神面だけでなく、身体的ハンデをせおって頑張っている学生に、大学として(あるいは部局として)どのような配慮やケアをしているか。どうしても少数なので目立たないテーマであるが、当該学生や家族にとっては重要な事項である。[教員(研究科)]
- ・学部を超えた、京都大学としての問題についての考察(留年、受け身の学生等についての対策)。[教員(研究科)]
- ・教育政策を変える方法について考える(政府への働きかけ)。現状を議論の前提となる環境とし■ ■ことが大切。[教員(研究科)]
- ・クリッカーを使った質問の回答を多様な意見、異論をひろえるように、もう少しニュートラルにすべきと思いました。「正しい」回答に導く意図がみえてよくないと思います。もしくは、クリッカーはいらないかと思います。[教員(研究科)]
- ・講義・実習提供に際して発生する文書作成(シラバスなど)、採点、評価等の平準化、効率化などに関する調査・検討。[教員(研究科)]
- ・国際化・留学生・英語という三者の関係性について(どうも話者によって意味内容が異なっている場合が多いので)。[教員(研究科)]
- ・社会教育や生涯学習における大学の役割について。[教員(研究科)]
- ・世界の中での京都大学と教育。世界の他大学の(MIT、ハーバード、Oxford、Stanford etc)教育の実態なども興味があります。[教員(研究科)]
- ・大学院教育とキャリアパス。[教員(研究科)]
- ・テーマは教育で良いと思います。[教員(研究科)]
- ・同様なテーマでゆっくりと説明して欲しい。[教員(研究科)]
- ・パネルディスカッションはおもしろかった。今回の形式のパネルディスカッションはいいと思う。[教員(研究科)]
- ・海外や国内の他大学の取り組みについても情報提供があるとよいと思います。[教員(研究科)]
- ・活躍している卒業生が良かった、悪かったと感じる京大の教育について。[教員(研究科)]
- ・若い卒業生の意見。[教員(研究科)]
- ・京都大学として、どのような教育を行っていくべきか。他大学との違いは何なのか。何を目指すべきなのか。[教員(研究科)]
- ・教育と研究のバランスと、それらワークとライフのバランスの適切性について。[教員(研究科)]
- ・諸外国における社会が大学に求める役割。[教員(研究科)]

- ・研究と教育の分業について。日本には伝統的に附置研究所と学部・研究科という区分がありますが、現在ではあまり機能していないように見えます。各部局内で進めることを検討する時期が来ているように思います。海外の一流大学では教育に対する取り組みがより熱心に行われているというようなことを言う人がいましたが、それが可能なのは教育や運営だけに専念する講師がいるからです。北米や欧州の一流研究大学では、助教授は着任当初ほとんど教える必要がありませんし、大型の研究費を獲得した教授も教えなくてもすみます。また、通常海外では、研究科長は授業負担を免除され、副研究課長は軽減されます。近年、北米でも欧州でも他のアジアの先進国でも、研究と教育の分業が進んできていることも意識してください。研究成果を挙げることがより期待される若手教員が減少する中で、定年引き上げによって高齢の教員が増えているのは憂慮すべきです。研究の生産性の高い若手教員が魅力を感じるような組織作りを考えてください。[教員(研究科)]
- ・今回のような各学部の宣伝のための全学教育シンポジウムであるなら隔年開催で十分と思います。[教員(研究科)]
- ・全学共通教育科目で扱うべき内容。理由:国際高等教育院が、担当教員にヒアリングすらなく、各分野の専門家すら不在の席で様々な変更を勝手に決めている。いつからこのような風土になったのか? 公のテーブルに載せて議論の上、明らかにすべきです。[教員(研究科)]
- ・卒業認定に関して、単位数や卒業研究など卒業年次における就職活動と学業のバランスなど。[教員(研究科)]
- ・\* 大学と大学外の連携。
  - \* 大学院教育(今回の「学部教育」の大学院教育版)。
  - \* 学生の学びと成長をどうデータ化するか?[教員(研究所・センター等)]
- ・現在大学が置かれている状況を改善するための、大学間の連携の取り組み。[教員(研究所・センター等)]
- ・\* ディプロマポリシーを主題にカリキュラムポリシー・アドミッションポリシーを従って考えてほしい。
  - \* 特色入試実施後の検討。[教員(研究所・センター等)]
- ・教育の「実験データ」をどのように取得し、データに基づく改革の方法について。何が今、最重要課題なのか?[教員(研究所・センター等)]
- ・研究所・センター等が担っていくべき学部教育とは?[教員(研究所・センター等)]
- ・部局間連携であるユニットについて、展望など。[教員(研究所・センター等)]
- ・大学院教育のあり方。大学から社会人になる学生に対する教育。[教員(研究所・センター等)]
- ・ゆとり教育、少子化と学力低下。[教員(研究所・センター等)]
- ・過去の全学シンポジウムで掲げた提言や取り組みについて、その達成度や具体的な効果を取り上げてほしい。自己採点も必要であると思います。[教員(研究所・センター等)]
- ・学部専門課程における英語による授業。(これが本格に始まらないと留学生に提供する授業が増えない)[教員(研究所・センター等)]
- ・今回は 1、2 年生を中心にした教養教育が主であったが、学部生、大学院生(さらには社会人)を視野に入れての教養教育について議論しては如何かと思います。[教員(研究所・センター等)]
- ・私は研究所・センターに所属しているため、学部教育にはそれほど多く関われない。が、今後の国立大学では、研究所・センターの研究者も学部教育により深く関わらねばならない。我々がどう関わるか? 関わり方の程度は? 各研究所・センターが抱えるミッションとの整合性は? といった問題について、全学的見地はもちろん、当該学問分野の国際的発展の見地も含めた議論が必要と思われる。[教員(研究所・センター等)]
- ・世界の高等教育の潮流と京都大学の目指すもの。[教員(研究所・センター等)]
- ・大学評価などでアウトカム、エビデンスが求められるようになってきたが、アウトカムのアセスメントについて深掘りして考えられる機会があるとよい。[教員(研究所・センター等)]

- ・中長期的な京都大学のビジョン、戦略など。[教員(研究所・センター等)]
- ・貧困問題と大学教育。[教員(研究所・センター等)]
- ・「外から見た京大」ということで、実際、外からどう見られているのか?ということで、外部より多様な意見を聞きたい。(例えば受験産業は京大をどう分析しているか等)[職員]
- ・京大の教育、自由の学園とは何か?[職員]
- ・これまでの内容にプラスして、京大になじめていない学生の支援、方法、取り組み。全学的なサポート。[職員]
- ・初年次教育について。(全国的な流れや各部局における取り組みなど)[職員]
- ・国際的な学位の質保証やチューニング。[職員]
- ・職員の関わりが単なる準備作業だけでなく、積極的な意見発信にも繋がる必要がある。[職員]
- ・大学(教育)改革に対する全学での取組を(より具体的に突っ込んだ形(ex.教職員の意識改革))プロジェクトとして立ち上げて、毎年シンポジウムで発表する。(20thを節目に)[職員]
- ・認証評価等、さまざまな評価に対する各部局の取り組みについての報告及び意見交換。[職員]
- ・学生のレベルに合わせた教育方法。[不明]

**③ 御自身の授業や所属部局における教育的取り組みに関して、現在抱えている課題や今後に向けてのアイデアなどがあれば、お書きください。**

- ・大学院受験者の減少。本日の先輩→後輩教育の正課科目化(単位認定)による教育と学問への興味涵養が参考になった。[教員(研究科)]
- ・インターンシップは積極的に取り組むべきだと思うが、理系大学院生が数か月研究をストップすることが、大学が積極的に推し進めるべき事か考えるべきである。[教員(研究科)]
- ・教員に男性が多いので、女性の割合を増やさなければ、女子学生が増加傾向にある学部・研究科では、男性教員が気づきにくい問題もあり、学生のメンタルや将来設計まで、ケアできないのでは、と感じています。[教員(研究科)]
- ・英語による授業のみを受けた学生が研究室に配属されたときのコミュニケーション。[教員(研究科)]
- ・課題＝ドロップアウトする学生のケア。学習内容の定着がなかなか上手いかない。[教員(研究科)]
- ・転学部、転学科の容易化は重要、急務と思う。[教員(研究科)]
- ・大学院に関してですが、内部進学者と外部受験者の学力格差が大きく、同じ授業の枠内で対応するのが困難になりつつあると感じています。専門家の育成とカルチャースクール的な機能の中間的なコンテンツを拡充する必要がある?[教員(研究科)]
- ・\*大学院の授業の英語化で議論中です。
  - \*全学としての京大の将来の位置付が重要になるのですが、いまひとつみえていません。[教員(研究科)]
- ・学生と対話する時間をいかに確保するか。[教員(研究科)]
- ・大学院生が学際領域に取り組むにあたり、学部レベルの講義を復習するべき場合がある。その場合に学部履修して単位認定してもらいたい。そうでないために院教育の一部が学部化している。[教員(研究科)]
- ・土・日・祝などの学外での教育活動が正規の講義として認められないことが問題なので、認めていただけたらいい。[教員(研究科)]
- ・とにかく忙し過ぎる。様々なとりくみをうまく進めるには教員が余裕をもって取り組める様に、仕事に優先順位をつける。分担を考えるなどするべきと思う。[教員(研究科)]

- ・学生のレベルが相当低下している。[教員(研究科)]
- ・学部の理念と実際に行っている教育との乖離が甚だしい点が課題です。[教員(研究科)]
- ・アクティブラーニングのための支援を組織的にして欲しいと感じた。[教員(研究科)]
- ・学生の講義出欠を把握できる全学的なシステムを構築してほしいパンダシステム等の使用方法に関する説明会を、各部局毎に開いていただきたい。[教員(研究科)]
- ・アクティブラーニング教室の整備アクティブラーニングに必要となる講義教材・映像アーカイブの整備。[教員(研究科)]
- ・人や社会に関する教養教育を積み上げ方式の理系基礎教育の中でいかに展開・深化させていくか。[教員(研究科)]
- ・登録した授業への参加をすぐにあきらめる人が多い。[教員(研究科)]
- ・部局にて:学生への経済支援。競争的資金がついても奨学金等に使えなければ良い学生はやはり経済支援制度の整った欧米の大学へ流れる。部局独自に寄付を募って奨学金制度を作ろうという意見も一部にはあるが、本来は京都大学全体で行うべきこと。交換留学受入派遣。厳しい履修スケジュールの中でも活発な留学交流ができるよう、毎年改善を続けている。学年暦が見直されればいっきに加速されるでしょう。  
自身の授業について:全学共通教育科目については様々な工夫を凝らして順調に運営し、学生の評価も得てきた。しかし国際高等教育院の一方的な判断で知らないうちに勝手に分類や履修条件を変更され、事実上提供不可能になった。私は決して自分のやりたいことを主張しているわけではなく、そのようにとられるのは心外です。自分の科目のことはもう諦めたので結構ですが、それに限らず、他の先生の科目でも分類のおかしいものがあります。しかしそれについて意見を言う場も与えられず一方的に決定されるというシステムの問題を申しております。話し合いの場もなくトップダウンで決める風土は数年前から感じておりましたが、京都大学はこれでよいのでしょうか。「放っておくと教員は勝手なことをする」という性悪説に基づいて大学が運営されているような印象で、侮辱的です。多くの立派な先生方が京大から流出する前に考え直すべきでしょう。[教員(研究科)]
- ・学科レベルでは、改革により学生の学力が向上する可能性は大いにある。しかし、それには、1、2回生時に、専門課程で必要な基礎的な知識、思考力等を養えるようなカリキュラムの体系化が不可欠である。[教員(研究科)]
- ・学び(自学自習)のきっかけをいかにつくっていくか?[教員(研究所・センター等)]
- ・教員の英語力向上のシステムも必要と思います。[教員(研究所・センター等)]
- ・最新の教育ツールに関する説明会も実施してほしい。クリッカーを初めて知りました。[教員(研究所・センター等)]
- ・留学生を受け入れた処で、ついてもらえない。[教員(研究所・センター等)]
- ・自分の授業を、どのようにして参加型に改良するかを考えている。[教員(研究所・センター等)]
- ・マネジメントの階層性や階層性を前提にした連携が意識されていないところが問題だと思う。クラス単位のマネジメントと部局単位のマネジメントの中間が弱すぎて機能不全に陥っている。[教員(研究所・センター等)]
- ・1年生での躓きがその後に影響する、という話があったが、初年次での学生の学習の「生産性」をいかに高めるか、を多角的に考えてみたい。[教員(研究所・センター等)]
- ・高大接続からキャリアパス形成に至る制度設計は必要であるが、同時に極めて難しいと感じている。[教員(研究所・センター等)]
- ・参加型授業は、1つの重要な講義形式と考えています。全学ゼミ・講義の経験を活かして、分野横断的な話題提供をこれからも進めて行きます。[教員(研究所・センター等)]
- ・授業という座学は基本だが、学生と一緒に現場に出るような授業をもっと取り入れたい。[教員(研究所・センター等)]



- ・仲さんのような方が、学部1回生に講演や対談すると、その後の学びの姿勢が必ず変わると思います。特色入試で求める「高い志」は、入学後、大学で受けるシゲキによっても十分形成されるのではないのでしょうか。[職員]
- ・大学院の教育カリキュラムについて、学生にとって適切な負担がどのくらいであるか？(正課の授業に加えて、研究、論文作成、インターンシップ、外国語習得と、大学院生が行うことが望ましいことが多いが、どの程度まで正課の範囲内におさめるべきなのか？)[職員]
- ・入試改革の流れの中で、APがクローズアップされがちですが、むしろDPをより具体化することが、受験生(高校生)にとって重要だと最近強く感じています。(なぜなら、受験生にメッセージとして届く(イメージしやすい)のは、卒業するときの「なりたい自分」であるから。)DPを具体化することが、「良い」学生の獲得(良い志願者の増加)に具体的に結びつくのではないかと考えます。[職員]
- ・職員の役割は、教育研究の単なる補助業務ではなく、教育研究のプロデュースをする役割に変化しつつあることは、高等教育業界では当たり前の話だが、とりわけ国立大学においてはそのような気運がまだまだ醸成されていない。以前に分科会方式で職員部会を設定していたが、今後の開催に当たって検討すべきである。[職員]

#### ④ シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

- ・全体を通して、山極総長のまとめが明確であったと思う。少人数制は推し進めるべきだろう。パネルディスカッションは有意義であった。[教員(研究科)]
- ・吉田キャンパスの時計台の建物で開催して下さい。[教員(研究科)]
- ・貴重なお話、ありがとうございます。勉強になりました。山極先生のムーブ映像がとても良かったです。京大の自由でのびのびかつ知的的好奇心と遊び心あふれる様子が伝わってきました。Wild&Wiseという言葉も良いですね。シンポジウムの感想の補足ですが、入試の多様化、特色入試の導入、学生に対する親切すぎるサービスなど、現在すすんでいる方向に対しては、特にOBの方々には不評です。よく、「何故学力を測る入試ではいけないのか?」「学校がそこまでしてるの?」と問われます。教員間では批判はいいにくいところがありますが、OBの率直な感想としては上記のような批判が多いことは考慮すべきかとも思います。[教員(研究科)]
- ・スライドの文字が小さ過ぎると思います。「クリッカー」の質問がとても見づらかったです。[教員(研究科)]
- ・大変興味深く、各教員にも参加をすすめたいと思います。[教員(研究科)]
- ・京大に自分が教員としている意義を考えることになった。[教員(研究科)]
- ・大学の教育方針の宣伝・啓発にとどまらない、課題と成果を共有できるテーマ性を明確にしていきたい。[教員(研究科)]
- ・午後だけでよいのでは? [教員(研究科)]
- ・主体性のある学生を採れたらよいが・・・という話を中心でしたが、点数はとれる(とれた)が主体性が今ひとつという学生は、京大では入れないのか。入れたらどうするのかという面も考える必要があるかもしれません。[教員(研究科)]
- ・会場がよかった。時間の構成がよかった。[教員(研究科)]
- ・学部によるだろうが、参加者が「回り持ち」で決められているとしたら、たとえば十年に一回ということもあるだろうし、特定の人が毎回のように参加しているという話も聞く。これではこの場で論じられたことが浸透しない。参加者を倍にするかわりに、時計台で開催するとか、多くの人間が参加しやすい時期設定にできないか。[教員(研究科)]
- ・せっかく会場に集っているのに、もうすこし双方向、もしくは、参加者同士のやりとりがあった方がよい。ネット配信でも良いように感じた。[教員(研究科)]

- ・とても有意義でした。ありがとうございました。[教員(研究科)]
- ・以前は泊りがけであったことを思えば、もう少し時間が長くていいと思います。18 時頃まであってもいいのです。[教員(研究科)]
- ・大学上層部の方々の考えや今後の方向性がよく伝わってきました。おおむね賛成できることばかりでしたが、ちょっと気になったのは、「京大にいい学生が来て欲しい」という点が、ちょっと強調されすぎていたところでした。京大でやっている教育研究の素晴らしさを世界中の若者達に伝えること、それ自体が、世界への重要な貢献ではないのでしょうか。どんな幸運があろうと決して京大には来る事ができそうにない世界にいる若者に、山際総長の英語講義が伝わることで、その若者の人生が少し豊かになる。あるいは、どうやっても京大に来る学力をつけられそうにない高校生が「霊長類学、おもしろいやん」と感じてくれる。それだけでもすばらしいではないですか。京大の学問が世に貢献できるとすれば、こういう形の貢献も大いに「あり」ではないのでしょうか。高大連携にしても MOOC にしても、「いい学生に来て欲しい」などという、ケツの穴の小さい発想ではなく、京大に来そうにない人にこそ京大の魅力を伝える、という大きな視野で考えていきたいものです。[教員(研究科)]
- ・大学教育の改善に努めることは大切ですが、それと同時に研究環境も改善していかなければならないということ を常に念頭に置いてください。基調講演の資料にあったように、教員が研究に割ける時間は減少するとともに、研究成果が減少しており、これ以上研究への資源を犠牲にすることは得策ではありません。京都大学がグローバル大学として存在感を維持するためには、各部局が研究業績を高める必要があります。したがって、教育のシンポジウムにおいても、常にそれぞれの取り組みが研究に与える影響という視点を持つべきではないでしょうか。[教員(研究科)]
- ・このシンポジウムは非常に有意義であると思います。しかし、全員が参加することは不可能である。そこで誰が参加すべきなのか、難しい気がします。数年に 1 度出席させていただいておりますが、それで良いのか、その方が良いのか、と毎回考えます。[教員(研究科)]
- ・課題を明確にし、どうやってそれを解決・実現すればいいか、といった踏み込んだ内容を期待していました。[教員(研究科)]
- ・会場からのリアルタイムの質疑応答や意見などが出せなかったのは大変残念でした。収集がつかなくなる恐れはわかりますが、京都大学の教員のみでの会なわけですし、司会がしっかりしていれば十分可能です。次回からは少くとも会場とインタラクティブな時間をおとりください。今まで 9 月中旬だったので学会と重なって参加できなかったが、今回の日程はちょうど参加できてよかったです。[教員(研究科)]
- ・丸一日ということでも少し間延びしていたようにも思います。話題を集約して午後だけの開催にするなど、ご検討頂 けますと幸いです。[教員(研究科)]
- ・もう少し、学生の側からの意見も聞いてみてはいかがでしょうか。[教員(研究科)]
- ・柴先生の話をもっと長く聞きたかった。仲さんは特殊なので、もう少し普通の卒業生を呼んだ方が、大多数の 学生の出口を考える上で勉強になるのではないのでしょうか。[教員(研究科)]
- ・起業家育成プログラムは是非大きく進めるべきと思いました。(仲さんに色々な方を紹介してもらったりして)[教員(研究所・センター等)]
- ・\*グループディスカッションもあった方がよかったですのではないかと  
\* 特色入試の出願資格を見ると、実質的には今の入試でも合格する受験生であるように思われる。選抜法は 難しいが「やる気のある(さまざまな方向の意欲)」学生が欲しい。[教員(研究所・センター等)]
- ・お弁当代がどのような名目の予算で処理されているのかすごく興味があります。[教員(研究所・センター等)]
- ・参加者の目的意識がバラバラ。「これを皆で解決しよう」とか「この課題にどう応えるか」とか参加者の意識と協力を 呼びかけるようなアプローチ？[教員(研究所・センター等)]

・①大学1年生(高校4年生)をメインの読者層に、京大出版会から安価なブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」の刊行を開始した。IT 活用と現場のリアリティをつないで使える知を手に入れるためのフィールド実感、情報処理、異文化理解、編集・発信力など学術的に活用可能なサブ教科書となることを期待しているが、京大校内で共有したり実践的に使うための場が限られており残念。直属の学部を持たない附置センターだからできる教育貢献もあると思う。学内の挑戦的取り組みをどこに持っていくと有効に活用されるかわかりにくい。現在は個別の教員がポケゼミで活用しているが、全学的に展開する、あるいは教育に関心ある先生方と学部をこえて共有できる場があればよいと思う。

②京大出版会・生協と連携したブックフェアや、来年オープン京都ロームシアターや CCC ツタヤとの連携企画を準備している。京都には東京と異なる和の国際都市としての魅力があり、それと京大の地域研究分野の人材をマッチングさせると、京大ならではの人文社会系の国際発信ができると思う。”地域研究”4部局は直属の学部を持たないので、見逃されがちだが、京大の国際化のカギは、分厚い人文社会系の国際交流実績に支えられた最先端科学の展開なのではと思う。[教員(研究所・センター等)]

・今回のように多数の部局の紹介があるのはよかった。[教員(研究所・センター等)]

・きょう飽きることなく一日参加できました。準備、運営にあたられた方々、ありがとうございました。[教員(研究所・センター等)]

・大変お疲れさまでした。有意義な一日でした。[教員(研究所・センター等)]

・「10 学部の特色のある教育の報告」は現状を共有するために適した試みと思うが、性質上、各学部のよいところを抽出しているだけになる。実際には、ダメなところをまともにする取り組みも必要なので、そのあたりをなんとか扱えないだろうか。[教員(研究所・センター等)]

・まず単純に刺激的で楽しかった。また IT 時代の教育とは、教養教育とは、志、色々思い巡らす発端にもなりました。参加して良かったなと思います。感謝致します。[教員(研究所・センター等)]

・昼食時間帯をさまざまな部局の方々の交流の機会にする仕掛けができないか。[教員(研究所・センター等)]

・京大が、平成 28 年度から特色入試を積極的に進めることが北野理事から説明され、このことについて参加者のかなりの割合(半数以上。7 割か?)が肯定的な意見(クリッカー調査)であったところまでは良かった。しかしその後、パネルディスカッションの最終発言において、仲・ウオンテッドリー代表取締役が「私は、何か明確な意識を持って京大経済学部に入學したのではない。何となく入ったのだ」とご発言され、これは特色入試では得られない人材かと考えられた。この発言に対し、教育担当理事が「私も京大に明確な意識を持って入學していませんでした。」とご発言され、特色入試を先頭に立って指揮すべき立場の方の発言ではないと、残念な気持ちになった。[教員(研究所・センター等)]

・熱意が感じられて良かったです。パネルディスカッションの時に、クリッカーを使った意見分布集計がありました。が、数値が一人歩きしないようにお願いします。その場の花心流れを経て、誘導された数値とみておくのが良いかと思います。[教員(研究所・センター等)]

・みなさん、協力してシンポジウムを盛り立てていることが伝わってきました。これからもよろしくお願いします。[教員(研究所・センター等)]

・京大流などの言葉が出てきましたが、京大で育った方々には説明しなくても分かるのかもしれませんが、他大学出身の者には漠然とした概念に感じられました。[教員(研究所・センター等)]

・規模が大きすぎず、アットホームな雰囲気であった。[教員(研究所・センター等)]

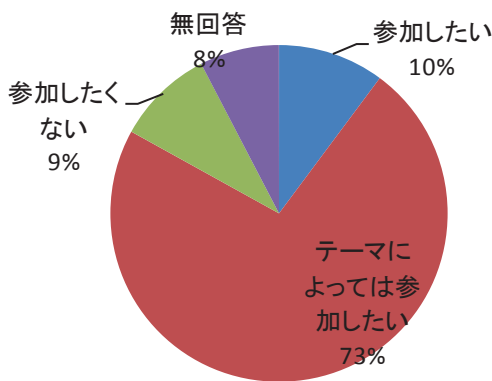
・学部学生も参加可能にし、講演、報告などを短くして、学生も交えたパネルディスカッションの時間をもう少し長くするのもよいのかと思う。[職員]

・プロジェクターの文字が見えにくかったです。[職員]

- ・教育現場の事例の紹介もあり、大変ためになりました。[職員]
- ・来年で 20 回目の節目をむかえるということで、シンポジウムのあり方を再考すべき時期にきているのではないかと思います。(各部局教員の FD がしたいのか、京大の教育改革の方向性を議論したいのか、シンポジウムの実施目的が明確でない気がする) [職員]
- ・教育シンポに各部局の紹介は不要と思う。紹介内容がどちらかと言えば「高校生向け」と感じた。文系学部はほとんど違いがわかりにくいし、農学が ELCAS を紹介するのはちょっと違う気がした。[職員]
- ・業界(大学関係者)以外の方の参加によって、いろいろと議論が活発化して、考えが深められ、「気づき」の多いシンポジウムとなると、今回強く感じました。(多様化の有用性)是非、続けてほしいと思います。[職員]
- ・これまでのやり方でよろしいかと思います。[職員]
- ・このシンポジウムは、全学的なFDイベントの一つとして認識されており、合宿形式で開催されていたことが長らく続いていた。宿泊に際して、シングル対応の確保が課題であるとは思いますが、FDとSDのイベントとして、目玉事業にすることも視野に入れる必要があると思われる。[職員]
- ・本学がどんな教育をしているのか理解してもらおう場としても活用するため、学外にも広報し、出席を促すべき。[職員]
- ・基調講演で「京都大学が目指す教育」があまり聞けず残念だった。[職員]
- ・学生が大学に入る前の高等学校のお話も聞くことができ、大変参考になりました。[職員]
- ・企画立案お疲れ様でした。[職員]
- ・時間が長すぎるように思われる[不明]



⑤ 今後、より具体的なテーマを扱う、比較的小規模なワークショップや勉強会の開催を検討していますが、そのようなワークショップや勉強会が開催される場合、参加を希望されますか。



⑥ 今後ワークショップや勉強会を開催する場合に取り上げるべきテーマについて、ご提案があればお書きください。

- ・特色入試でどのような学生を求めらるか。[教員(研究科)]
- ・高大連携の具体的な取り組み。[教員(研究科)]
- ・1.大人数の講義における授業環境の保全などの教授法の開発と共有。  
2.メンタルに問題を抱えた学生に対するケアの方法の共有。[教員(研究科)]
- ・国際化、真のグローバル化、阪大との共有共栄は？[教員(研究科)]
- ・京大は自由か/京大の自由とは？[教員(研究科)]
- ・高校の先生との交流会←3年生に上がってくるころには精神的な問題を抱えている学生がかなりいるが、その原因が、大学入学以降にあるのか、高校時代にあるのか分からない。学習における高大接続も大切だがメンタルな面での接続を考えられるような場があればよい。[教員(研究科)]
- ・柔軟な学年暦の導入について。(4学期制や秋入学の可否について)[教員(研究科)]
- ・いわゆる「学生支援」の困難さについての問題を取り上げていただきたい。学生との個人面談、クラス担任、アドバイザーなど、「教師」としての力量を必要とする仕事を、「教師」としてのトレーニングを受けていない教員に担当させることで教員がどれほど疲弊しているか、もっと深刻に捉えるべきだと思います。[教員(研究科)]
- ・入試制度、アクティブラーニング教授法。[教員(研究科)]
- ・アクティブラーニング。[教員(研究科)]
- ・イノベーション教育とは何か？[教員(研究科)]
- ・自閉症スペクトラム障害を持った学生等への対応について。[教員(研究科)]
- ・テーマよりも、シンポジウムやワークショップで出された情報や意見交換が大学の運営に反映される可能性がなければ参加しても意味が無いと思います。  
テーマ:1. 学生の学習障害について。前任校(米国)ではFDとして新任教員に必修でした。2. 学生(若い人達)の使うガジェットやソフトウェアについて。Eメールはダメ? LINE? 授業に何を使っているのか、年寄りに教えてください(笑)[教員(研究科)]
- ・入学した後の転学部について。[教員(研究科)]
- ・ワイルドな学生(教員)を育成する方法論。[教員(研究所・センター等)]

- ・全学教育への附置研、センターの関与(近年2段階で縮小されている感がある)。学部教育、全学教育に関わりたい研究所教員も相当数存在する。[教員(研究所・センター等)]
- ・教育ツールの使い方。[教員(研究所・センター等)]
- ・\*クリティカル・シンキングの育て方。
  - \*京大の十年先の目標。[教員(研究所・センター等)]
- ・教学マネジメントの考え方と技法。[教員(研究所・センター等)]
- ・今回、高大接続、企業と人材のマッチングという入り口と出口を考えさせられた。その間に入って学士課程教育が何を指すべきかをじっくり考えられる機会があるとよい。[教員(研究所・センター等)]
- ・今後の国立大学では、研究所・センターの研究者も学部教育により深く関わらねばならない。我々がどう関わるか？関わり方の程度は？各研究所・センターが抱えるミッションとの整合性は？といった問題について、全学的見地はもちろん、当該学問分野の国際的発展の見地も含めた議論が必要と思われる。[教員(研究所・センター等)]
- ・社会科学の研究・教育の意義と将来。[教員(研究所・センター等)]
- ・京都アカデミアに関心があります。[教員(研究所・センター等)]
- ・フィールドワーク、フィールド医学、サバイバル実習など。[教員(研究所・センター等)]
- ・エビデンスに基づいた学生支援。(マッチング・レコメンデーション)[職員]
- ・京大になじめていない学生の支援、方法、取り組み。全学的なサポート。[職員]
- ・教学IRの在り方について(業務の方法等も含めて)。職員が取り組むべき新たな課題について。[職員]
- ・アクティブラーニングの技法と評価について。[職員]

## 平成 27 (2015) 年度京都大学全学教育シンポジウムに関するアンケート

今後のシンポジウムの在り方を検討するために、例年アンケート調査を行っております。忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせ願いたく、ご協力方よろしく願ひいたします。

なお、ご提出は、会場出口の回収箱にお入れいただくか、後日、国際高等教育院企画調整掛（内線：6690、FAX：6691）あてにご送付願ひます。また、以下の URL 及び QR コードからもご回答いただけますので、ご利用ください。（勝手ながら、集計作業の都合上、9 月 16 日（水）までにお願ひいたします。）

URL(PC/スマートフォン用)：<https://reas2.code.ouj.ac.jp/reas/q/40086>（携帯用は末尾を 7 へ）

QR コード(スマートフォン用) (携帯用)

※ 該当する職名に  をつけてください。

- 総長・理事・監事・副学長・副理事・理事補
- 教員（研究科所属）
- 教員（研究所・センター等所属）
- 職員



1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。（これまでに今回を含め、19 回開催されています。）

\_\_\_\_\_回目

2. 今回のシンポジウムについて

① 良かったプログラムに  をつけてください。（複数回答可）

- 基調講演「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」
- 10 学部の特色のある教育の報告
- 講演「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」
- 報告「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」
- 報告「入学者選抜と特色入試」
- 報告「平成 28 年度からの教養・共通教育」
- パネルディスカッション「京大流・未来を拓く人の育て方」

② プログラムの内容について、感想をご記入ください。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

3. シンポジウムの開催時期について、ご意見をお聞かせください。

- 適切である
- 適切でない → 具体的な開催希望時期をご記入ください。\_\_\_\_\_

4. その他

① 今回の討論内容を所属する部局で話合う機会がありますか。

- ある
- わからない
- ない

裏面に続く

※「ある」と答えられた方にお尋ねします。それはどのような機会ですか。

.....  
.....

② 今後このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げるべきテーマについて、ご提案があればお書きください。

.....  
.....  
.....

③ 御自身の授業や所属部局における教育的取り組みに関して、現在抱えている課題や今後に向けてのアイデアなどがあれば、お書きください。

.....  
.....  
.....

④ シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

.....  
.....  
.....

\*\*\*\*\*

⑤ 今後、より具体的なテーマを扱う、比較的小規模なワークショップや勉強会の開催を検討していますが、そのようなワークショップや勉強会が開催される場合、参加を希望されますか。

- 参加したい     テーマによっては参加したい     参加したくない

⑥ 今後ワークショップや勉強会を開催する場合に取り上げるべきテーマについて、ご提案があればお書きください。

.....  
.....  
.....

ご協力ありがとうございました。



#### 14. 参加者名簿

所属等	職名等	氏名
総長	総長	山極 壽一
理事(教育・情報・評価担当)	理事	北野 正雄
理事(財務・施設・環境安全保健担当)	理事	佐藤 直樹
理事(総務・労務・人事担当)	理事	清木 孝悦
監事	監事	丸本 卓哉
副学長(大学改革担当)	副学長	大寫 幸一郎
副理事[桂キャンパス担当(工学研究科長)]	副理事	伊藤 紳三郎
理事補(教育担当)	理事補	木南 敦
理事補(教育担当)	理事補	杉野目 道紀
理事補(教育担当)	理事補	飯吉 透
文学研究科	教授(研究科長)	川添 信介
文学研究科	教授(副研究科長)	平田 昌司
文学研究科	教授	中砂 明德
文学研究科	教授	林 晋
文学研究科	准教授	川島 隆
文学研究科	准教授	児玉 聡
文学研究科	准教授	千田 俊太郎
教育学研究科	教授(研究科長)	子安 増生
教育学研究科	准教授	竹内 里欧
法学研究科	教授(研究科長)	潮見 佳男
法学研究科	教授	唐渡 晃弘
法学研究科	教授	川瀆 昇
法学研究科	教授	船越 資晶
法学研究科	教授	堀江 慎司
経済学研究科	教授	松井 啓之
経済学研究科	准教授	山田 憲
経済学研究科	講師	秋田 祐哉
理学研究科	教授(研究科長)	森脇 淳
理学研究科	教授	上田 哲生
理学研究科	教授	中村 卓史
理学研究科	教授	森 和俊
理学研究科	准教授	池田 隆介
理学研究科	准教授	稲場 道明
理学研究科	准教授	奥山 弘
理学研究科	講師	鈴木 あるの
理学研究科	講師	常見 俊直
理学研究科	助教	石川 時郎
理学研究科	助教	堤 昭人
理学研究科	助教	野田 泰斗
医学研究科	教授(副研究科長)	岩井 一宏
医学研究科	教授	天谷 真奈美
医学研究科	教授	黒木 裕士
医学研究科	教授	武田 俊一
医学研究科	教授	田村 恵子
医学研究科	教授	坪山 直生
医学研究科	教授	山田 亮
医学研究科	准教授	栗本 一基
医学研究科	准教授	笹山 哲
医学研究科	准教授	田中 司朗
医学研究科	特定准教授	山田 正之
医学研究科	助教	佐藤 隆平
医学研究科	助教	山本 康子

所属等	職名等	氏名
薬学研究科	教授	加藤 博章
薬学研究科	教授	竹本 佳司
薬学研究科	准教授	中津 亨
工学研究科	教授(副研究科長)	北村 隆行
工学研究科	教授(副研究科長)	鉾井 修一
工学研究科	教授	大崎 純
工学研究科	教授	大嶋 正裕
工学研究科	教授	白井 泰治
工学研究科	教授	作花 哲夫
工学研究科	教授	高田 滋
工学研究科	教授	瀧川 敏算
工学研究科	教授	竹内 繁樹
工学研究科	教授	中村 裕之
工学研究科	教授	蓮尾 昌裕
工学研究科	教授	原田 和典
工学研究科	教授	松原 厚
工学研究科	教授	米田 稔
工学研究科	准教授	市坪 哲
工学研究科	准教授	蛭原 義雄
工学研究科	准教授	大谷 真
工学研究科	准教授	山上 路生
工学研究科	准教授	斉藤 学
工学研究科	准教授	高橋 良和
工学研究科	准教授	田辺 克明
工学研究科	准教授	谷 昌典
工学研究科	講師	青木 学聡
工学研究科	助教	小島 広之
工学研究科	助教	田村 朋則
工学研究科	助教	森本 大智
工学研究科	助教	弓削 是貴
農学研究科	教授(研究科長)	宮川 恒
農学研究科	教授(副研究科長)	天野 洋
農学研究科	教授	井鷲 裕司
農学研究科	教授	奥本 裕
農学研究科	教授	澤山 茂樹
農学研究科	教授	福井 清一
農学研究科	教授	三上 文三
農学研究科	准教授	後藤 剛
農学研究科	准教授	中嶋 洋
人間・環境学研究科	教授(研究科長)	高橋 由典
人間・環境学研究科	教授	石川 尚人
人間・環境学研究科	教授	上木 直昌
人間・環境学研究科	教授	大川 勇
人間・環境学研究科	教授	小方 登
人間・環境学研究科	教授	小畑 史子
人間・環境学研究科	教授	小島 泰雄
人間・環境学研究科	教授	阪上 雅昭
人間・環境学研究科	教授	辻 正博
人間・環境学研究科	教授	元木 泰雄
人間・環境学研究科	教授	吉田 純
人間・環境学研究科	准教授	栗山 智成
人間・環境学研究科	准教授	小木曾 哲

所属等	職名等	氏名
人間・環境学研究科	准教授	塩塚 秀一郎
エネルギー科学研究科	教授	手塚 哲央
エネルギー科学研究科	准教授	木下 勝之
アジア・アフリカ地域研究研究科	助教	近藤 史
アジア・アフリカ地域研究研究科	助教	藤井 千晶
情報学研究科	教授	高橋 豊
情報学研究科	教授	田中 克己
情報学研究科	教授	中村 佳正
情報学研究科	教授	原田 博司
情報学研究科	准教授	中澤 篤志
情報学研究科	特定准教授	浅野 泰仁
情報学研究科	特定准教授	Adam Jatowt
情報学研究科	特定准教授	大島 裕明
情報学研究科	特定准教授	木村 欣司
情報学研究科	講師	久保 雅義
情報学研究科	特定助教	加藤 誠
情報学研究科	特定助教	關戸 啓人
生命科学研究科	教授	片山 高嶺
生命科学研究科	教授	千坂 修
総合生存学館	特定教授(学館長)	川井 秀一
総合生存学館	教授	惣脇 宏
地球環境学堂	教授(副学堂長)	舟川 晋也
地球環境学堂	助教	坂本 陽介
公共政策連携研究部	教授	建林 正彦
経営管理大学院	教授	川北 英隆
化学研究所	教授(副所長)	辻井 敬亘
人文科学研究所	准教授	高階 絵里加
再生医科学研究所	准教授	廣田 圭司
エネルギー理工学研究所	准教授	宮内 雄平
生存圏研究所	准教授	三谷 友彦
防災研究所	教授	平石 哲也
防災研究所	准教授	倉田 真宏
基礎物理学研究所	准教授	村瀬 雅俊
ウイルス研究所	准教授	土方 誠
経済研究所	教授	西山 慶彦
数理解析研究所	教授	小澤 登高
原子炉実験所	教授	木野村 淳
原子炉実験所	准教授	日野 正裕
霊長類研究所	准教授	大石 高生
東南アジア研究所	准教授	甲山 治
iPS細胞研究所	教授	齊藤 博英
学術情報メディアセンター	教授(センター長)	岡部 寿男
学術情報メディアセンター	教授(情報環境機構長)	美濃 導彦
生態学研究センター	教授	中野 伸一
地域研究統合情報センター	准教授	西 芳実
野生動物研究センター	教授	平田 聡
高等教育研究開発推進センター	教授	松下 佳代
高等教育研究開発推進センター	教授	溝上 慎一
高等教育研究開発推進センター	准教授	酒井 博之
高等教育研究開発推進センター	准教授	田口 真奈
高等教育研究開発推進センター	准教授	山田 剛史
高等教育研究開発推進センター	特定准教授	奥本 素子
高等教育研究開発推進センター	特定助教	岡本 雅子
高等教育研究開発推進センター	特定助教	後藤 崇志

所属等	職名等	氏名
高等教育研究開発推進センター	特定助教	田中 一孝
総合博物館	助教	角谷 岳彦
フィールド科学教育研究センター	助教	鈴木 啓太
こころの未来研究センター	教授	Carl・Becker
国際高等教育院	教授(教育院長)	村中 孝史
国際高等教育院	教授(副教育院長)	喜多 一
国際高等教育院	教授(副教育院長)	吉崎 武尚
国際高等教育院	特定教授(副教育院長)	三輪 哲二
国際高等教育院	特定教授(教育部長)	植松 恒夫
国際高等教育院	教授	岩井 茂樹
国際高等教育院	教授	大野 浩章
国際高等教育院	教授	加藤 信一
国際高等教育院	教授	小山 静子
国際高等教育院	准教授	齊藤 智
国際高等教育院	教授	下林 典正
国際高等教育院	教授	杉山 雅人
国際高等教育院	教授	瀬戸口 浩彰
国際高等教育院	特定教授	武藤 誠
国際高等教育院	教授	田邊 玲子
国際高等教育院	教授	谷 誠
国際高等教育院	教授	服部 高宏
国際高等教育院	教授	丸橋 良雄
国際高等教育院	教授	吉村 一良
国際高等教育院	教授	加藤 立久
国際高等教育院	教授	田地野 彰
国際高等教育院	教授	舟橋 春彦
国際高等教育院	准教授	金丸 敏幸
国際高等教育院	准教授	高橋 幸
国際高等教育院	准教授	田中 真介
国際高等教育院	准教授	田中 俊二
国際高等教育院	准教授	塚原 信行
国際高等教育院	准教授	那須田 周平
国際高等教育院	准教授	山木 壱彦
国際高等教育院	特定外国語担当准教授	伊藤 佳世子
国際高等教育院	特定外国語担当准教授	ルッケル瀬本 阿矢
環境安全保健機構	准教授	中川 浩行
国際交流推進機構	教授	長山 浩章
情報環境機構	教授	梶田 将司
附属図書館	准教授	北村 由美
産官学連携本部	准教授	金多 隆
学生総合支援センター	講師	和田 竜太
学際融合教育研究推進センター	特任准教授	鈴川 由美
総務部	部長	小山 房男
総務部	次長	小倉 一夫
総務部	総務課長	泉 茂樹
総務部	総長室長	岡島 徹
総務部	総長室室長補佐	中尾 浩行
総務部	総長室室長補佐(秘書室長)	松尾 由美
企画・情報部	部長	川内 享
企画・情報部	企画課長	佐藤 邦明
企画・情報部	企画課(IR推進室長)	小川 交洋
企画・情報部	企画課課長補佐(IR推進室長補佐)	河合 明美
企画・情報部	企画課IR推進掛長	辻 謙治
企画・情報部	企画課大学評価掛員	足立 有希奈

所属等	職名等	氏名
企画・情報部	広報課長	岡田 智恵美
企画・情報部	情報推進課長補佐	呑海 和彦
教育推進・学生支援部	部長	三浦 和幸
教育推進・学生支援部	次長	山本 淳司
教育推進・学生支援部	学生課長	藤田 尚弥
教育推進・学生支援部	学生課課長補佐	岸下 智行
教育推進・学生支援部	学生課課長補佐	藤森 隆志
教育推進・学生支援部	厚生課長	小島 光明
教育推進・学生支援部	厚生課課長補佐	嶋村 智
教育推進・学生支援部	教務企画課長	岩井 信孝
教育推進・学生支援部	入試企画課掛長	黒坂 良一
教育推進・学生支援部	入試企画課特定専門業務職員	山本 知弘
宇治地区事務部	総務掛長	大隅 庸弘
北部構内共通事務部	総務課長	横山 陽一
吉田南構内共通事務部	総務課長	眞継 芳春
文学研究科	事務長	廣中 保彦
教育学研究科	掛長	中尾 知里
法学研究科	掛長	上原 和志
経済学研究科	主任	久保 聡志
理学研究科	主任	武岡 良子
医学研究科	事務長補佐	幣 真由美
医学研究科	事務長補佐	荒谷 裕美

所属等	職名等	氏名
工学研究科	部長	竹下 基幸
工学研究科	課長	長谷川 敏之
工学研究科	課長補佐	雪本 伸雄
農学研究科	教務・図書課長	小西 昌宏
アジア・アフリカ地域研究研究科	掛長	福村 輝美
情報学研究科	掛員	濱田 順子
情報学研究科	教務補佐員	池辺 理香
生命科学研究科	掛長	逢坂 薫
総合生存学館	掛員	室谷 沙織
附属図書館	情報サービス課長	井上 恵美
附属図書館	情報サービス課参考調査掛長	櫻井 待子
国際高等教育院	事務長	河原 隆
国際高等教育院	副事務長	中澤 和紀
国際高等教育院	事務長補佐	廣中 理絵
国際高等教育院	専門員	中崎 明

#### ■学外

大阪府立大手前高等学校	校長	柴 浩司
ウオンテッドリー株式会社	代表取締役CEO	仲 暁子

※部局名・職名は2015年9月2日現在



第19回京都大学全学教育シンポジウム  
京大流・未来を拓く人の育て方  
報告書

---

平成28年3月発行

編集・発行 FD研究検討委員会

〒606-8501

京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-2430

---